

史跡斎宮跡

平成19年度発掘調査概報

2009年3月

斎宮歴史博物館



第152次調査区全景（北東から）



第153次調査区全景（北から）

序

平成21年は、斎宮跡の発掘調査を開始して40年目を迎えます。また、昭和54年に国史跡として指定されて30周年を迎えます。

斎宮歴史博物館では、これから概ね3ヶ年の計画で、史跡東部の方格地割の中心部分である柳原区画を集中的に発掘調査していくこととしています。この区画は、平安時代を通じて斎王の宮殿である「内院」が置かれたと考えられている牛葉東区画のすぐ北に接した場所でもあることから、調査の成果が大いに期待される場所でもあります。平成19年度の発掘調査では、平安時代の斎宮跡の官衙域における最大級の建物や、これまでほとんど見られなかった四面庇付建物が多数見つかりました。

今後、発掘調査で得られた遺構・遺物等の検討の成果を、国史跡斎宮跡全体を有効利用していくための史跡整備に反映させていきたいと考えています。

史跡斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたっては、地元明和町、文化庁及び斎宮跡調査研究指導委員をはじめとする多くの方々から貴重なご意見、ご指導、ご助力をいただいたことに厚くお礼を申し上げます。

最後にはなりましたが、発掘調査にあたって様々なご配慮・ご協力いただきました国史跡斎宮跡協議会はじめ、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

なお、この概要報告書が、皆様のご指導をいただきながら、さらに活用されることを願っています。

2009（平成21）年 3月

斎宮歴史博物館

館 長 瀧 上 昭 憲

例　　言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成19年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第152・153・154・156次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が、国庫補助金の交付を受け、調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第155次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告 I』 斎宮歴史博物館 2001年）による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。

SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SF：道路 SH：竪穴住居跡 SK：土坑
SX：土壙墓・墓・埋納遺構 SZ：落ち込み・その他 pit：柱穴
- 6 遺物実測図は実物の4分の1である。遺物写真は縮尺不同である。
- 7 出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。
- 8 遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。
- 9 本書の執筆は、倉田直純・泉雄二・大川勝宏があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究課で行った。また、発掘調査および資料整理については、水橋公恵・西村秋子・杉原泰子・八木光代・水木夏美・大橋由紀・山本達也が補佐した。

目 次

I	前言	(倉田直純)	1
II	第152次調査	(大川勝宏)	7
III	第153次調査	(大川勝宏)	65
IV	第154次調査	(倉田直純・泉雄二)	95
V	第156次調査	(大川勝宏)	105

挿 図 目 次

第 I - 1 図	史跡斎宮跡位置図	3
第 I - 2 図	平成19年度発掘調査区位置図	4
第 I - 3 図	斎宮跡方格地割区画名称	5
第 I - 4 図	史跡斎宮跡における大地区表示	6
第 II - 1 図	第152・153・156次調査 調査区位置図	8
第 II - 2 図	第152次調査 遺構平面図	9
第 II - 3 図	第152・153次調査 大地区・グリッド図	11
第 II - 4 図	第152次調査 土層断面図	12
第 II - 5 図	第152次調査 SB9800平面図・横断面図	14
第 II - 6 図	第152次調査 SK9785・9786平面図・土層断面図	15
第 II - 7 図	第152次調査 SB9750・9751平面図	18
第 II - 8 図	第152次調査 SB9750・9751横断面図 SD1326土層断面図	19
第 II - 9 図	第152次調査 SB9778柱穴遺物出土状況図	22
第 II - 10 図	第152次調査 SX9806平面図・断面図	22
第 II - 11 図	第152次調査 出土遺物実測図(1)	34
第 II - 12 図	第152次調査 出土遺物実測図(2)	35
第 II - 13 図	第152次調査 出土遺物実測図(3)	36
第 II - 14 図	第152次調査 出土遺物実測図(4)	37
第 II - 15 図	第152次調査 出土遺物実測図(5)	38
第 II - 16 図	第152次調査 出土遺物実測図(6)	39
第 II - 17 図	第152次調査 出土遺物実測図(7)	40
第 III - 1 図	第153次調査 遺構平面図	67
第 III - 2 図	第153次調査 土層断面図	69
第 III - 3 図	第153次調査 SB1080平面図・横断面図	71
第 III - 4 図	第153次調査 出土遺物実測図(1)	78
第 III - 5 図	第153次調査 出土遺物実測図(2)	79
第 III - 6 図	柳原区画の主要遺構配置(I - 4～II - 1期)	86
第 III - 7 図	柳原区画の主要遺構配置(II - 1期～)	87
第 IV - 1 図	第154次調査 調査区位置図	95
第 IV - 2 図	第154次調査 遺構平面図・土層断面図	97
第 IV - 3 図	第154次調査 出土遺物実測図	99
第 V - 1 図	第156次調査 平面図・グリッド図・土層断面図	106
第 V - 2 図	第156次調査 出土遺物実測図	108

写 真 図 版 目 次

卷頭 1	第152次調査区 全景（北東から）	
卷頭 2	第153次調査区 全景（北から）	
II - 1	第152次調査 遺構(1) 調査区全景（北から）／調査区全景（西から）	49
II - 2	第152次調査 遺構(2) SB9072(西から)／SB9687・9688（東から）	50
II - 3	第152次調査 遺構(3) SB9702（東から）／SB9706・9707（東から）	51
II - 4	第152次調査 遺構(4) SB9712（北から）／SB9735（西から）	52
II - 5	第152次調査 遺構(5) SB9739（北から）／SB9750・9800（北から）	53
II - 6	第152次調査 遺構(6) SB9750（西から）／SB9800（北から）	54
II - 7	第152次調査 遺構(7) SB9800（西から）／SB9764・9766（北から）	55
II - 8	第152次調査 遺構(8) SB9776周辺（北から）／SB9779（西から）	56
II - 9	第152次調査 遺構(9) SB9782・9783（北から）／SB1391・1392（北から）	57
II - 10	第152次調査 遺構(10) SB9110・9194（北から）／SB9802（北から）	58
II - 11	第152次調査 遺構(11) SB9007（北から）／SE0276（西から）	59
II - 12	第152次調査 遺構(12) SK9785（北から）／SD9046（南から）	60
II - 13	第152次調査 遺構(13) SD1326（西から）／SD1326土師器鍋出土状況（西から）	61
II - 14	第152次調査 遺物(1)	62
II - 15	第152次調査 遺物(2)	63
II - 16	第152次調査 遺物(3)	64
III - 1	第153次調査 遺構(1) 調査区全景（北から）／調査区全景（東から）	88
III - 2	第153次調査 遺構(2) 西調査区全景（北から）／SB1080（東から）	89
III - 3	第153次調査 遺構(3) SB1080の第20次調査で完掘した柱穴（東から）／SB9817（北から）	90
III - 4	第153次調査 遺構(4) SB9012・9821（西から）／東調査区全景（東から）	91
III - 5	第153次調査 遺構(5) SD1395・6802（西から）／SD9044（北から）	92
III - 6	第153次調査 遺構(6) SE9835（北から）／SK9853（西から）	93
III - 7	第153次調査 遺物	94
IV - 1	第154次調査 遺構 調査区全景（西から）／SD0170（東から）	103
IV - 2	第154次調査 遺物	104
V - 1	第156次調査 遺構(1) 調査区全景（北から）／SD9866～9868（東から）	111
V - 2	第156次調査 遺構(2) SK9869・9870（東から）／SD9871（西から）	112
V - 3	第156次調査 遺物	113

表 目 次

第 I - 1 表	平成19年度 発掘調査一覧	2
第 II - 1 表	第152次調査 掘立柱建物一覧表	27
第 II - 2 表	第152次調査 遺構一覧表	30
第 II - 3 表	第152次調査 出土遺物観察表	42
第 III - 1 表	第153次調査 掘立柱建物一覧表	74
第 III - 2 表	第153次調査 遺構一覧表	75
第 III - 3 表	第153次調査 出土遺物観察表	80
第 IV - 1 表	第154次調査 遺構一覧表	101
第 IV - 2 表	第154次調査 奈良古道南側側溝一覧表	101
第 IV - 3 表	第154次調査 出土遺物観察表	102
第 V - 1 表	第156次調査 遺構一覧表	107
第 V - 2 表	第156次調査 出土遺物観察表	109

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い、昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの調査成果の蓄積から、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡解明を中心となって進められてきたが、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っているほか、鎌倉時代以降の実態についても解明しなければならない課題として残っている。

一方、史跡整備については平成15年度以降中断しており、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まってきたことから、平成18年度に史跡整備の在り方検討会を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、当面の課題として当該地区における実態解明と土地の公有化が急務とされた。

発掘調査

上記の課題を受け、平成19年度から3ヵ年計画で中院想定地とも目されている柳原区画の実態解明を重点的に進めることとなった。そこで平成19年度は、通常の発掘調査事業に加え、「こころのふるさと斎宮づくり」事業との2本立てとし、例年の3倍にあたる約3,000m²の調査を実施することとなった。

柳原区画では、これまでに第8-10次調査（範囲確認トレンチ調査）、第10次調査（広域圏道路）、第20次調査、第28次調査、第143次調査が実施され、奈良古道や区画道路のほか、区画の南西部において平安時代初期の大型柱掘形をもつ建物が複数棟存在することがわかつっていた。今回は、その東側にあたる区画中央部の遺構状況を明らかにするため、北寄りで第152次調

査を、南寄りで第153次調査を行った。とりわけ、第20次調査で確認されていた大型掘立柱建物SB1080の規模、平面構造、建替え状況等の確認は最大の関心事であった。また、区画北東隅近くで、北辺を区画する道路及び側溝の確認を目的とした第156次調査を実施した。このほか、斎宮歴史ロマン広場と斎宮歴史博物館とを結ぶ遊歩道沿いで、奈良古道の南側溝を確認する目的で第154次調査を実施した。

整備

平成19年3月にまとめた「史跡斎宮跡 史跡整備の在り方検討報告」に基づく史跡東部の整備に向けて、調査研究指導委員会の課題別部会として学識経験者・地元住民等8名の委員からなる斎宮跡整備・活用検討会を設置し、柳原区画の調査と併行しながら整備・活用内容についての検討も行った。

発掘調査現場の公開・活用

現地説明会は、11月10日に第152次調査（参加者165名）、2月9日に第153次調査（参加者75名）の2回開催した。

発掘調査現場の積極的な利活用を目標として、従来から行ってきた現地説明会や夏休みの子ども体験発掘教室に加えて、学校団体の遠足等での体験発掘の受け入れを行った。このほか、現地へ誘導するガイドボランティアのスキルアップを図るとともに、簡易な案内看板や幟の設置や、ホームページで調査状況をこまめに情報提供するなど、調査現場の利用促進に努めた。その結果、例年の約4倍にあたる1,662の方に史跡に触れていただいた。

2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成19年度

倉田直純（専門監兼課長）

泉 雄二（主幹）

大川勝宏（主幹）

水橋公恵（技師）

平成20年度

倉田直純（専門監兼課長）

大川勝宏（主幹）

新名 強（技師）

角正芳浩（技師）

山本達也（臨時技術補助員）

増渕 徹（京都橘大学教授）

4 斎宮跡整備・活用検討会

史跡東部の整備・活用に関し、指導・助言を得るため、平成20年2月14日、3月21日の2回、検討会を開催し、柳原区画の調査結果を踏まえた整備・活用内容のほか、新しい整備に求められる機能、空間の演出と活用、市民参画手法による整備等について意見や助言をいただいた。検討委員の方々は下記のとおりである。

（順不同・敬称略）

増渕 徹（京都橘大学教授）

浅野 智（独立行政法人三重大学准教授）

平澤 豊（奈良文化財研究所主任研究員）

島田敏男（奈良文化財研究所遺構研究室長）

千種清美（フリーライター）

西村和浩（第三銀行経済研究所長）

辻 孝雄（国史跡斎宮跡協議会会長）

作野かをる（斎宮ガイドボランティア会長）

（倉田直純）

3 調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成19年10月27日、平成20年3月14日の2回、委員会を開催し、第152次～154次・156次調査と今後の整備について指導を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。（順不同・敬称略）

上村喜久子（元名古屋短期大学教授）

北原理雄（千葉大学教授）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）

所 京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）

八賀 晋（三重大学名誉教授）

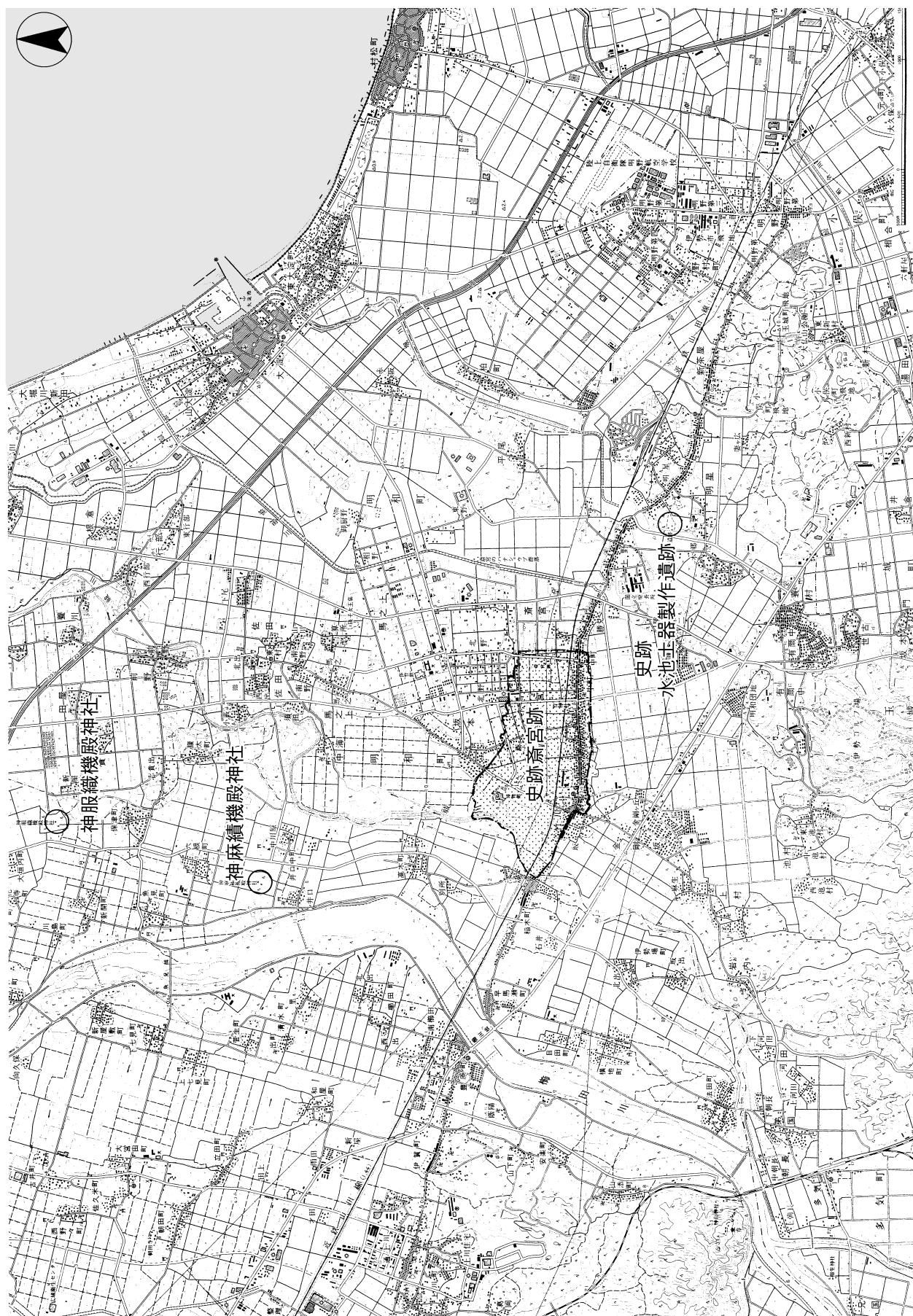
町田 章（前奈良文化財研究所長）

渡辺 寛（皇學館大学教授）

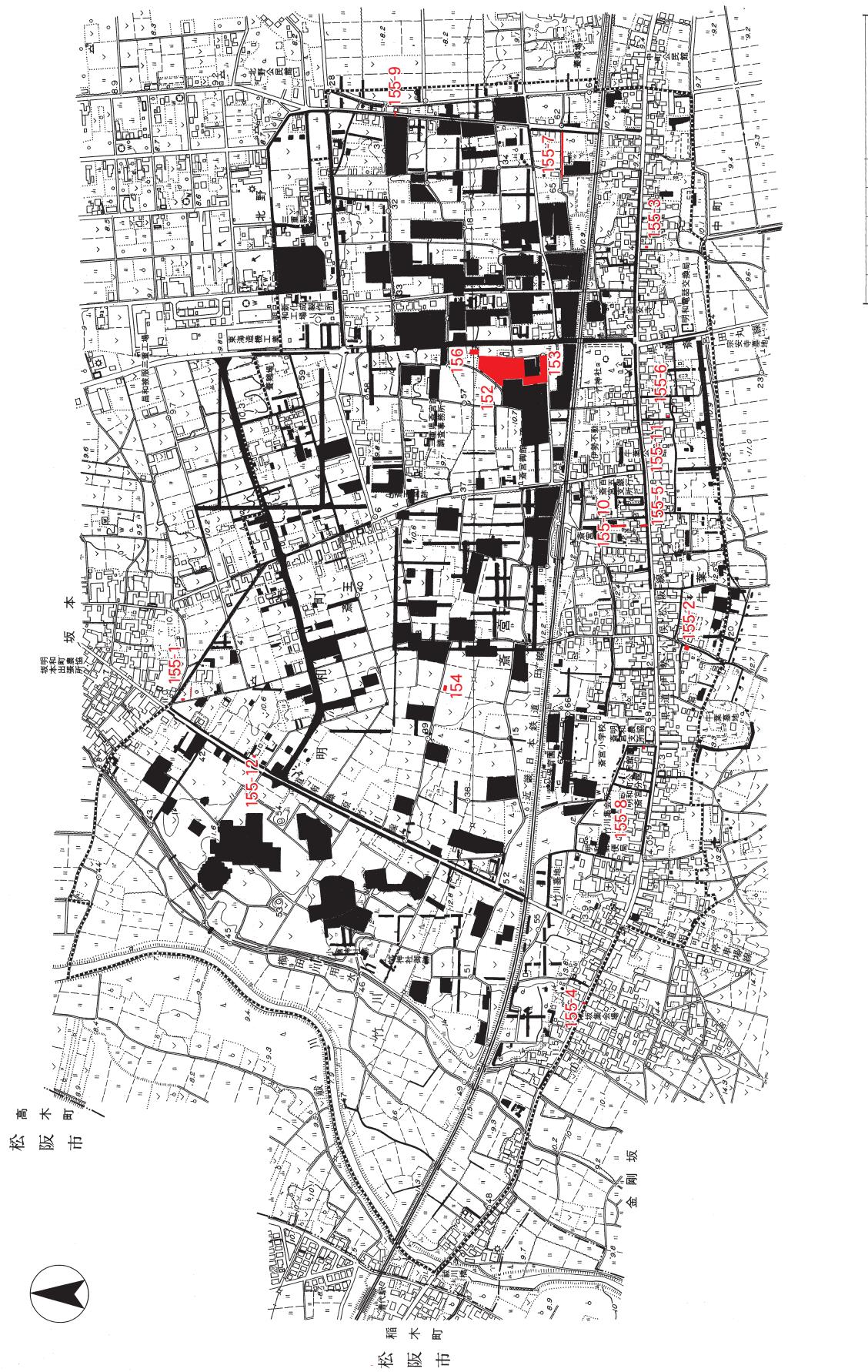
金田章裕（国立大学法人京都大学副学長）

第I-1表 平成19年度発掘調査一覧

調査 次数	地区	面積 (m ²)	調査期間	位置	土地 所有者	現状変更名	保存地 区区分
152	R10・11	2,625.0	19.7.9～12.26	明和町斎宮字柳原	個人・明和町	計画発掘調査	1
153	R11	744.0	19.11.18～20.3.10	明和町斎宮字柳原	個人・明和町	計画発掘調査	1
154	L9	157.0	20.3.3～3.19	明和町斎宮字広頭	明和町	計画発掘調査	1
156	R10	70.0	20.1.18～2.15	明和町斎宮字西加座	明和町	計画発掘調査	1
155-1	L5	41.3	19.6.5～6.7	明和町斎宮字出在家	個人	個人住宅新築	3
155-2	M13	55.0	19.6.5～6.11	明和町斎宮字木葉山	個人	個人住宅新築	4
155-3	T13	3.6	19.6.1	明和町斎宮	個人	個人住宅改築	4
155-4	G12	4.2	19.6.4	明和町竹川字中垣内	個人	浄化槽設置	4
155-5	O13	34.5	19.6.24～6.29	明和町斎宮	個人	共同住宅新築	4
155-6	Q13	2.9	19.6.28	明和町斎宮	個人	個人住宅新築	4
155-7	U11・V11・12	104.3	19.7.24～11.21	明和町斎宮	明和町	下水道管敷設	2
155-8	K13	5.0	19.9.18	明和町竹川	個人	浄化槽設置	4
155-9	V8	7.9	19.9.27～9.28	明和町斎宮	個人	プレハブ建物設置	2・4
155-10	O12	104.0	19.10.5～10.24	明和町斎宮	個人	駐車場造成	4
155-11	Q13	5.4	19.10.23	明和町斎宮字牛葉	個人	浄化槽設置	4
155-12	K6	5.7	20.1.10	明和町斎宮字古里	個人	浄化槽設置	4



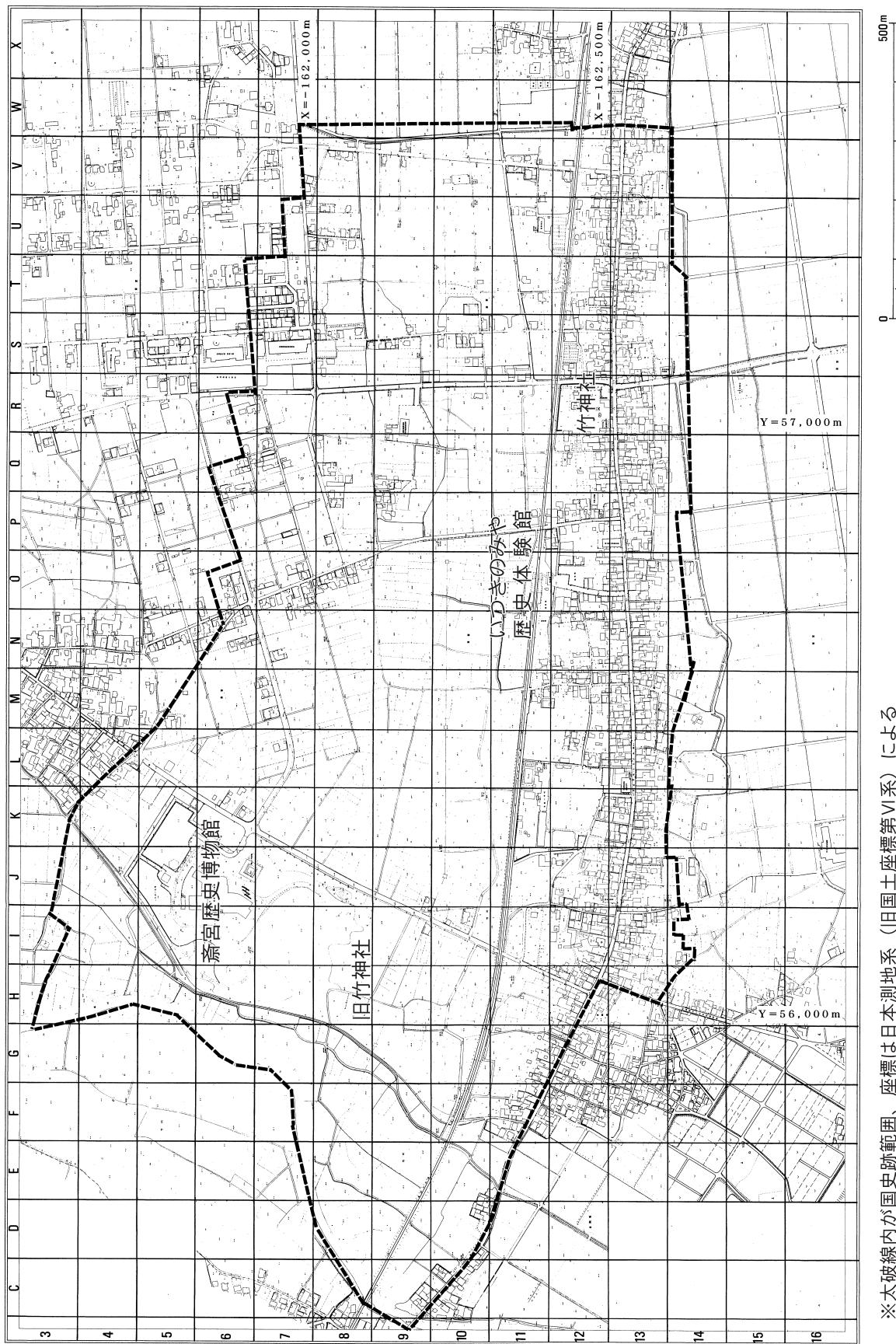
第I-1図 史跡斎宮跡位置図（1：50,000）国土地理院発行 1/25,000「松阪」「明野」（平成4年）より



第I-2図 平成19年度発掘調査区位置図（1：10,000）



第I-3図 斎宮跡方格地割区画名称 (1:5,000)



※太破線内が国史跡範囲、座標は日本測地系（旧国土座標第VI系）による

第I-4図 史跡斎宮跡における大地区表示（2002年）

II 第152次調査 (6AR10・11 柳原地区)

1 はじめに

史跡の東部で存在が確認されている方格地割を構成する方形区画の中で、その内部の全体像が解明されてきた区画は、西加座地区など一部にとどまっている。一方、これから史跡東部で実施を予定している史跡整備を検討する上でも、方格地割の枢要な部分についての解明を進めていく必要がある。そこで、今年度から平成21年度を目処に、方格地割の中でも「内院」推定地である、「牛葉東区画」に北接する「柳原区画」に調査の的を絞り、方格地割中央部での機能の特定や地割内部の土地利用の状況を解明することを目的として、この区画を計画的に調査することとなった。

その初年度の調査になる第152次調査は、柳原区画の中心部分で面積2,625m²を対象に実施した。これは史跡斎宮跡の計画的な調査が始まってから、一調査区としては最大の面積である。周辺では、昭和54年度の第28次調査、平成16年度の第143次調査を実施しているほか、昭和49年度の第8-10次調査(Oトレンチ)が今回の調査範囲内で行われており、多数の平安時代の掘立柱建物や井戸などを検出している。第152次調査の調査期間は平成19年7月9日から12月26日までである。

2 地形と層位

斎宮跡は、最高点で標高約14mの洪積台地の上に立地しており、この台地は東ないし北東方向にむかって緩やかに傾斜する。また台地上には微地形的な深い谷や微高地、窪地があり、方格地割内にはこれまでの調査から二条の東西方向の深い谷が確認され、これが地割の北辺から二番目と三番目の区画道路の位置に合致していることが知られている。今回の調査対象である柳原区画は、この二条の谷にはさまれ、東隣の西加座南区画までつづく島状の微高地を占地している。第152次調査区内でみてみると、o-18・19・20グリッド付近の地表面で標高10.3mほどになるのを最高点に、北・南・西に傾斜している。

調査地の現況は畑地で、明黄褐色系粘質土の地山を

遺構検出面として調査を行った。斎宮廃絶後の土地利用の改変の中で、標高の高い部分については若干の削平が行われたのか、最高点付近と調査区の北西部では部分的に遺構検出面までの深さが20~15cmと浅く、耕作土直下で遺構検出面が現れる場所もある。そのためか、調査区北部では、耕作に伴うとみられる細い搅乱溝が多数みられた。

一方、調査区の南部では、地形が南に傾斜していくのに従い、遺構検出面まで約40cmと深くなり、厚さ15~20cmほどの遺物包含層もほぼ全面にみられる。この部分での調査区の基本層序は、黒褐色壤土の耕作土(表土)と微細な地山土粒を含む黒褐色壤土(包含層)、橙色~明黄褐色の粘質土(地山・遺構検出面)である。

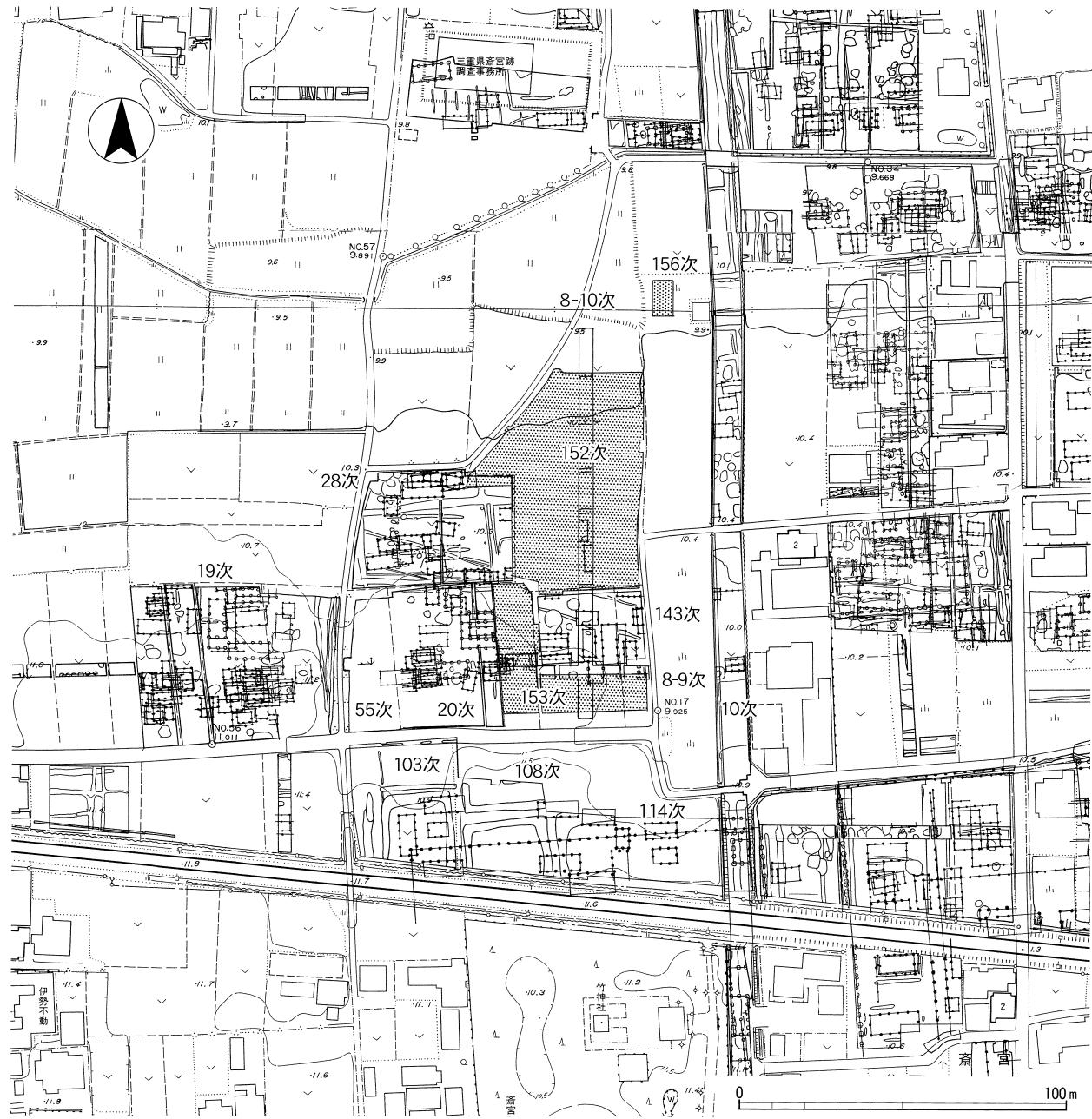
3 遺構

調査面積が広大なのに伴い、多数の遺構を検出した。現段階で整理された遺構は、掘立柱建物70棟、柵列(掘立柱塀)6条、井戸2基、土坑42基、埋納遺構1基、溝27条である。以下、斎宮跡の土器編年を基準とした時期区分に従い、遺構の記述を行う。

(1) 斎宮I-4期以前の遺構

SD6801・9790 調査区の南端で検出した溝で、史跡内の各所でこれまでに見つかっている、いわゆる「奈良古道」の北側溝にあたる溝である。SD6801は第143次で検出されたものの延長部分で、今回は延長約21m分を確認した。断面は緩やかなU字形である。幅0.5~0.6m、遺構検出面からの深さは25~30cmで、黒色シルト質の埋土で埋まっていた。調査区内での溝底の傾斜は確認されない。この溝を西に延長すると、第28次調査のSD1327に連続することになるが、調査区西端で一端途切れた形となっている。

SD9790はSD6801の南に平行するかたちで、長さ7m分を検出した。幅約0.6m、深さ約30cmの深い断面U字形の溝で、黒褐色の埋土である。「奈良古道」の改修などに伴い掘削された溝であろうか。いずれの遺構からも、微小な土器片以外は出土遺物はない。



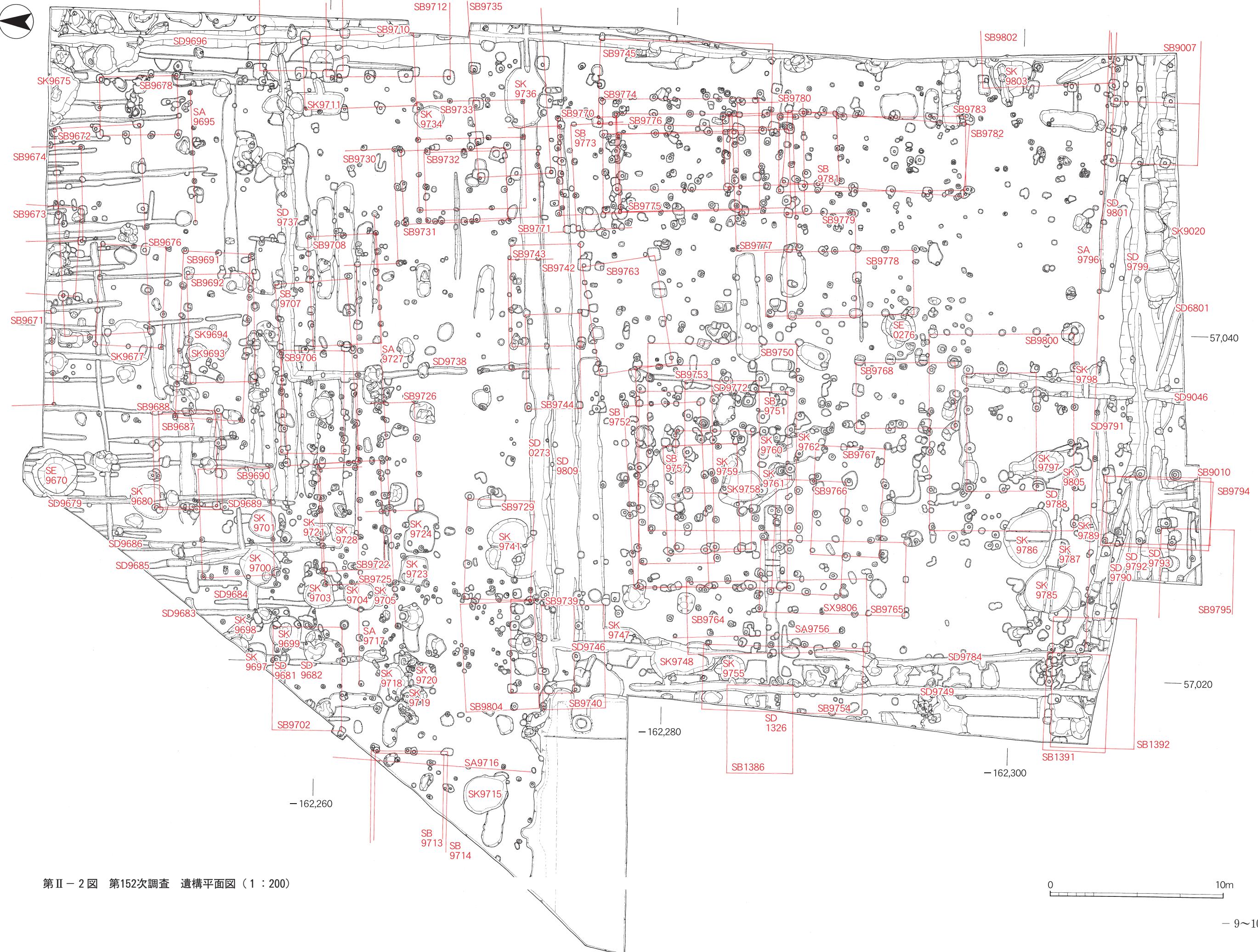
第II-1図 第152・153・156次調査 調査区位置図（1：2,000）

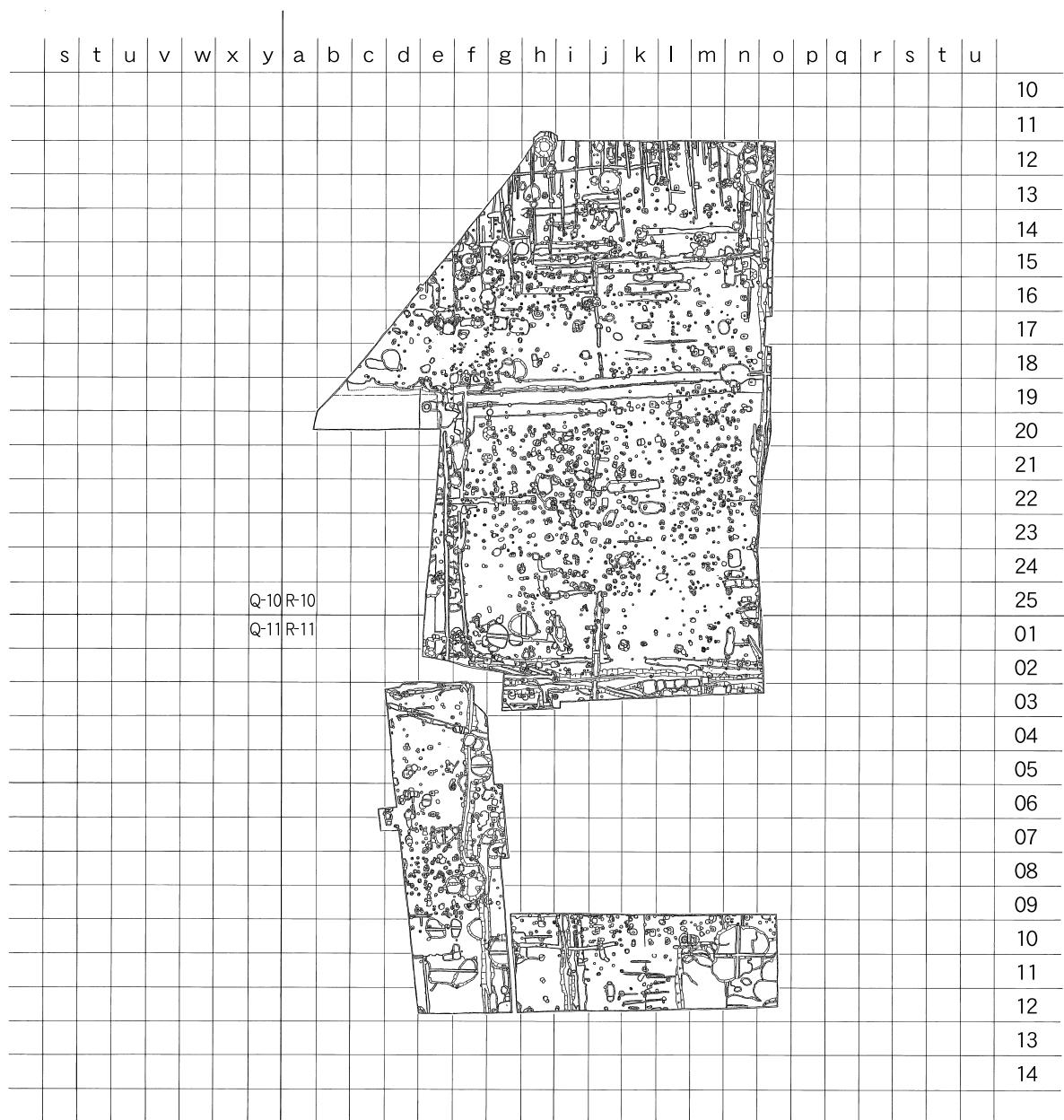
(2) 斎宮I-4期の遺構

SB9007 調査区の南東隅で検出され、第143次調査区まで広がる。南北で3間、東西で4間分以上ある。西から2間目のところに間仕切り状の柱穴が2個確認された。柱間寸法も1.7~1.8mと短く、斎宮跡では特殊な形状の建物になる。柱掘形の埋土は黒色シルト質混土で、直径約20cmの柱痕跡がある。出土遺物はほとんどなく、II-1期までくだるかもしれない。棟方向は東西正方位である。

SB9709 調査区の北東部で南北2間分を検出した。東は2間分まで確認したが、調査区外へのびている。最大で一辺1mほどの柱掘形で、黒色シルト質の埋土を持ち、出土遺物は少量の土器片のみである。柱痕跡は確認できなかった。柱間は梁行2.4m、棟方向はN 2° Wとみられる。

SB9763 調査区のほぼ中央で検出した。桁行とみられる側柱が南北でそれぞれ3間分が確認できたものの、棟柱を確認することができなかった。棟方向もN 10° W





第II-3図 第152・153次調査 大地区・グリッド図（1:800）

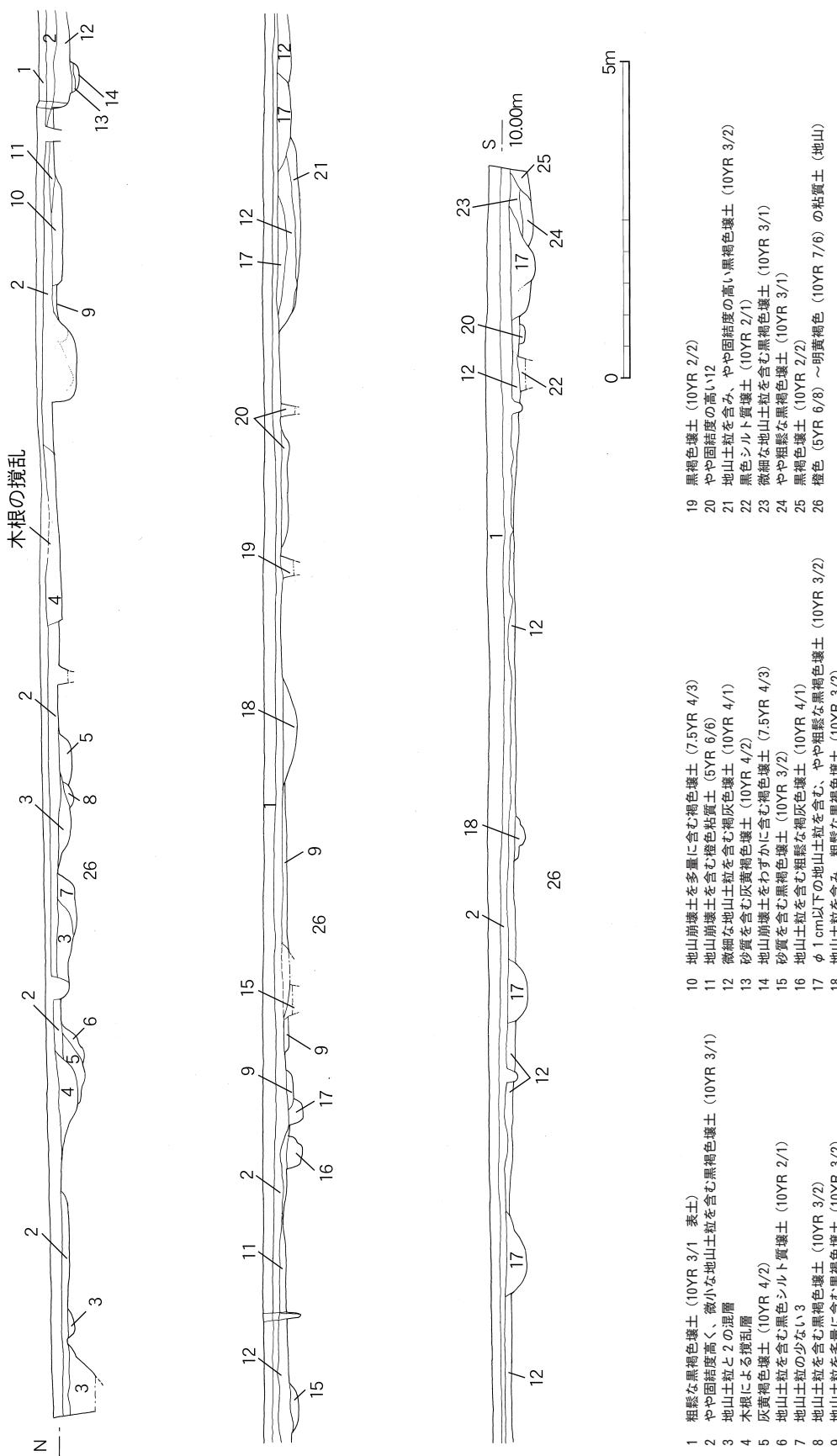
と、他の建物と比べても特異である。柱掘形は一辺約1mの大形のもので、第8-10次調査で半裁されている部分で確認すると、深さも最大で30cm残っており、後述する他の建物の掘形に比べて深い。出土遺物は少量の土器片のみである。

SB9802 調査区の南東端近くで南北3間分を検出した。東西方向の規模は不明である。柱掘形は一辺0.7~0.8mの方形で、黒色シルト質の埋土を持つ。柱間寸法2.5m、棟方向はN 4°Wである。出土遺物はほと

んどない。掘形埋土などの状況から当区画の中でも古い建物と判断した。埋土の重複関係からSK9803より新しいと判断される。

SK9675 調査区の北東隅付近で検出した不整円形の土坑である。平均的な深さは0.3m前後である。斎宮跡編年I-4期の土師器を中心に整理箱で5箱分の遺物が出土している。土師器は精良な胎土を持つものが多く、盤が多いことから、非日常的な器物が廃棄されたとみられる。

調査区東壁



第II-4図 第152次調査 土層断面図 (1:100)

SK9803 調査区の南東端付近で検出した $2.3 \times 2.1\text{m}$ 、深さ約0.3mの不整円形の土坑である。土師器杯類のほか、大形の須恵器盤が出土している。

SK9805 調査区の南端近くで検出した、 $4.5 \times 1.7\text{m}$ 、深さ約0.2mの南北に長い楕円形の浅い土坑である。土師器杯類や須恵器片が出土している。II-1期のSB9800とIII期のSK9797が重複する。

SE0276 井戸は調査区内で2基確認されている。いずれも底部まで調査したところ、I-4～II-1期の土器が出土しており、この段階まで遡るものと考えた。

SE0276は第8-10次調査で検出され、深さ約2mまでは調査されていた。遺構検出面で直径約2mの不整円形、検出面から30cmの深さで直径1.2m程度の円形となる。今回の調査で、遺構検出面から4.35mの深さまで調査したが、出土遺物は若干の土師器片がみられたのみで、井戸枠などの施設は確認できず、素掘りの井戸とみられる。第8-9次調査での出土遺物にはII-1期の土師器杯A・皿A・甕、須恵器片が出土しており、井戸の掘削はI-4期まで遡ると判断した。より新しい時期の遺物はみられず、II期の早い段階で埋められた可能性がある。

SE9670 調査区の北辺で確認した井戸で、遺構検出面で直径約2.6m、深さ約0.4mのところで直径2m強になる。検出面から深さ4.05mで底部に達した。素掘りの井戸とみられ、井戸枠などの施設はみられなかった。埋土は大きく4層に分類され、第I層：地山上粒混灰黃褐色壤土（層厚約1.65m）、第II層：白色粘土混灰褐色壤土（層厚約0.75m）、第III層：地山上粒混のにごった黃褐色壤土（層厚約1.1m）、第IV層：円礫混灰黃褐色壤土（層厚約0.35m）、第V層：円礫層（層厚約0.2m）となる。このうち、第I層からはII-2～3期の土師器杯A・杯G・高杯・甕類、黒色土器椀、須恵器片が整理箱で13箱ほど出土している。また、第IV層でも土師器甕の大形破片が出土している。井戸としての存続期間はI-4～II-3期頃と考える。

（3）斎宮II-1期の遺構

SB1391 第28次調査で確認されていたもので、調査区の南西隅で延長部分を確認した、南辺を確認していないが、同年度の第153次調査で延長部分が確認されていないため、3間×2間の東西棟と判断した。柱掘形は径約0.5mの略方形、柱間寸法は1.8～1.9mである。

棟方向はN 1°Eで正方位に近い。重複するSB1392に後出するもので、時期的にII-2期頃までくだる可能性がある。

SB1392 第28次調査で確認されていたもので、SB1391に先行するものである。これも3間×2間の東西棟とみられるが、柱掘形は最大の北東隅柱のもので一辺1mを超える。柱痕跡は直径20cmほどである。柱間は桁行2.5m、梁行2.4m、棟方向は東西正方位である。

SB9010 第143次調査で南辺が検出されており、調査区南端でその延長部分を確認した。3間×2間の南北棟で、一辺0.8～0.9mの隅丸方形の柱掘形に黒褐色の埋土を持つ。柱痕跡は、重複してSB9794が建てられているため明らかでない。柱間寸法は桁行2.0m、梁行1.9mの南北正方位の建物である。

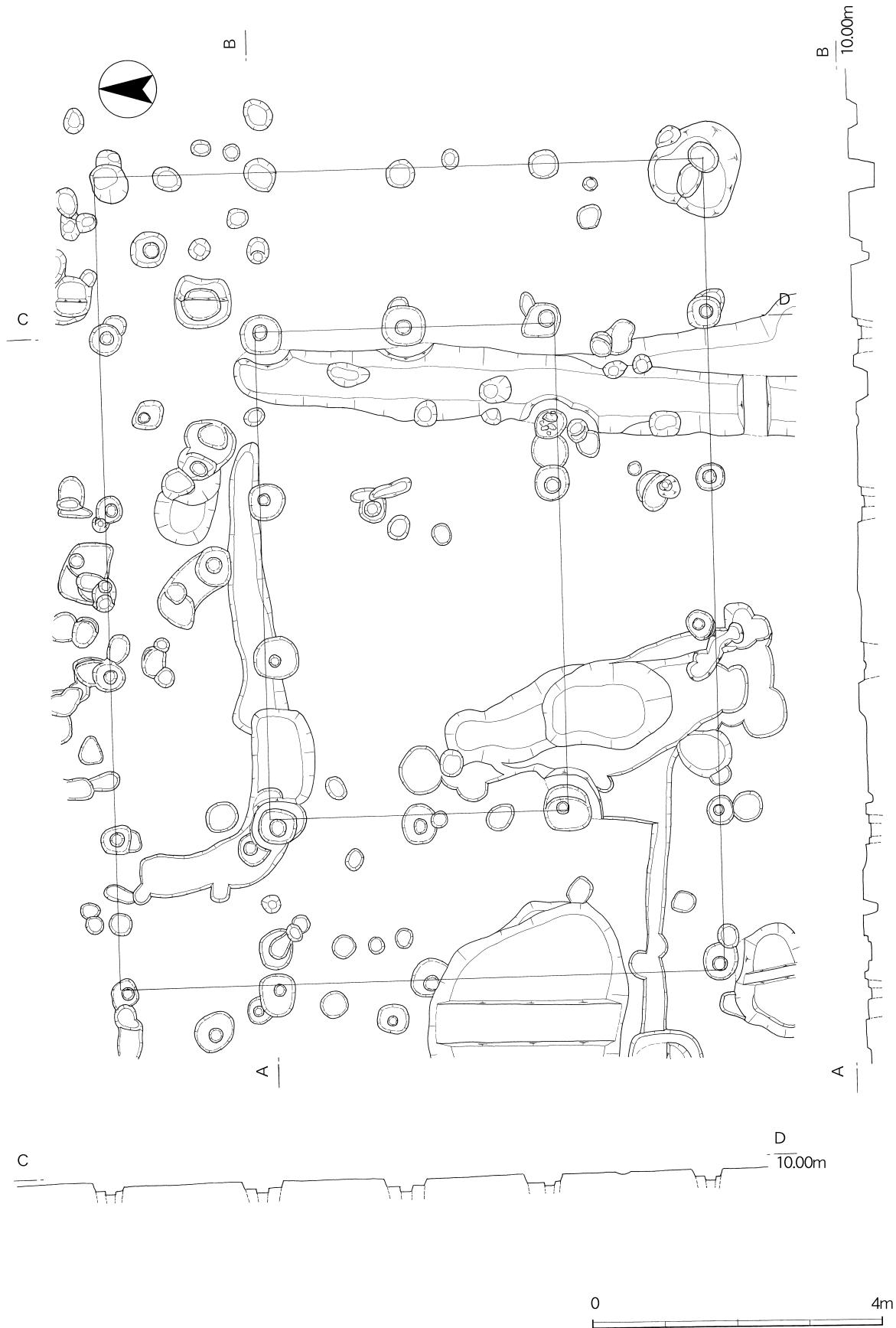
SB9672 調査区の北辺付近で検出した、5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅丸の方形で、柱間寸法はおよそ8尺の約2.4mである。直径20cmほどの柱痕跡を確認している。柱間は桁行2.4m、梁行2.5m、棟方向はN 4°Wである。東辺の柱筋を南のSB9710とあわせている。両者の間隔は約9.6mで、斎宮跡の基準尺である1尺=0.296mをあてはめると3.24尺ほどになる。

SB9678 調査区北東隅近くで検出した、3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5m前後で、柱痕跡は約20cmである。柱間寸法も桁行で1.5mと小規模な建物である。棟方向はN 2°Wである。柱穴の重複関係からSB9672より新しい。

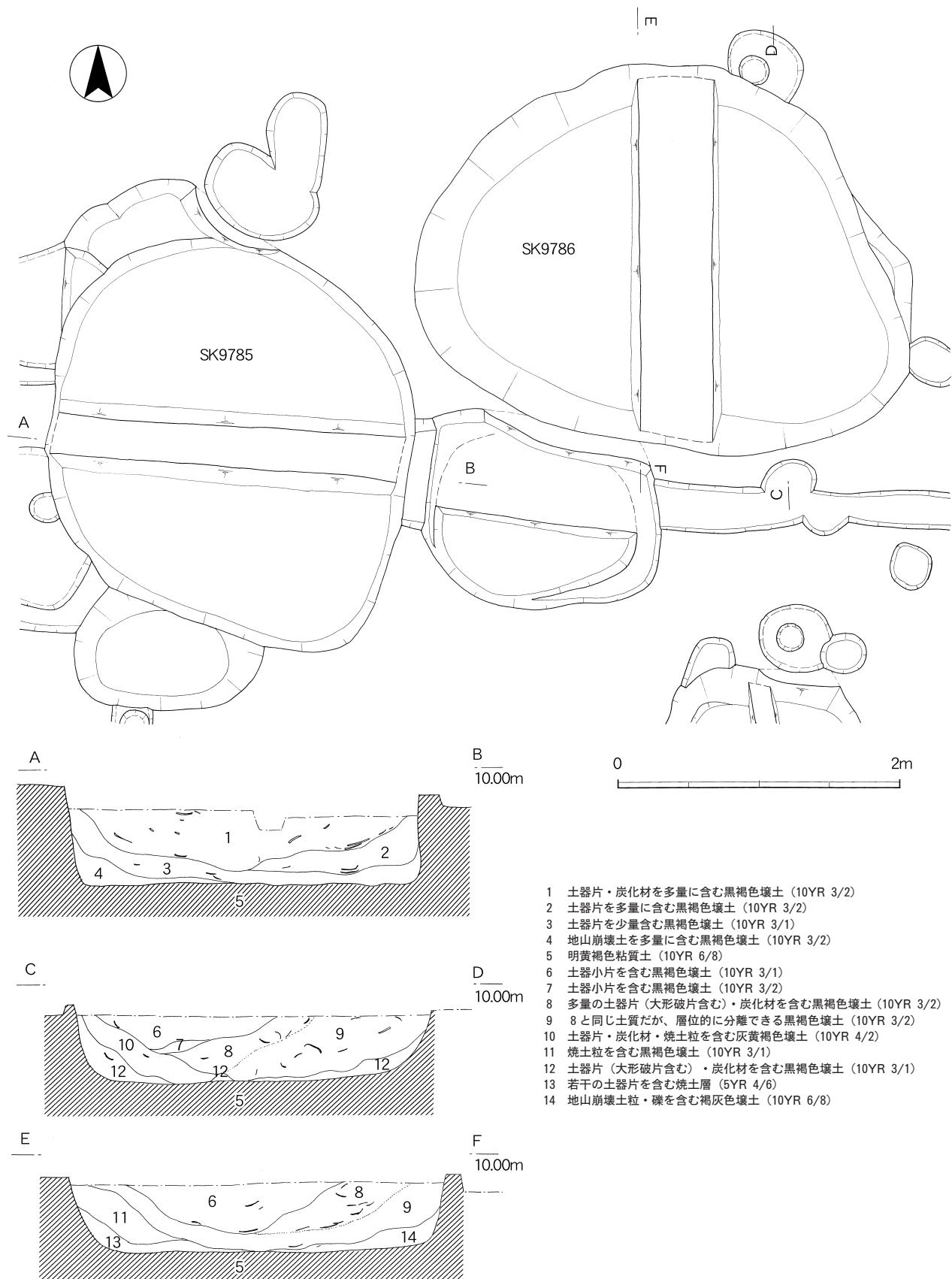
SB9687 SE9670の南で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.4～0.5mの略方形で、柱痕跡は直径15cmほどである。柱間寸法は1.8m前後である。棟方向はN 2°Wで、SB9678と揃う。

SB9702 調査区の北西端で検出した3間×2間とみられる東西棟である。柱掘形は最大で一辺約0.5mの略方形で、柱痕跡は直径15cmになる。柱間寸法は約2.0m、棟方向は東西正方位である。平成20年度に実施した第157次調査で延長を確認しておらず、また東方のSB9706と南面の柱筋を揃えることから、3間×2間とみて間違いないだろう。

SB9706 SB9702の東方10.2mのところで確認した3間×2間の東西棟である。SB9702の東辺との距離を、斎宮の基準尺をあてはめると34.5尺となり、あるいは



第II-5図 第152次調査 SB9800平面図・横断面図 (1:80)



第II-6図 第152次調査 SK9785・9786平面図・土層断面図 (1 : 40)

35尺を計画して配置したものかもしれない。

柱掘形や柱痕跡の規模もSB9702とほぼ同規模になるが、梁行の柱間寸法だけは約1.8mと、やや小規模になっている。棟方向は東西正方位である。

SB9710 調査区の東辺で確認した、3間×2間の南北棟である。一辺約0.6mの略方形の柱掘形で、直径20cm弱の柱痕跡を持つ。柱穴の重複関係から、SB9712より古い。東西棟SB9672とは逆L字の配列となる。柱間は2.1m、棟方向はN 4°Wである。

SB9712 調査区の東辺で確認した、南北3間の建物である。柱掘形は一辺0.8～0.9mとやや大きく、直径約20cmの柱痕跡がある。東辺が調査区外なので確認できないが、周囲の建物の状況から3間×2間の南北棟になると考えられる。柱間は2.4m、棟方向はN 3°Wである。

SB9735 調査区の東辺の中央部付近で検出した東西棟で、南北2間、東西4間分まで確認した。柱掘形は一辺0.8～1.0mあり、直径20cm強の柱痕跡を確認している。柱間寸法2.1m、棟方向はN 4°Wである。南辺の柱穴は、Ⅲ期以降の溝SD9809に壊されており、その部分で掘形底まで調査したところ、平均的な遺構検出面高から深さ10cmほどしか残っていないことが分かった。SB9735から南の一帯が今回の調査区の地形上の最高点になるが、平安時代よりかなりの削平が行われている事をうかがわせるものである。

SB9739 調査区中央の西端付近で検出した3間×2間の東西棟である。一辺0.5～0.6mの隅丸方形の柱掘形に直径約20cmの柱痕跡がある。柱間寸法は約1.8m、棟方向はN 1°Wである。東方のSB9743とは、約14.4m（約48.6尺）の間隔をあけて並列している。約50尺を意図した計画的配置とみられる。

SB9740 SB9739に重複して確認した同規模の建物であるが、桁行の柱間が1.8mに対し、梁行が2.0mとなっている。棟方向はN 1°Wである。他の遺構との重複関係から、同規模のSB9804より古いことは確認できるが、出土遺物からⅡ-1～2期の間に建てられたものとしか判断できない。ただし、南面の柱筋を東方の庇付建物SB9774の北辺と揃えているとも考えられ、Ⅱ-2期に下げて考えるべきかもしれない。

SB9743 調査区中央のやや東よりで検出した3間×2間の東西棟である。先述のSB9739とは東西に並列

する形で建てられている。検出した柱掘形の形状は一辺0.4～0.5mの不整方形である。柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.0m、棟方向はN 1°Wである。

SB9744 SB9743に重複して検出した3間×2間の東西棟で、一辺0.4～0.5mの隅丸方形の柱掘形に、直径約20cmの柱痕跡がある。柱間寸法は、桁行が1.8mに対して、梁行が1.6mとなっている。棟方向はN 2°Wで、時期はⅡ-1～2期とみられるが、柱穴の重複関係からSB9743より古いと判断される。

SB9745 調査区の中央東端で検出した。一部調査区外へ建物の範囲がのびているが、5間×2間の南北棟と確認できた。柱掘形は一辺約0.6～0.7mの隅丸方形で、直径約20cmの柱痕跡が確認された。柱間寸法は桁行2.0m、梁行2.2mで、棟方向はN 1°Wである。

SB9768 調査区中央部南よりで検出した3間×2間の南北棟である。柱間寸法は1.9mだが、一辺約0.8mの隅丸方形になる大型の柱掘形を持つ。柱痕跡は直径約20cm。北側の柱筋を後述のSB9779の南辺と揃えており、L字形の配置を構成する。両者の間隔は約2.5m（約8.4尺）である。棟方向はN 1°Wである。柱穴の出土遺物からⅡ-1期まで遡りうるとしたが、時期的に若干下る可能性もある。

SB9779 SB9768の東で検出した3間×2間の東西棟である。柱間寸法は2.0mで、一辺0.5～0.6mの隅丸方形の柱掘形に、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN 1°Wである。この建物も、時期的にはⅡ-2期まで下る可能性がある。

SB9794 調査区南端で検出した3間×2間の南北棟で、先述のSB9010が建替えられたものである。柱間は2.1mとやや広くなるものの、柱掘形は直径0.4～0.5mの略円形になり、棟方向もN 2°Wと若干振れる。時期的にやや下る可能性がある。

SB9800 調査区の南端付近で検出した5間×4間の東西棟で、3間×2間の身舎に、東西南北それぞれに1間分の庇出が付く四面庇付建物である（第Ⅱ-5図）。身舎の柱掘形は0.5～0.6mの隅丸方形で、直径20cm前後の柱痕跡がある。庇の柱掘形はおおむね0.4～0.5mの略方形で、直径15cm程度の柱痕跡がある。身舎の南辺で柱穴が1個欠落する。柱間寸法は梁行側が2.1m（約7尺）であるのに対し、桁行側は約2.25m（約7.6尺）になっている。棟方向はN 1°Wである。

他の遺構との重複関係では、I-4～II-1期のSK9805や、II-1期のSD9046より新しく、II-1～2期のSK9786より古いと判断される。SK9786との重複関係については、第II-6図に示した土層断面からも確認した。土器等の廃棄土坑であるSK9786から出土した土器群が、斎宮跡編年でII-1期からII-2期の古い様相のものまでを含むことから、SB9800の存続期間はII-1期の途中からII-2期の前葉までと想定される。

SK9680 調査区の北西隅付近で検出した、直径約2.0m、深さ0.2mの略円形で皿状の土坑である。出土遺物は少ないが、土師器長胴甕片が出土している。II-1～2期のものと推定される。

SK9694 調査区北半の中ほどで検出した2.5×1.4m、深さ約15cmの浅い土坑である。出土遺物は少ないが、II-1期の土師器杯・鉢や須恵器蓋が出土している。重複するSB9692に先行するとみられる。

SK9703 調査区北西部で検出した、2.3×1.8m、深さ0.1mの浅いすり鉢状の土坑である。土師器杯・高杯・甕・鍋や須恵器片が出土している。遺構検出時は確認できなかったが、重複するSB9725に先行するものと考える。II-1～2期と推定される。

SK9736 調査区中央の東端付近で検出した3.5×2.4m、深さ約0.15mの浅い皿状の土坑である。検出時には上面でIII期の遺物もみられたが、下部ではII-1～2期頃とみられる土器片のみになる。土師器杯・椀・皿・甕・竈、黒色土器椀、須恵器杯・蓋や炭化材が出土している。

SK9785 調査区南西隅付近で検出した2.8×2.5m、深さ約0.7mの略円形の土坑である。埋土断面図に示したように壁がほぼ垂直に立ち上がり、平らな底部になっている。一次整理時で整理箱に37箱分の遺物が出土しており、その大半が土器類である。大部分が土師器の杯・椀・皿といった供膳具で、完形品も多数含むが、土師器煮炊具や黒色土器も多く、また多種の須恵器が出土している。土師器杯類には口縁に油煙の付着するものも多い。また製塙土器の破片や土錘もみられる。この他、刀子片や釘・円盤状製品などの鉄製品や、鋸造に関連するとみられる金属滓や多量の炭化材が出土している点も注目される。埋土断面の観察からは、埋没にやや時間幅が見て取れるが、土器形式の上ではII-

1期内で収まり、差はみられない。

SK9786 SK9785の北東にわずかな間隔をあけて掘られた、3.5×2.6m、深さ約0.6mのやや歪んだ楕円形の形状の土坑で、壁がほぼ垂直に近く、底部は平坦になっている。整理箱で40箱の多量の遺物が出土しており、内容的にも土師器杯・椀・皿を中心に、土師器煮炊具や黒色土器、須恵器類、製塙土器、土錘や釘などの鉄製品、焼粘土塊、炭化材とSK9785とほぼ同様の構成である。土師器杯類には口縁に油煙が付着するものがみられる。土師器皿類の器壁が若干薄くなる傾向のものがみられ、SK9785より若干後出する土器群であると推定した。II-1～2期にかけての時期に位置づけられようか。四面庇建物SB9800の庇柱が想定される位置で断面を観察しながら調査したが、柱掘形の痕跡はなく、SK9786が後出することが確認できた。

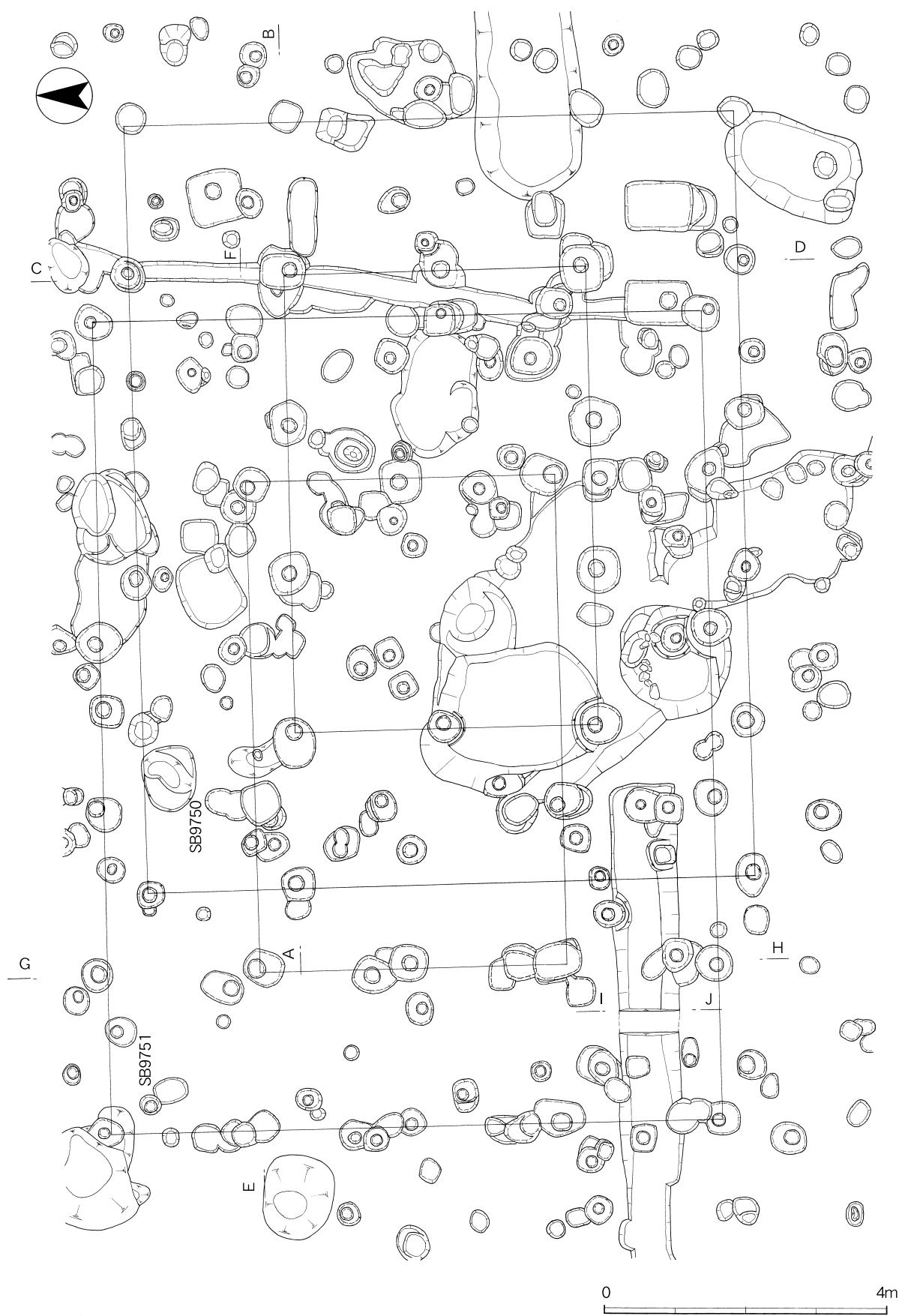
SK9787 SK9785の東に位置する1.6×1.4m、深さ約0.4mの不整形の土坑である。黒褐色の埋土で、出土遺物は少ない。土師器皿と須恵器片が出土した。II-1～2期に推定される。

SK9789 調査区の南端付近で検出した長径約1.6mの不整円形の土坑で、深さは0.35mである。出土遺物は多くないが、土師器片、須恵器片、炭化材が出土している。埋土の重複関係からSB9800より古い。

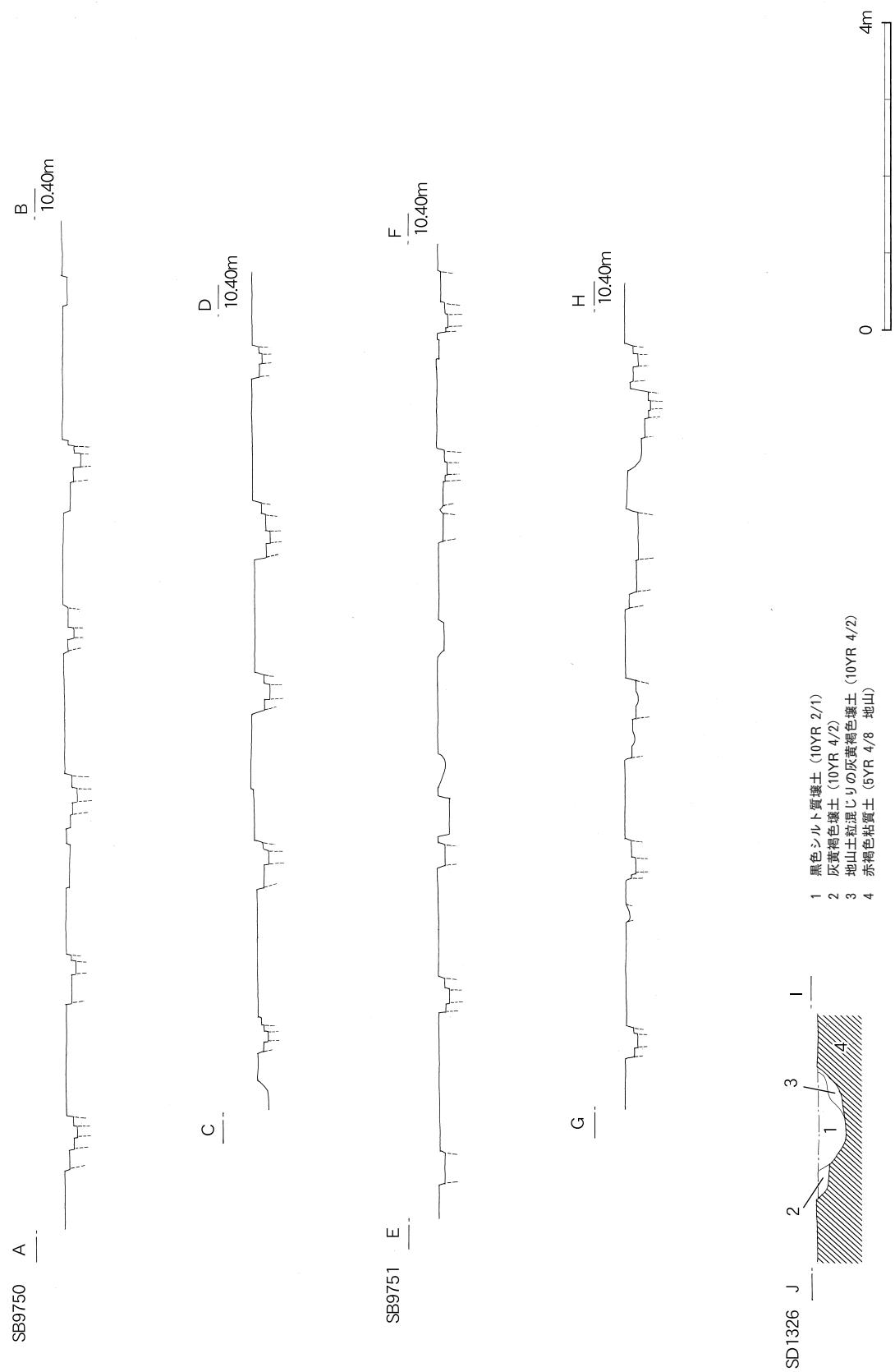
SD1326 第28次調査で確認された溝で、第152次調査区まで延長してくるものである。今回の調査では延長11.8m分を検出した。第28次で検出している分とあわせると、延長約50mのものになる。一部で若干狭くなるが幅約0.9mで、残存する深さは0.15～0.1mと浅く、断面は弱いU字形になる。溝の向きはほぼ東西正方位になり、東の端はh-22グリッドのところで途絶するようになると終わる。先端付近で、底部から若干上のレベルで土師器鍋B(195)が破碎した状態で出土している他、土師器杯・甕、須恵器片が出土している。形状や規模から、柳原区画内の区画施設と考えられる。

SD9788 調査区の南西隅近くで検出した幅約0.3mの溝で、深さは最大で7cmと浅い。断面は弱いU字形である。両端に他の土坑が重複しているため、本来の長さは分からぬが、検出長で約4.6mある。II-1期に位置づけられるが、黒色の埋土で、遺物は少なく、SK9785やSK9787より古い。

SX9806 調査区南半の西よりで検出した埋納遺構で



第II-7図 第152次調査 SB9750・9751平面図 (1:80)



第II-8図 第152次調査 SB9750・9751横断面図 SD1326土層断面図 (1:80)

ある（第II-10図）。0.33×0.27m、深さ26cmの円錐状のピットで、底部より上面で大形の須恵器杯B（13）が出土した。須恵器は西にむかって傾いた状態で出土したが、上側の口縁が破損しており、本来は正置状態であったものが、後世の耕作等により傾いたものと推定できる。ピットの内部には他には遺物は見られなかつた。地鎮などに関連する遺構だろうか。

（4）斎宮II-2～4期の遺構

SB9671 調査区の北端で検出した東西3間の建物である。柱掘形は直径0.3～0.4mの円形で、柱間寸法は1.8mの小型の建物である。棟方向はN 3°Wである。II-2～3期に属する。

SB9673 調査区の北端で検出した東西2間の建物である。南北方向に長い建物になるとみられる。柱掘形は、一辺約0.5mの略方形だが、柱間寸法は約2.6mと長い。棟方向はN 2°Eである。II-2期に属する。

SB9674 調査区の北端で検出した東西3間の建物である。柱間寸法は1.8m、柱掘形は最も大きいもので一辺約0.4mの略方形のものである。棟方向はN 2°Wで、重複関係からはSB9673より新しい。II-3期に属する。

SB9676 調査区の北部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は1.9～1.95m、柱掘形は直径0.3m前後の円形である。棟方向はN 2°Eで、II-2期に属するとみられる。

SB9688 調査区北部で検出した3間×2間の東西棟で、II-1期のSB9687を建替えたものである。柱穴は大きいもので一辺0.4～0.5mの略方形で、直径15cmほどの柱痕跡がある。柱間は1.8～1.85mで、棟方向はN 4°Wである。南に11.4mのところにあるSB9726とは並列の関係にあるとみられる。II-2期に属する。

SB9690 調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁行2.0mであるが、柱穴は小さく、直径約0.3mの掘形に直径10cm程度の柱痕跡がある。棟方向はN 4°Wである。II-2～3期に想定される。

SB9691 調査区北半中央付近で検出した5間×2間の東西棟である。5間×2間の規模ながら、柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、柱間も1.9mと小型である。棟方向はN 2°Eである。II-2期に属するとみられ、同時期のSB9692とは重複する位置関係にあり、棟方

向も大きく異なるが、柱穴の重複はない。

SB9692 SB9691に重なる位置で検出した3間×2間の東西棟である。周囲で見つかっている3間×2間の東西棟と比べ、柱掘形が一辺0.6～0.7mと大きく、柱痕跡も直径20cmほどのものが確認されている。棟方向はN 2°Wである。II-2期に属するとみられる。

SB9708 調査区北半のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。最大のもので一辺0.4～0.5mの隅丸方形の柱掘形に直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN 4°Wである。II-2～3期に属するとみられ、西方約7.4m（約25尺）の間隔でSB9725とは計画的な並列配置の関係にある。

SB9725 SB9708の西に位置する3間×2間の東西棟とみられる建物である。北辺と西片の一部の掘立柱を確認した。南辺は明らかでないものの、先のSB9708との関係から3間×2間の規模となるものとみられる。残存している柱穴は直径0.25～0.3mの小型の円形のもので、直径10cm前後の柱痕跡が見つかっている。棟方向はN 4°Wで、II-2～3期に属する。

SB9726 調査区の中央やや北よりで東西3間分を確認した。柱穴4個のみの検出であるため、柵列等の可能性もあるが、先述したようにSB9688とは南北に並列の関係にあるとみられるため、3間×2間の東西棟の一部と判断した。柱穴は最大のもので直径約0.4mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は2.1m、棟方向はN 4°W。II-2～3期に属する。

SB9729 調査区中央やや西よりで検出した3間×2間の東西棟である。北側柱と東西の棟柱のみを検出しており、南辺は明らかではないが、周囲の他の建物の状況から梁行2間の規模のものと判断した。柱掘形は直径約0.4mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は1.9mで、棟方向はN 2°Eである。II-2期に属するとみられる。

SB9742 調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。これも重複して掘られたSD0273や後世の削平により、南の側柱や西の棟柱を失っているものの、先行するSB9743・9744の建て替えと考え、南北2間の規模と判断した。柱間は桁行で2.1mあるが、柱穴は直径0.2～0.3mの円形と小型で、柱痕跡も明らかでない。棟方向はN 1°Wで、II-2～3期のものと考えられる。

SB9750 調査区中央で検出した5間×4間の東西棟で、II-1期のSB9800と同規模の四面庇付建物である（第II-7図）。西側庇の柱筋のうち1個の柱穴が欠落する。身舎は直径あるいは一辺0.6~0.7mの略方形か円形の柱掘形で、直径約20cmの柱痕跡があり、庇は直径0.4~0.5mの円形ないしは略方形の柱掘形で、直径15~20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも2.15mである。棟方向はSB9800同様N 1°Wである。柱穴の出土遺物をみると、掘形にはII期の遺物が、柱痕跡の中にはIII期の遺物が多数みられる。また、II-2~3期の土坑SK9758・9760・9762の埋土の上から柱穴が掘られていることから、II-2期後葉からII-3期のはじめまでに建てられ、III-1期まで存続すると推定した。先行するSB9800とは、北に約7.5m（25尺）平行移動したような位置関係にあり、柱穴の規模や柱間寸法、棟方向はほぼ同一のものだが、この2棟が並存していたかどうかは、II-2期の極めて短期間には想定されるうるもの、あるいは建て替えの建築期間だけの並存とも考えられる。

SB9766 調査区の南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は直径約0.5mの略円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間が桁行2.05m、梁行2.0mで、棟方向はN 2°Eである。柱穴からの出土遺物は少ないが、重複する遺構や棟方向からII-2~3期のものと判断した。

SB9767 SB9766の南で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は一辺約0.4mの略方形ないしは円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行2.0mで、棟方向はN 2°Wである。位置・規模からSB9766の建て替えと考えられる。柱穴の重複関係からもSB9766より新しい。II-2~4期の建物とみられる。

SB9774 調査区の中央東よりで検出した3間×3間の建物で、東面に1間分の庇出がある。柱穴は最大のもので直径約0.4mの円形ないしは略方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行で3.0m（約10尺）と広く、梁行は2.2m、庇出は約2.0mと短い。棟方向はN 1°Wである。時期的にはII-2~3期頃のものとみられるが、西方の四面庇付建物SB9750の身舎の南側柱とSB9774の南側柱が揃う。SB9750の東辺とSB9774の東辺との距離は約14.7m（約50尺）で、両者は

計画的な配置である可能性がある。

SB9775 調査区中央東よりで検出した3間×2間の南北棟である。柱穴は直径約0.7mの略方形とやや大型で、柱痕跡の直径は約20cmである。柱間寸法は、この建物も桁行は長く、約3.3m（約11尺）を測るのに対し、梁行は2.3mとなっている。棟方向はN 3°Wである。出土遺物などからII-3期のものとみられ、庇は確認できなかったものの、SB9774の機能を引き継ぐものかもしれない。

SB9776 SB9775とほぼ同じ位置で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は直径約0.5mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は2.2m、棟方向はN 1°Wである。

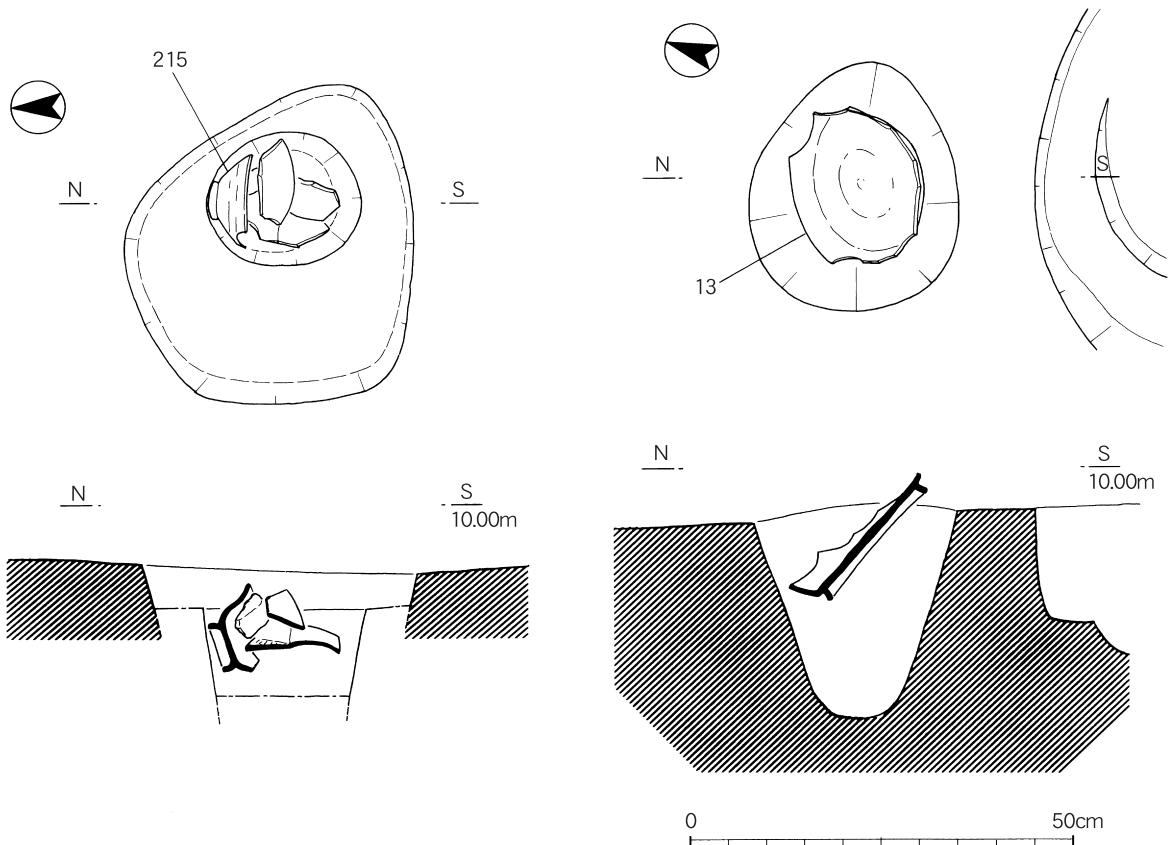
SB9778 調査区南半中央で検出した5間×2間の南北棟である。直径約0.5mの略円形の柱掘形に、直径約15cmの柱痕跡がある。柱間は桁行が1.7m、梁行が1.9mで、棟方向はN 2°Wである。東側柱の南から2個目の柱穴の柱痕跡に、須恵器甕と灰釉陶器碗（215）などが埋納されていた（第II-9図）。建物の廃絶に伴う祭祀の跡かもしれない。これにより建物はII-3期からIII-1期にかけてのものと判断した。

SB9780 SB9778の東側で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は最大で0.5~0.6mの略方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行1.9mで、棟方向はN 2°Wである。II-3~4期のものとみられ、SB9778とは約2.1m（7尺）の距離をおいてL字形の配置となるとみられる。

SB9782 調査区南半の東端付近で検出した5間×2間の南北棟である。最大で直径約0.6mの円形の柱掘形に、直径20cm強の柱痕跡がある。柱間はいずれも2.1m（7尺）である。棟方向はN 2°Eと、やや東に振れている。II-3~4期に属する。

SB9783 SB9782に重複して建て替えられた5間×2間の南北棟である。柱穴の重複関係からSB9783の方が後出である。柱穴は掘形が直径0.5mの円形に、柱痕跡が直径20cm弱とやや小振りになっているが、柱間は約2.15mと若干広くなっている。棟方向はN 2°WとSB9783より西に約4°振っている。時期的にはII-3期以降のものと考えられる。

SB9795 調査区の南西隅で検出したもので、第143次調査の成果とあわせて南北2間分を確認し、また同年



第II-9図 第152次調査 SB9778柱穴遺物出土状況図 (1:10)

度実施した第153次調査では、この延長部分で柱穴を確認していないため、3間×2間の東西棟になるとみられる。一辺約0.7mの隅丸方形の柱掘形に直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行2.4m、梁行2.1m、棟方向は東西正方位である。柱穴からの出土遺物がほとんどないが、II-2期以降の四面庇付建物SB9750の西側柱筋と東側柱筋を揃えており、また両者の間隔が約21m（約70尺）であるため、並存する可能性が高いと考えた。ただし、正方位であることを考えると、建築時期はII-1期まで遡る可能性もある。

SB9804 調査区中央西より検出した3間×2間の東西棟である。この建物も北側と西側の柱筋が欠落しているが、SB9739・9740などの建て替えとみて、南北2間と判断した。柱穴は直径0.3～0.4mの略円形で、柱間寸法は桁行で2.1m、棟方向はN 5°Wである。柱穴の重複関係から、東側にある同規模のSB9729より新しい。

SK9677 調査区の北端近くで検出した直径約2.6m、深さ約0.2mの浅い皿状の土坑である。土師器片の他、

第II-10図 第152次調査 SX9806平面図・断面図 (1:10)

緑釉陶器片が出土している。出土遺物からII-2～3期のものとみられるが、埋土の重複関係からII-2期のSB9676より古いと判断される。

SK9758 調査区のほぼ中央で検出された、II-2～3期の遺物を含む土坑群のひとつである。これらの土坑群からは、多量の土器類が出土している。斎宮跡の編年でII-2～3期のものだが、このうちII-3期と判断されるものはごくわずかであり、大多数はII-2期に属するものである。その中でも黒窯14号窯式期に位置づけられる須恵器や灰釉陶器が多数出土している点が注目される。土坑群には形状から区別してそれぞれ個別に遺構番号を与えたが、重複関係は明確に判別できなかった。II-2期からII-3期のごく初頭の間に掘削され、埋没したものとみられる。

SK9758は、2.5×2.0m、深さ0.35mの底部が平坦な皿状の土坑である。整理箱で2箱分の出土遺物があり、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯・甕などの他、灰釉陶器の出土が目立つ。また製塩土器、土錐、鉄製品片、炭化材も出土した。この土坑の埋土の上からSB9750

の柱穴が掘られている。

SK9759 SK9758の東に接する直径約1.3m、深さ約0.4mの略円形の土坑である。小型の土坑ながら、整理箱2箱分の出土遺物がある。土師器杯・椀・皿・甕、須恵器片、灰釉陶器、製塙土器、土錘などがある。

SK9760 SK9758の南東に広がる、 3.7×2.2 m、深さ約0.1mで底部の平坦な浅い土坑である。整理箱で4箱分の出土遺物があり、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯・高杯、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺のほか、製塙土器や土錘、炭化材が出土している。この土坑の埋土もSB9750を建てる際に柱穴を掘られている。

SK9761 SK9760の南西で検出した直径約1.5m、深さ約0.35mの円形土坑である。底部から円礫が出土している。出土遺物はやや少なく整理箱1箱分の土師器、須恵器、灰釉陶器、製塙土器が出土している。

SK9762 SK9760の南で検出した 2.0×1.8 m、深さ約0.1mの略方形の土坑である。出土遺物は少なく、土師器片、灰釉陶器片が少量見られたのみである。

SD9792 調査区南端付近のSD9799の下部で検出した溝である。調査区内での検出長は約7.8m、幅約0.9m、遺構検出面からの深さは約0.25mで、断面は逆台形状になる。溝はi-3グリッドで途切れるが、この部分が柳原区画の東西センターライン付近にあたること、第20次調査区には、この溝の西の延長部分でSD1044（第20次調査では平安時代後半としている）があり、これをつなぐと延長約52mになる。溝の方向もおおむね東西正方位であり、II-1期のSD1326と溝の心々間で約22.2m（75尺）となることから、区画内を細分する施設である可能性がある。第20次の調査成果とあわせて再検討する必要がある。

（5）他の斎宮II期の遺構

SB9754 調査区西端の第28次調査区との境で検出した5間×2間の南北棟である。柱穴は直径0.4m弱の円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行1.85m、梁行1.9mで棟方向は南北正方位である。III期のSB9764などに継続するとみられ、II期でも新相のものとみられる。

SB9765 SB9754の東で検出した4間×2間の南北棟である。柱穴は直径0.4m前後の円形で、柱痕跡は直径10cm強である。柱間は2.1mで、棟方向はN 1° Eである。これもII期でも新相のものとみられる。

SA9695 調査区北東隅付近の掘立柱列である。柱穴5個と延長7.5m分を検出した。柱穴は直径約0.3m、柱痕跡は直径10cm強で、柱間は1.4mから2.4mまでバラつきがある。方向は東で北に4°振った向きである。詳細な時期は不明である。

SA9756 調査区南半の西よりで検出した南北方向の掘立柱列である。柱穴は直径約0.3m、柱痕跡は直径約10cmである。掘立柱建物の残欠の可能性もあるが、柱間が2.1mから3.3mまでバラつきがあるため、柵列と判断した。N 4° Wの方向を取る。詳細な時期は不明だが、SD1326と交差する部分が最も柱間を広く取っており、両者には関連性があるかもしれない。

SA9796 調査区の南端付近で検出した掘立柱列である。柱穴で13個、少なくとも12間分の延長34.0mを検出した。柱穴は直径0.2~0.3mと小さく、柱間は2.5~2.7mとややバラつきがある。東から3間目のみ柱間4.5mと広い。東西に正方位の向きで、出土遺物や遺構の重複関係では確認できないが、II期に属するものとみられる。

SK9693 調査区北部で検出した 1.2×0.9 m、深さ約0.4mの不整円形の土坑である。少量の土師器片・須恵器片が出土している。

SK9697 調査区北西隅で一部を検出した土坑で、直径約1.1m、深さ約0.25mの円形の土坑である。土師器片・須恵器片が出土しており、埋土の重複関係からIII期のSD9681より古い。

SK9698 SK9697の北東で検出した長径約1.5m、深さ約0.2mの浅い土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9701 調査区の北西部で検出した直径約1.6m、深さ4cmほどの略円形の皿状の土坑である。土師器片・須恵器片のほか、ロクロ土師器椀の小片も出土しているが、白色の古式のものであり、遺構としてはII-3~4期頃のものと推定される。

SK9711 調査区北半の東端付近で検出した残長2.6m、幅1.3m、深さ6cmの浅い長方形の土坑である。黒色の埋土で、出土遺物も極めて少ないが、II期の古い段階のものではないかと推定される。

SK9718 調査区北西部の土坑群のひとつで、長径2.2m、深さ約0.25mの不整円形の土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9719 SK9718に南接する長径1.5m、深さ約0.3mの不整円形土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9728 調査区の北西部で検出した1.4×1.0m、深さ約0.35mの長方形の土坑である。土師器甕片が出土している。

SK9798 調査区の南端付近で検出した長さ3.6m、深さ約0.1mの細長い土坑である。調査当初、溝として検出したが、土坑に改めた。土師器片・須恵器片が出土している。埋土の重複関係からSD9046より新しいと判断される。

(6) 斎宮Ⅲ期の遺構

SB1386 第28次調査で検出された3間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.3～0.4mの不整円形で、柱痕跡は明らかではない。柱間は桁行1.7m、梁行1.9mで、棟方向はN 1°Wである。出土遺物が無く、時期決定は難しいが、後述するSB9751と棟方向を揃えることから、Ⅲ-1期頃のものである可能性が高い。

SB9707 調査区北半の中央で検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は最大で直径約0.4mの不整円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。調査当初、Ⅱ期の建物と考えたが、柱穴埋土内の出土遺物や、Ⅱ-2～3期のSB9708との重複関係からⅢ-2期以降のものと判断した。柱間は2.1m、棟方向はN 5°Wである。また、柱穴の重複関係からSA9717より新しい。

SB9713 調査区の北西端で南北2間分を検出した建物である。東西方向は2間以上になるが、平成20年度の第157次調査で、この延長は確認できず、東西3間の規模になるとみられる。柱穴は直径0.4～0.45mの円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行2.0mで、時期決定の根拠となる出土遺物は乏しいが、棟方向がN 1°Wであることから、これもⅢ-1期頃のものと判断した。重複するほぼ同規模のSB9714より新しい。

SB9714 SB9713とほぼ同位置で検出した建物で、同様に3間×2間の東西棟になるとみられる。柱穴は一辺0.4～0.5mの略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.3m、梁行2.2mで、この規模の建物としてはやや大きい。棟方向はN 1°Wで、Ⅲ-1期頃のものと推定される。

SB9722 SB9707の西側で検出した3間×2間の東西

棟である。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、柱痕跡は直径10cmほどと小振りである。柱間は桁行2.1m、梁行1.8mで、棟方向はN 4°Wである。出土遺物からⅢ-2～3期のものと考えられるが、柱穴の重複関係より、SB9707より古いと判断される。

SB9730 調査区の北半中央のやや東寄りのところで検出した東西3間とみられる建物である。北・西側柱を欠失するが、柱穴の規模や周囲の状況から3間×2間の規模になると推定される。柱穴は直径約0.4mの円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.2m、梁行1.9m、棟方向はN 4°Wである。Ⅲ-2～3期に属する。

SB9731 SB9730のやや南で検出した3間×2間の南北棟である。柱穴は直径約0.5mの略円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、棟方向はN 4°Wである。Ⅲ-2期に属するが、柱穴の重複関係からSB9730より古い。

SB9732 SB9731に重複して検出した3間×2間の南北棟である。柱穴は最大で直径約0.45mの楕円で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、棟方向はN 3°30' Wである。Ⅲ-2～3期に属する。

SB9733 SB9732と重複して検出した3間×3間の南北棟で、3間×2間の身舎の東側に1間分の庇出を持つ。南側柱の2個を欠失する。柱穴は小さく、最大で直径約0.3mの円形で、直径10cm前後の柱痕跡がある。柱間寸法はすべて2.1mで、棟方向はN 3°30' Wである。Ⅲ-2～3期に属するとみられるが、約1.9mの間隔をおいて、SB9770と西側柱筋を揃えており、並存していた可能性が高いとみられる。

SB9751 調査区のほぼ中央で検出した5間×4間の東西棟で、SB9750の建て替えとみられる四面庇付建物である（第Ⅱ-7図）。身舎では一辺0.6mの略方形の柱掘形に直径20cmほどの柱痕跡があり、庇では直径0.4～0.45mの略方形の柱掘形に直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間寸法は桁行2.25m、梁行2.15mである。棟方向は、N 1°Wである。

柱穴の掘形からはⅡ～Ⅲ-1期頃の、柱痕跡からはⅢ-2期頃の土器片が出土し、また他の遺構との前後関係は、Ⅲ-2～3期のSB9752や、Ⅲ期のSD9772より古いと判断されるので、SB9751はSB9750以後のⅢ-

1～2期頃に存続期間が求められる。

SB9752 調査区の中央で検出した5間×2間の東西棟である。北西隅の柱穴を欠失する。柱穴は直径約0.4mの略円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行2.2mで、棟方向はN 4°Wである。四面庇付建物のSB9751より後出とみられ、Ⅲ-2～3期に比定される。SB9773と同時期の規則的な建物配置を構成していたと推察される。

SB9753 SB9752をやや南東にずらした位置で検出された5間×2間の東西棟である。西側棟柱を欠失する。柱穴は直径0.3～0.5mの略円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行2.25m、梁行2.2mで、棟方向はN 2°Wである。Ⅲ-2期に属するとみられ、SB9752とSB9770のように、この建物もSB9773と約8.0mの距離を置いて、計画的な建物配置となっていた可能性がある。SB9752との前後関係を判断する具体的な根拠はないが、これらは四面庇付建物SB9751の廃絶後の建物とみられ、棟方向が近似するSB9753が先行する可能性は考えられる。

SB9757 調査区の中央で検出した3間×2間の東西棟である。南面の柱穴を1個欠失する。柱掘形は一辺約0.5mの略方形のものがあり、柱痕跡は直径20cm弱のものもある。柱間は2.2mで、棟方向はN 4°Wである。柱穴の出土遺物からⅢ-2～3期と推定した。

SB9764 調査区中央の西端で検出した5間×2間の南北棟である。柱穴は直径0.3～0.4mの略円形で直径10cm前後の柱痕跡がある。柱間は2.1mで、棟方向はN 3°Wである。出土遺物からⅢ-1期と判断した。周囲にⅡ期に同様の規模の南北棟SB9754・9765があり、Ⅱ-4期からⅢ-1期にかけて引き続き建て替えられたと考え、Ⅲ-1期の中で、SB9751よりも先行するものとして捉えた。

SB9770 調査区の中央東端付近で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は直径約0.4mの略円形で、直径15cmから20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行1.85m、梁行1.7mで、棟方向はN 3°Wである。先述したように、SB9733・9771と計画的な建物配置を取る可能性がある。

SB9771 SB9770の北側で、南側柱筋のみを3間分検出した。柱穴は一辺約0.5mの略方形で、直径20cm弱の柱痕跡を持つことから、3間×2間の東西棟

の残欠である可能性が高い。柱間は2.0mで、棟方向はN 4°Wである。柱穴の遺物からⅢ期と想定したが、柱穴の形状・規模からみて、あるいはⅡ期まで遡るかもしれない。

SB9773 調査区の中央東端付近で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物である。南側柱筋を欠失する。柱穴は最大のもので直径0.4mの略円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は2.0m、棟方向はN 4°Wである。SB9770と類似するが、前後関係は明らかではない。

SB9777 調査区南半の東端付近で検出した4間×2間の東西棟である。柱穴は一辺0.4～0.45mの略方形ないしは円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行1.95m、梁行1.75mで、棟方向はN 3°Wである。柱穴の出土遺物から、Ⅲ-1期に属するとみられる。

SB9781 SB9777に重複して検出した3間×2間の南北棟である。柱穴は直径約0.4mの円形で、直径10cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行2.0mで棟方向はN 3°Wである。Ⅲ期でも後半のものであろうか。

SA9716 調査区中央の西端で検出した、区画施設と考えられる掘立柱列である。柱穴は小さく、直径0.3m前後の円形で、柱痕跡は直径10cm弱である。検出長で8.0mあるが、調査区の北側にさらにのびるとみられる。柱間は約2.0mで、N 2°Eの方向を取る。柱穴の出土遺物からⅢ期に比定されるが、SB9713・9714と重複するため、これらより後出のものかもしれない。

SA9717 調査区の北半を二分する東西方向の区画施設と考えられる掘立柱列である。柱穴は直径0.3～0.35mの円形で、直径10cm弱の柱痕跡がある。柱穴12個、延長24.3m分を検出した。柱間は一定しないが、平均で2.15mほどになる。また西から7個目と8個目の柱穴の間が約2.8mと広くなっている、あるいは通路となっていた可能性がある。東で北に約2°振った向きになる。時期は柱穴の出土遺物からⅢ-1～2期とみられる。

SA9727 SA9717の南1mほどの所につくられた東西方向の掘立柱列である。柱穴で12個、延長23.65m分を検出した。柱穴の大きさはSA9717とほぼ同じで、柱間も平均2.15mほどになる。東で北に約4°北に振った向きになる。Ⅲ期でも後半のものであろうか。

調査区北西部の土坑群 調査区の北西部には、Ⅲ期に

属する小規模な土坑が多数作られており、これをまとめて記述する。

SK9699は調査区北西隅で検出した直径約1.8m、深さ約0.3mの円形の土坑である。土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・山茶椀片が出土している。その北東約1.5mのSK9700は、直径約2.3m、深さ約0.3mの円形土坑で、土師器片・ロクロ土師器片・緑釉陶器片・白磁片が出土している。SK9721は長径1.2m、深さ約0.2mの不整円形で、土師器片・山茶椀片が出土している。SK9723は約1.7m四方、深さ約0.15mの方形の土坑で、土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・山茶椀片・鉄製品の一部が出土している。東接するSK9724は2.3×1.9m、深さ約0.1mの長方形の土坑で、土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・山茶椀片・土錘・鉄製品の一部が出土している。以上の土坑群はいずれもⅢ-3期に位置づけられる。

このほかにもSK9704・9705・9720といった同様の土坑がある。出土遺物が微細なため、詳細な時期決定にはいたらなかったが、Ⅲ期でも後半に属する可能性が高い。

SK9715 先述の土坑群とはやや離れた位置にある2.6×2.1m、深さ約0.4mとやや大形の土坑である。土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・山茶椀・山皿・白磁片が出土しており、Ⅲ-3期に位置づけられる。

SK9734 調査区中央の東よりで検出した1.7×1.3m、深さ約0.1mの浅い楕円形の土坑である。土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・山茶椀片が出土しており、Ⅲ-3期に位置づけられる。

SK9741 調査区中央西よりで検出した3.4×2.6m、深さ約0.3mの不整円形の土坑である。複数の土坑が結合したものとみられるが、埋土や遺物では分離できなかった。土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・山茶椀片・瓦器皿が出土しており、Ⅲ-3期に位置づけられる。

調査区西部の土坑群 SK9747はSD9746に先行する東西約2.3m、深さ約0.2mの不整形土坑。SK9748は3.4×2.0m、深さ約0.3mの不整形の土坑で、土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・山茶椀片や石英塊が出土している。その南のSK9755は、直径約1.5m、深さ約0.15mの略円形の土坑で、土師器片・ロ

クロ土師器片などが出土した。これらの土坑群は、いずれもⅢ-2~3期頃に位置づけられる。

SK9797 調査区南端付近で検出した1.8×1.3m、深さ約0.5mの楕円形土坑である。土師器片・須恵器片が出土しており、Ⅲ-1~2期頃のものと推定する。

調査区北西部の溝遺構 調査区の北西部では、幅0.4~0.5m、深さ0.1~0.15mの小規模な溝遺構が多数検出された。これらは調査区北端で認められた近世以降の耕作溝と異なり埋土の固結度が高く、Ⅲ期の土器小片を多く含み、南端が16グリッド列まで延びてくることから耕作溝と識別される。SD9681・9683・9685・9686・9689は出土遺物からⅢ-2期以降のものと判別される。またSD9679・9682・9684も出土遺物が微細だが、Ⅲ期の後半には位置づけられるものと推定される。

SD0273 調査区の北と南を分ける、幅約1.1m、深さ0.1~0.15mの、断面U字状の浅い溝で、調査区内での延長は38.1mである。磨耗の進んだ土師器片や須恵器片などが出土している。南に平行して近世以降の土地の境界溝とみられるSD9809があり、少なくともⅢ-3期以降のものである。

SD9737・9738 調査区北半中央部でL字に折れる溝である。東西溝をSD9737、南北溝をSD9738とした。SD9737で幅約0.7m、深さ約0.2mで、調査区内での検出延長は19.7mである。SD9738は幅約0.5m、深さ約0.1mで、南にいくに従って浅くなる。またj-18グリッドのところで一端途切れたようになる。SD0273を越えてSD9772も本来は一連の溝であった可能性がある。SD9737・9738からは土師器片・須恵器片・灰釉陶器片が出土しており、Ⅲ期の中に位置づけられるが詳細な時期決定はできない。しかし、位置や形状から、Ⅲ-2期以降のSB9733などを囲郭する施設であったとみられる。

SD9772 調査区のほぼ中央で検出した幅約0.4m、深さ約0.1mの溝である。検出長は約7.5mだが、若干湾曲した形状である。出土遺物は少量の土師器片のみだが、埋土の重複関係から、SB9750・9751の柱穴より新しいと判断される。先述のとおりSD9738と一連のものである可能性がある。

SD9746 調査区南半の西端で検出した。幅0.5~0.7m、深さは最大で約0.2mで、溝底は南から北に傾斜して

第II-1表 第152次調査 挖立柱建物一覧表

遺構番号	ピット番号 ※()はグリッド番号	時期	規模		柱間寸法	主軸	方位 (N基準)	備考
			間(m)×間(m)					
SB1386	なし	III	3(5.1)×2(3.8)	(桁行)1.7m (梁行)1.9m		東西	N1° W	第28次調査で検出
SB1391	(e1)P1/(f1) P14・P15・P17/(f2)P4・P5	II-1	3(5.7)×2(3.6)	(桁行)1.9m (梁行)1.8m		東西	N1° E	第28次調査で検出
SB1392	(e1)P2/(f1)P8・P19/(g2) P7	II-1	3(7.5)×2(4.8)	(桁行)2.5m (梁行)2.4m		東西	N0°	第28次調査で検出
SB9007	なし	I-4～ II-1	(4)(-)×3(5.1)	(桁行)1.8m (梁行)1.7m		東西	N0°	西から2間目に間仕切り状の柱穴・第143次調査で検出
SB9010	(h2)P6・P7・P10/(i2)P8・P11/(h3)P2・P4・P5/(i3)P1	II-1	3(6.0)×2(3.8)	(桁行)2.0m (梁行)1.9m		南北	N0°	SB9794より古・第143次調査で検出
SB9671	(j12) p7・p8	II-2～3	3(5.4)×-(-)	1.8m	東西か	N3° W		
SB9672	(l12)P11・P17/(m12)P2・P6/(m13)P1・P7/(l13)P5/(k13)P1・P3	I-4～ II-1	5(12.0)×2(5.0)	(桁行)2.4m (梁行)2.5m		東西	N4° W	SB9678より新
SB9673	(k12)P3/(l12) P6	II-2～	-(-)×2(5.2)	2.6m	南北	N2° E	SB9674より古	
SB9674	(k12)P1・P4/(l12)P7・P12/(m12)P7・P8・P4・P5	II-3	-(-)×3(5.4)	1.8m	南北	N2° W	SB9673より新	
SB9676	(j12)P2/(k12)P5/(j13)P1・P3/(k13)P2・P4・P6・P7	II-2	3(5.85)×2(3.8)	(桁行)1.95m (梁行)1.9m		東西	N2° E	
SB9678	(m12)P3・P7/(n12)P2/(m13)P3・P12/(n13)P3・P8・P10	II-1～2	3(4.5)×2(3.4)	(桁行)1.5m (梁行)1.7m		南北	N2° W	SB9672より古
SB9687	(h13)P3・P7・P8/(i13)P6・P11/(h14)P2・P5・P6・P12/(i14)P2・P3・P6・P7	II-1～2	3(5.55)×2(3.6)	(桁行)1.85m (梁行)1.8m		東西	N2° W	SB9688より古
SB9688	(i13)P5・P7/(h14)P3・P4・P7・P13/(i14)P8	II-2	3(5.55)×2(3.6)	(桁行)1.85m (梁行)1.8m		東西	N4° W	SB9687より新
SB9690	(g14)P2・P9・P10/(g15)P4・P15・P18/(h15)P15・P24	II-2～3	3(6.3)×2(4.0)	(桁行)2.1m (梁行)2.0m		東西	N4° W	
SB9691	(i13)P1・P2・P3・P4/(j13)P2・P5/(i14)P1/(j14)P1・P2・P9/(k14)P4・P6・P7	II-2	5(9.5)×2(3.8)	1.9m	東西	N2° E		
SB9692	(k14)P5・P11/(j15)P9・P12/(k15)P3	II-2	3(6.3)×2(3.8)	(桁行)2.1m (梁行)1.9m		東西	N2° W	
SB9702	(f15)P14・P15・P21・P26/(e16)P6/(f16)P5・P6・P7	II-1	3(6.0)×2(2.0)	2.0m	東西	N0° W		
SB9706	(i15)P6/(j15)P2・P5・P6/(i16)P4・P5・P25/(j16)P1	I-4～ II-1	3(6.0)×2(3.6)	(桁行)2.0m (梁行)1.8m		東西	N0°	
SB9707	(h15)P3・P4/(i15)P7・P8・P14・P15・P18/(J15)P3・P4/(h16)P4・P6/(i16)P34・P38/(j16)P3・P4/(k16)P2・P3・P6・P11	III-2～	5(10.5)×2(4.2)	2.1m	東西	N5° W	SB9708より新	
SB9708	(j15)P13/(l15)P7・P8/(k16)P4/(l16)P1・P2・P10	II-2～3	3(6.3)×2(4.0)	(桁行)2.1m (梁行)2.0m		東西	N4° W	SB9707より新
SB9709	(n15)P2・P3・P5	I-4	(2)(-)×2(4.8)	2.4m	東西	N2° W		
SB9710	(o15)P1/(n16)P4/(n17)P4	I-4～ II-1	3(6.3)×2(4.2)	2.1m	南北	N4° W	SB9712より古	
SB9712	(n16)P1/(n17)P1・P2・P3	II-1	3(7.2)×(2)(-)	2.4m	南北	N2° W	SB9710より新	
SB9713	(d16)P2・P3/(d17)P2・P3・P12・P13	III-1か	(3)(-)×2(4.0)	(桁行)2.1m (梁行)2.0m		東西	N1° W	SB9714より新
SB9714	(d16)P4・P5/(d17)P1・P10/(d18)P3	III-1か	(3)(-)×2(4.4)	(桁行)2.3m (梁行)2.2m		東西	N1° W	SB9713より古
SB9722	(g16)P7・P8・P9・P11・P29/(h16)P5・P16・P28・P29・P31/(i16)P21	III-2～3	3(6.3)×2(3.6)	(桁行)2.1m (梁行)1.8m		東西	N4° W	SB9707より古
SB9725	(g16)P2・P21/(h16)P10・P12・P20・P26・P33・P34/(g16)P4	II-2～3	3(6.75)×(2)(-)	(桁行)2.25m (梁行)1.6m		東西	N4° W	SB9722より古か
SB9726	(h17)P3/(i17)P5・P6・P10	II-2～3	3(6.3)×-(-)	2.1m	東西	N4° W		
SB9729	(g18)P2・P3・P4・P5/(h18)P1・P2	II-2	3(5.7)×2(3.8)	1.9m	東西	N2° E	SB9804より古	

遺構番号	ピット番号 ※()はグリッド番号	時期	規模		柱間寸法	主軸	方位 (N基準)	備考
			間(m)	間(m)				
SB9730	(l17)P3・P5/(m17)P4	III-2~3	3(6.6)×-(-)	(桁行)2.2m (梁行)1.9m	東西	N4° W	SB9731より新	
SB9731	(l17)P4・P5・P12・P13・P19・P22/(m17) P5・P6・P11/(l18)P11・P12・P19・P21/ (m18)P7・P8・P10・P11・P12・P14	III-2	3(6.0)×2(4.2)	(桁行)2.0m (梁行)2.1m	南北	N4° W	SB9730より古	
				(桁行)2.0m (梁行)2.2m				
SB9732	(l17)P6・P20・P21/(m17)P13・P15/(l18) P4・P5・P13・P16/(l19)P17/(m19)P22・P26	III-2~3	3(6.0)×2(4.4)	(桁行)2.0m (梁行)2.2m	南北	N3° 30' W		
SB9733	(l17)P1・P7・P8/(m17)P2・P10・P16・P1 7/(l18)P2・P3/(m18)P5・P6・P18・P19/ (n17)P6/(n18)P3・P4・P7	III-2~3	3(6.3)×3(6.3)	2.1m	南北	N3° 30' W	東面に庇一間(庇出2.1m)	
SB9735	(n18)P9・P10/(m19)P18・P19/(n19)P9	I-4~ II-1	(4)(-)×2(4.2)	2.1m	東西	N4° W	SB9731より古	
SB9739	(e18)P2・P5/(f18)P9・P10・P18/(g18)P8・ P10/(e19)P3・P6/(f19)P1・P3・P8/(g19) P1・P2/(g20)P2	II-1~2	3(5.4)×2(3.6)	1.8m	東西	N1° W		
SB9740	(e19)P1・P2・P10/(f20)P3・P4	II-1~2	3(6.0)×2(3.6)	(桁行)2.0m (梁行)1.8m	東西	N1° W	SB9804より古	
SB9742	(k18)P2/(k19)P3	II-2~3	3(6.3)×(2)(-)	(桁行)2.1m (梁行)1.7m	東西	N1° W		
SB9743	(k18)P1/(l18)P1/(l19)P2	II-1か	3(5.7)×2(4.0)	(桁行)1.9m (梁行)2.0m	東西	N1° W	SB9744より新	
SB9744	(j18)P2/(i19)P2	II-1~2	3(5.4)×2(3.2)	(桁行)1.8m (梁行)1.6m	東西	N2° W	SB9743より古	
SB9745	(m19)P7/(n19)P19・P20/(o19)P1/(m20)P18・ P19・P24/(o20)P1/(m21)P5/(n22)P3・P4	II-1~2	5(10.0)×2(4.4)	(桁行)2.0m (梁行)2.2m	南北	N1° W	SB9774・9775より古	
SB9750	(h20)P9・P16・P17・P26/(i20)P14・P15・ P18/(h21)P10・P11・P12・P15・P20/(i21) P19・P20・P30・P31/(j21)P1・P14・P17・ P18/(h22)P3・P11・P13・P14・P18・P20/ (i22)P3・P4・P5・P22・P24・P26/(j22)P1 0・P11・P13・P14	II-2~ III-1	5(10.75)×4(8.6)	2.15m	東西	N1° W	身舎3間×2間に東西南北に1間の庇が付く四面 庇付建物(庇出はいずれも2.15m)	
SB9751	(g20)P8・P9・P16・P17/(h20)P7・P10・ P12・P30/(j20)P4・P10・P11/(g21)P2・ P4・P5・P7・P9・P13・P17・P18/(h21) P6・P23/(i21)P7・P8/(j21)P19・P21/(g22) P3・P5・P10・P13・P20・P24・P32/(h22) P2・P6・P12・P19・P21/(i22)P9・P14・ P15・P17・P19/(j22)P4・P8・P12	III-1~2	5(11.25)×4(8.6)	(桁行)2.25m (梁行)2.15m	東西	N1° W	身舎3間×2間に東西南北に1間の庇が付く四面 庇付建物(庇出は東西2.25m、南北2.15m)・SB975 2より古・III-2期には廃絶	
SB9752	(g20)P10/(h20)P4・P14・P15/(i20)P5・ P7・P13・P21・P22/(g21)P17/(h21)P18・ P24/(g21)P2	III-2~3	5(10.5)×2(4.4)	(桁行)2.1m (梁行)2.2m	東西	N4° W	SB9751より新	
SB9753	(g20)P5・P6/(h20)P5・P6・P18・P19/ (i20)P10/(h21)P28・P30・P32/(i21)P13・ P25・P26/(j21)P4・P9・P12・P15	III-2	5(11.25)×2(4.4)	(桁行)2.25m (梁行)2.2m	東西	N2° W	SB9763より新	
SB9754	(e21)P2・P3/(f21)P13/(f22)P9・P10/(e23) P3/(f23)P9・P10・P11	II-3か	5(9.25)×2(3.8)	(桁行)1.85m (梁行)1.9m	南北	N0°		
SB9757	(g21)P1・P6・P12・P14/(g22)P2/(i21) P12/(h22)P1	III-2~3 か	3(6.3)×2(4.2)	2.1m	東西	N4° W		
SB9763	(k19)P6/(k20)P3/(l20)P37/(j21)P8	I-4か	3(6.3)×2(4.2)	2.1m	東西	N10° W	SB9753より古	
SB9764	(g21)P20・P21/(g22)P6/(f23)P8/(g23)P2・ P16	III-1~	5(10.5)×2(4.2)	2.1m	南北	N3° W	SB9765より新	
SB9765	(f22)P12・P13・P17・P18/(g22)P15・P31 (g23)P13/(f24)P3	II-3か	4(8.4)×2(4.2)	2.1m	南北	N1° E	SB9764より古	
SB9766	(g22)P23・P29/(h22)P7・P23・P24/(g23) P3・P4・P10・P11・P15/(h23)P5・P6・P7	II-2	3(6.45)×2(4.0)	(桁行)2.15m (梁行)2.0m	東西	N2° E	SB9767より古	
SB9767	(g23)P8/(h23)P2・P4・P9/(i23)P8/(g24) P3/(h24)P2・P3・P4/(i24)P11	II-2	3(6.3)×2(4.0)	(桁行)2.1m (梁行)2.0m	東西	N2° W	SB9766より新	
SB9768	(i23)P11/(j23)P3・P4/(i24)P2/(j24)P1・ P10/(i25)P8/(j25)P2	II-1~2	3(5.7)×2(3.8)	1.9m	南北	N1° W		
SB9770	(l19)P1・P11・P12/(m19)P5・P8・P9・P1 3/(l20)P9/(m20)P16/(n20)P4	III-2~3	3(5.55)×2(3.4)	(桁行)1.85m (梁行)1.7m	東西	N3° W	SB9745・9775より新	

遺構番号	ピット番号 ※()はグリッド番号	時期	規模		柱間寸法	主軸	方位 (N基準)	備考
			間(m)×間(m)					
SB9771	(l19)P3・P4・P19/(m19)P10・P11・P21・P24	IIIか	3(6.0)×-(-)	(桁行)2.0m	東西	N4° W		
SB9773	(l19)P7/(m19)P16・P17/(m20)P17	III-2か	3(6.0)×(2)(-)	2.0m	東西	N4° W		
SB9774	(l20)P21・P22・P41/(n19)P12・P13/(m20)P1・P21・P25/(n20)P12・P17/(l21)P30・P33・P34/(m21)P8/(n21)P1・P2/(m22)P4/(n22)P5・P6	II-2~3	3(9.0)×3(6.4)	(桁行)3.0m	南北	N1° W	東面に庇一間(庇出2.0m)	
				(梁行)2.2m				
SB9775	(m20)P27/(l21)P6・P14・P18/(m21)P6・P18・P19/(m22)P33・P35	II-3	3(9.9)×2(4.6)	(桁行)3.3m (梁行)2.3m	南北	N3° W	SB9770より古・SB9745より新	
SB9776	(l20)P8・P17・P18/(m20)P10・P11/(n20)P3・P10・P11/(l21)P4・P5・P9・P12/(m21)P11/(n21)P9・P14	II-3~4	3(6.6)×2(4.4)	2.2m	南北	N1° W	SB9770より古	
SB9777	(l21)P32/(m21)P17・P20・P30・P34/(n21)P6・P12/(l22)P27・P28/(m22)P21・P31・P32/(n22)P11	III-1	4(7.8)×2(3.5)	(桁行)1.95m	東西	N3° W		
				(梁行)1.75m				
SB9778	(k22)P3・P4・P8・P9/(l22)P26/(l23)P11・P22・P26/(l24)P5・P6・P10・P11	II-3~ III-1	5(8.5)×2(3.8)	(桁行)1.7m (梁行)1.9m	南北	N2° W	SB9779より新	
SB9779	(k22)P1/(k23)P1/(l22)P5・P24/(l23)P3・P9・P15・P16	II-1~2	3(6.0)×2(4.0)	2.0m	東西	N1° W	SB9778より古	
SB9780	(l22)P1・P8・P9・P12・P17/(m21)P4/(m22)P20・P22・P30/(n22)P12	II-3~4	3(6.3)×2(3.8)	(桁行)2.1m (梁行)1.9m	東西	N2° W	SB9775より古	
SB9781	(m21)P16/(n21)P11/(m22)P24/(n22)P14・P16/(m23)P2・P4・P6/(n23)P8	III	3(6.3)×2(4.0)	(桁行)2.1m (梁行)2.0m	南北	N3° W		
SB9782	(m22)P18・P36/(n22)P9/(n23)P3・P6・P11・P12・P13/(n24)P7・P9	II-3~4	5(10.5)×2(4.2)	2.1m	南北	N2° E	SB9783より古	
SB9783	(m22)P6・P7/(m23)P5/(n23)P2・P4・P5・P9/(n24)P1・P2・P10/(m25)P2・P3/(n25)P2	II-3~	5(10.75) ×2(4.3)	2.15m	南北	N2° W	SB9782より新	
SB9794	(h2)P4・P5・P8・P9/(i2)P9・P10・P13・P14/(h3)P3・P6・P7/(i3)P2・P3	II-1~2	3(6.3)×2(4.2)	2.1m	南北	N2° W	SB9010より新	
SB9795	(g3)P6	II-2	(2)(-)×2(4.2)	(桁行)2.4m (梁行)2.1m	東西	N0°		
SB9800	(h24)P5・P8・P12・P13/(i24)P13・P19/(j24)P2・P3/(h25)P4・P9・P11・P12・P16・P20・P21・P22/(i25)P4・P5・P6/(j25)P1・P3・P4・P5/(h1)P3・P5・P8・P9・P11/(i1)P4・P5・P6・P7・P9/(j1)P2・P3・P4・P12・P13	II-1	5(11.25)×4(8.4)	(桁行)2.25m	東西	N1° W	身舎3間×2間に東西南北に1間の庇が付く四面庇付建物(庇出は東西2.25m・南北2.1m)	
				(梁行)2.1m				
SB9802	(n2)P4	II-2~3	3(7.5)×-(-)	2.5m	南北	N4° W	SB9729より新	
SB9804	(e18)P4/(g18)P9/(f19)P7・P10	IIか	3(6.3)×2(4.2)	2.1m	東西	N5° W		
SA9695	(m14)P7	IIか	検出長7.5m	2.4m・1.7m・1.4m・2.1m	東西	N86° E	4間分検出・柱間寸法のバラつき大きい	
SA9716	(d17)P7・P11・P13/(d18)P7・P8	III	検出長8.0m	2.0m	南北	N2° E	4間分検出	
SA9717	(e16)P4/(g16)P26・P28/(h16)P8・P13/(i16)P41・P42/(j16)P5・P6/(k16)P9	III-2	検出長24.3m	2.15m	東西	N88° E	11間分検出・i16グリッドの部分のみ柱間が約3.0m	
SA9727	(f17)P3・P4/(g17)P10・P13/(h16)P32/(i16)P19・P32/(k16)P7/(l16)P6	III	検出長23.65m	2.15m	東西	N86° E	11間分検出	
SA9756	(f21)P12・P14/(f22)P4/(f23)P1	II-3 ~III	検出長9.6m	2.1m・2.0m・3.3m・2.2m	南北	N4° W	4間分検出・掘立柱建物の一部か	
SA9796	(g2)P8・P10/(i2)P3・P4・P6・P7/(l2)P1/(n2)P5	IIか	検出長34.0m	2.5m~2.7m	東西	N90° E	12間分検出・m2グリッドの部分のみ柱間が4.5m	

第II-2表 第152次調査 遺構一覧表

遺構名	遺構の種別	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
SD0273	溝	溝4	e19・f19・g19・h19・i19・j19・k19・l19・m19・n19・o19	III-3~	土師器:杯A・皿A・甕・鍋B ロクロ土師器:皿・小皿 須恵器片 灰釉陶器:椀
SE0276	井戸	井戸	j24・k24	II-1~	土師器片
SD1326	溝	溝49	e22・f22・g22・h22	II-1	土師器:杯A・鍋B・甕 須恵器:壺・甕
SD6801	溝	溝56・62	e1・f1・f2・g2・h2・i2・j3・k3	Iか	土師器片 奈良古道側溝
SK9020	土坑	土坑39	l3	近世~	土師器片 須恵器片 瓦片
SD9046	溝	溝58	j25・j1・j2・j3	I-4~II-1	土師器:杯A・杯G・椀A・皿A・皿B・甕・鍋B 須恵器:杯A・蓋・甕
SE9670	井戸	土坑64	h11・h12	I-4~II-1	土師器:杯A・杯G・椀A・皿A・高杯・小型把手付壺・甕・長胴甕・竈 黒色土器:椀 須恵器:杯A・杯B・皿B・蓋・盤・壺・平瓶・甕 炭化材
SK9675	土坑	土坑62	m12・n12	I-4	土師器:杯A・杯G・椀B・皿A・蓋・高杯・盤・把手付盤・鉢・鍋A・甕・長胴甕・竈 須恵器:蓋・鉢・甕
SK9677	土坑	土坑63	j12・j13	II-2~3	土師器:杯・椀A・皿A・注口・甕・竈 緑釉陶器片
SD9679	溝	溝30	h12・h13・h14	III	土師器:杯A・甕 ロクロ土師器:小皿・台付小皿 須恵器:甕 灰釉陶器片 鉄製品
SK9680	土坑	土坑65	h13	II-1~2	土師器:長胴甕
SD9681	溝	溝19	e15・f15	III-2~	土師器:小皿・蓋 須恵器:杯・壺
SD9682	溝	溝37	e15・f15	IIIか	土師器片
SD9683	溝	溝15	f14・f15	III-2~	土師器:杯・皿・甕 ロクロ土師器:小皿 須恵器:甕・壺 陶器:椀(山茶椀) 土鍾
SD9684	溝	溝17・18	f14・f15・f16	III	土師器:杯A・甕 須恵器:壺
SD9685	溝	溝14	g13・g14・g15	III-2~	土師器:皿・小皿・台付小皿・竈 ロクロ土師器:台付小皿 須恵器:壺・甕 灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀)・小皿(山皿)
SD9686	溝	溝13	g13・g14・g15・g16	III-2~	土師器:台付小皿・甕 ロクロ土師器:小皿 須恵器:壺 陶器:皿(山皿) 白磁片
SD9689	溝	溝22	h14・h15	III-2~	土師器片 須恵器片 陶器片(山茶椀) 灰釉陶器片
SK9693	土坑	土坑21	j14	II	土師器片 須恵器片
SK9694	土坑	土坑24	j14	II-1~	土師器:杯A・鉢 須恵器:蓋
SD9696	溝	溝12	n12・n13・o13・n14・o14・n15・o15・n16・o16・n17・o17・o18・o19・o20・n21・o21・n22・n23・n24・n25・n1	近世~	土師器片 須恵器片 緑釉陶器片 陶器片 瓦片
SK9697	土坑	土坑26	e15・f15	IIか	土師器:杯A・椀A・小皿・甕 須恵器片 灰釉陶器片
SK9698	土坑	土坑29	f14・f15	IIか	土師器:杯・甕 須恵器片
SK9699	土坑	土坑17	f15	III-3	土師器:小皿・台付小皿・甕 ロクロ土師器:小皿 須恵器片 陶器:椀(山茶椀) 鉄製品 炭化材
SK9700	土坑	土坑13	g14・g15	III-3	土師器:杯・皿・小皿・甕 ロクロ土師器:椀・台付小皿 緑釉陶器:椀 白磁:椀
SK9701	土坑	土坑19	g15・h15	IIか	土師器:甕 ロクロ土師器:椀 須恵器:甕
SK9703	土坑	土坑14	f15・g15・f16・g16	II-1~2	土師器:杯A・高杯・甕・鍋B 須恵器片

遺構名	遺構の種別	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
SK9704	土坑	土坑23	f16・g16	Ⅲ	土師器:杯A・ⅢA・ⅢB・甕 ロクロ土師器:椀
SK9705	土坑	土坑31	f16・g16	Ⅲ	土師器片
SK9711	土坑	土坑9	m15・n15・m16・n16	Ⅱか	土師器:甕 須恵器:杯・細頸壺・甕
SK9715	土坑	土坑36	c18・d18	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿・高杯 ロクロ土師器:小皿 須恵器:杯B・甕 陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿) 白磁:椀
SK9718	土坑	土坑28	e17	Ⅱか	土師器:甕 須恵器:甕
SK9719	土坑	土坑32	e17	Ⅱか	土師器片 須恵器片
SK9720	土坑	土坑27	e17・f17	Ⅲ	土師器:杯・高杯・甕 ロクロ土師器:小皿
SK9721	土坑	土坑15	g15・g16	Ⅲ-3~	土師器:杯A・甕 須恵器片 陶器:椀(山茶椀)
SK9723	土坑	土坑17	g17	Ⅲ-3~	土師器:皿・台付皿・甕 ロクロ土師器:小皿 須恵器片 灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀) 鉄製品
SK9724	土坑	土坑16	g17・h17	Ⅲ-3	土師器:皿・甕 ロクロ土師器:小皿 須恵器:蓋・甕 灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀) 土鍤 鉄製品
SK9728	土坑	土坑20	g16	Ⅱか	土師器:甕
SK9734	土坑	土坑8	m17・n17	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿 ロクロ土師器:小皿 須恵器片 陶器:椀(山茶椀)
SK9736	土坑	土坑7	m18・n18	Ⅱ-1~2	土師器:杯A・椀A・ⅢA・甕・竈 黒色土器:椀 須恵器:杯B・蓋・盤 炭化材
SD9737	溝	溝8	j15・k15・l15・m15・n15	Ⅲ	土師器:甕 須恵器:甕 灰釉陶器:皿
SD9738	溝	溝7	j15・j16・j17・j18	Ⅲ	土師器:杯A・甕 須恵器片
SK9741	土坑	土坑18	g18・h18	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿・台付小皿・高杯・甕 ロクロ土師器:台付皿・台付小皿 須恵器:壺 灰釉陶器:椀 緑釉陶器片 陶器:椀(山茶椀) 瓦器:小皿
SD9746	溝	溝38	f19・f20・f21・f22	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・台付皿・高杯・甕 ロクロ土師器片 須恵器片 灰釉陶器:皿・壺 白磁:椀 輕石
SK9747	土坑	土坑34	f20	Ⅲ-2~	土師器:皿・小皿 陶器片
SK9748	土坑	土坑44	f20・f21	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・小皿・台付小皿 ロクロ土師器:小皿 須恵器片 灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀) 石英塊
SD9749	溝	溝47	e20・e21・e22・e23・e24・e25・e1・e2	近世~	土師器片 須恵器片 陶磁器片 瓦片
SK9755	土坑	土坑43	f21・f22	Ⅲ-2~3	土師器:小皿 ロクロ土師器:小皿 須恵器:甕
SK9758	土坑	土坑52	h21・h22	Ⅱ-2~3	土師器:杯A・椀A・皿A・蓋・甕・竈 須恵器:杯B・壺・甕 灰釉陶器:椀・皿 製塙土器 土鍤 鉄製品 炭化材
SK9759	土坑	土坑53	h21・i21・h22・i22	Ⅱ-2~3	土師器:杯A・椀A・椀B・皿A・皿B・甕 須恵器:甕 灰釉陶器:椀・皿 製塙土器 土鍤
SK9760	土坑	土坑47	i21・h22・i22	Ⅱ-2~3	土師器:杯A・椀A・皿A・皿B・鉢・甕・竈 須恵器:杯・高杯・壺 灰釉陶器:椀・皿・段皿・細頸壺 製塙土器 土鍤 炭化材
SK9761	土坑	土坑48	h22・i22	Ⅱ-2~3	土師器:杯A・椀A・甕 須恵器:椀・蓋・甕 灰釉陶器:椀・皿 製塙土器
SK9762	土坑	土坑45	i22・i23	Ⅱ-2~3	土師器:杯A・甕 灰釉陶器:椀
SD9772	溝	溝44	j20・j21・j22	Ⅲ	土師器片
SD9784	溝	溝50	f22・f23・f24・f25・f1・f2	Ⅲ~	土師器片 ロクロ土師器:椀 須恵器片

遺構名	遺構の種別	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
SK9785	土坑	土坑42	g1	II-1	土師器:杯A・杯B・杯G・椀A・椀B・皿A・皿B・蓋・高杯・鉢・盤・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋B・竈・用途不明品(把手部) 黒色土器:椀・小椀 須恵器:杯A・杯B・把手付杯・蓋・葵壺蓋・高杯・盤・壺・壺E・甕・円面鏡 土鍤 製塙土器 鉄製品:釘・刀子・円盤状製品 金属滓 炭化材
SK9786	土坑	土坑41	g25・h25・g1・h1	II-1~2	土師器:杯A・椀A・椀B・皿A・蓋・高杯・小型平底壺・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋B 黒色土器:椀・台付椀・甕 須恵器:杯A・杯B・蓋・盤・高杯・鉢・壺E・壺L・短頸壺・甕 製塙土器 土鍤 鉄製品 烧粘土塊 炭化材
SK9787	土坑	土坑59	g1・h1	II-1~2	土師器:皿A 須恵器:蓋
SD9788	溝	溝43	g1・h1	II-1~	土師器:杯・甕 須恵器:甕
SK9789	土坑	土坑46	h1・h2	II-1~2	土師器:杯A・皿A・蓋・甕・竈 須恵器:盤・甕 炭化材
SD9790	溝	溝63	f2・g2・h2	Iか	土師器片 奈良古道の側溝の一部か
SD9791	溝	溝46	h2・i2・j2	III-3~	土師器:杯・皿・高杯・甕・竈 ロクロ土師器:台付小皿 須恵器:蓋・壺・甕 灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀) 白磁:椀
SD9792	溝	溝53	g2・h2	II-2~	土師器:杯A・甕 須恵器:蓋
SD9793	溝	溝54	g2・h2・i2・g3・h3・i3	近世~	土師器片 須恵器片 瓦片
SK9797	土坑	土坑60	i1・i2	III-1~2	土師器:杯・小皿 須恵器片
SD9798	溝	溝45	j1・j2	II~III	土師器片 須恵器片
SK9799	土坑	溝40	i2・j2・k2・l2・m2・n2・o2・i3・j3・k3・l3・m3・m3・o3	近世~	土師器片 ロクロ土師器片 須恵器片 陶器片(山茶椀) 施釉陶器片 磁器片 瓦片
SD9801	溝	溝42	k2・l2・m2・n2・o2	近世~	土師器片 須恵器片
SK9803	土坑	土坑37	n25・n1	I-4~II-1	土師器:杯A・杯G 須恵器:盤・甕
SK9805	土坑	土坑55	i1・i2	I-4~II-1	土師器:杯A・皿A・椀A・鍋B 須恵器:蓋・甕 土鍤 雲母片
SX9806	埋納遺構	p12	g23	II-1~	須恵器:杯B
SD9809	溝	溝5	f19・g19・h19・i19・j19・k19・l19・m19・n19・o19	近世~	土師器:杯A・皿A・甕 ロクロ土師器:小皿・台付小皿 須恵器片 灰釉陶器:皿 近世陶磁器片

いる。細片が多いが、土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・白磁片・軽石が出土している。

埋土の重複関係から、SK9747・9748より新しいと判断され、III-3期以降のものとみられる。

SD9784 f-22グリッドで途切れたSD9746の南端から約1mのところから南にのびる溝だが、若干形状が異なるためSD9746とは別の遺構番号を付した。幅約0.5m、深さ0.1~0.2mで、溝底は南に向かって傾斜している。調査区内では延長18.3mを検出した。形状や規模はやや異なるものの、同年度の第153次調査区のSD9810とも一体のものである可能性がある。出土遺

物は少なく、土師器片・ロクロ土師器片・須恵器片が出土しており、III期の後半のものと推定される。

SD9791 調査区の南端付近で検出した、幅約0.7m、深さ約0.2mの溝で、調査区内では延長13.8mを検出した。土師器片・ロクロ土師器片・山茶椀片・白磁片が出土しており、III-3期以降のものと考えられ、SD9894などと一体となって区画を構成する溝になる可能性がある。

4 出土遺物

第152次調査全体では、一次整理の段階で整理箱で

289箱の遺物が出土している。平均して遺構検出面までが浅いので、包含層出土の遺物は少なく、その多くは土坑などからの遺構から出土したものである。柳原区画の調査成果については、引き続き正報告書の刊行も予定しているので、今回は多量の良好な遺物が出土した土坑一括の資料を中心に概述したい。

(1) SK9675出土遺物（1～12）

調査区の北東隅で、検出した土坑で、全体の2分の1ほどを調査したが、整理箱で5箱と、多量の遺物が出土している。遺物はすべて土器類で、土師器は杯A・杯G・椀B・皿A・蓋・高杯・盤A・盤B・鉢・甕・鍋A・長胴甕・甌が、一方、須恵器は杯蓋・鉢・甕が出土しているが、量的には少ない。土師器杯A・皿Aは（1～3・8）のように底部をケズリ手法で調整するものと、（4）のようにナデ調整するものがある。杯は底部が平坦で、口縁がしっかりした屈曲をもってのびる。（1・2）は口径20cm前後の大形品である。また、（5）のように、口縁に油煙が付着するものもみられる。精良な胎土を用い、器壁も平滑に仕上げるものが多い。粗製の杯G（6・7）も口径12～14cmとやや大振りである。

また、土師器では盤がまとまって出土することも注目される。盤Aの（9・10）と、盤Bの（11）がある。特に（11）は、精良な胎土を用い、内外面をヘラミガキで仕上げている。鍋A（12）は一般的な形状ながら、器壁が厚いしっかりしたつくりである。

以上のようにSK9675出土の土器群は、精製品を多く含み、盤Bのような一般的でない器形も含むことから、日常的な使用と異なる特殊な一群とみることができる。これらは斎宮跡の土器編年でI～4期に比定できるとみられるが、史跡東部への斎宮の遷移の時期のものと考えられ、周辺遺構などの状況とあわせてその歴史的意義を検討する必要があるとみられる。

(2) SX9806出土遺物（13）

調査区南半の西よりで検出した埋納遺構からの出土遺物である。（13）は直径約0.3mのピットから出土した、推定径23.0cmの大形の須恵器杯Bである。浅黄色の胎土で、底部から強い稜をもって口縁部が立ち上がる。美濃須衛窯の第IV期第3小期に位置づけられるものとみられ、II～1期頃に比定できる。出土状況から、地鎮などに伴う資料と考えられるが、当該期の建

物は近接した位置にはない。

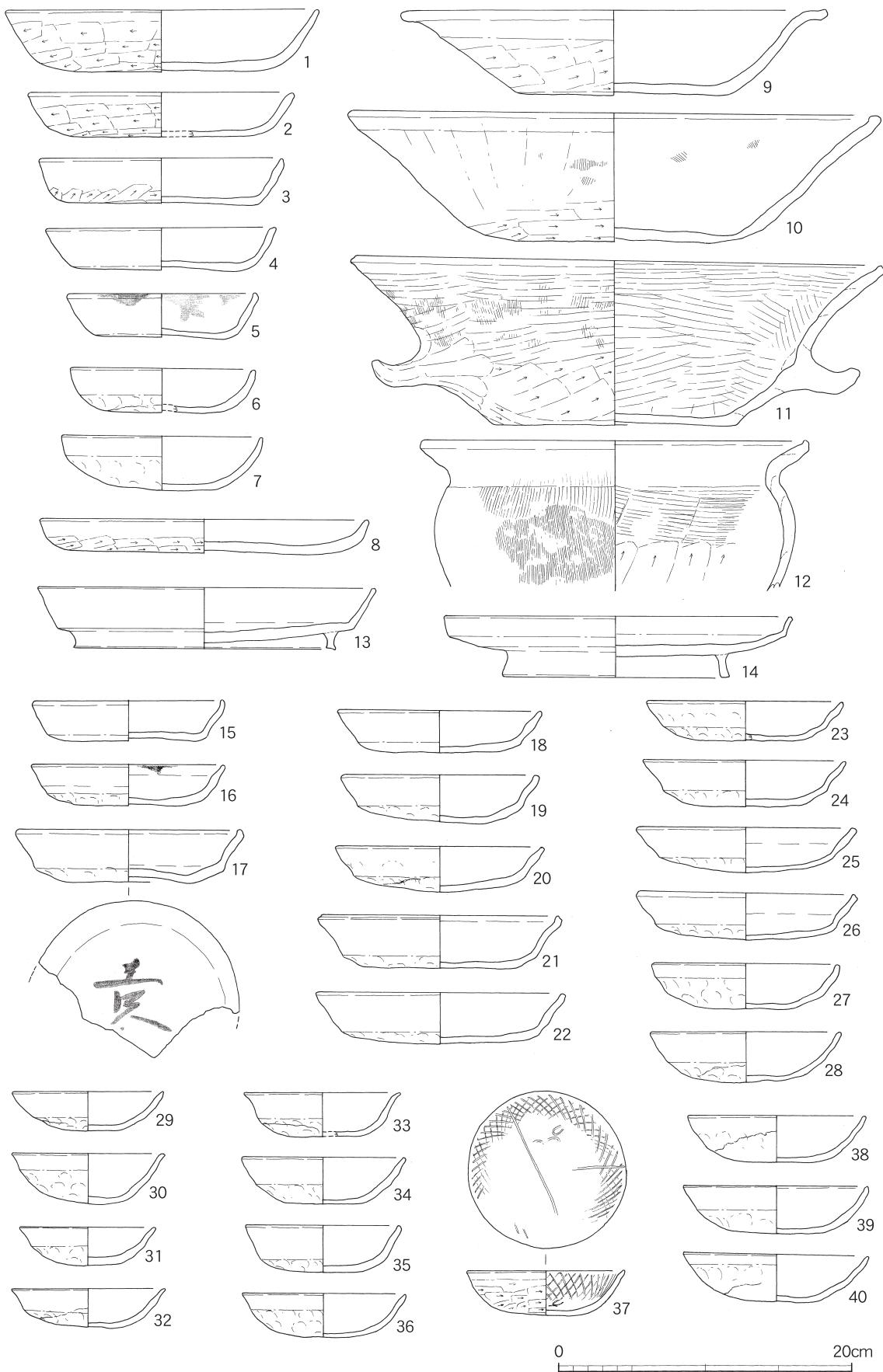
(3) SK9785出土遺物（117～194）

調査区南西隅で検出した土坑で、整理箱で37箱分の土器類・金属製品関係の遺物・炭化材が出土した。

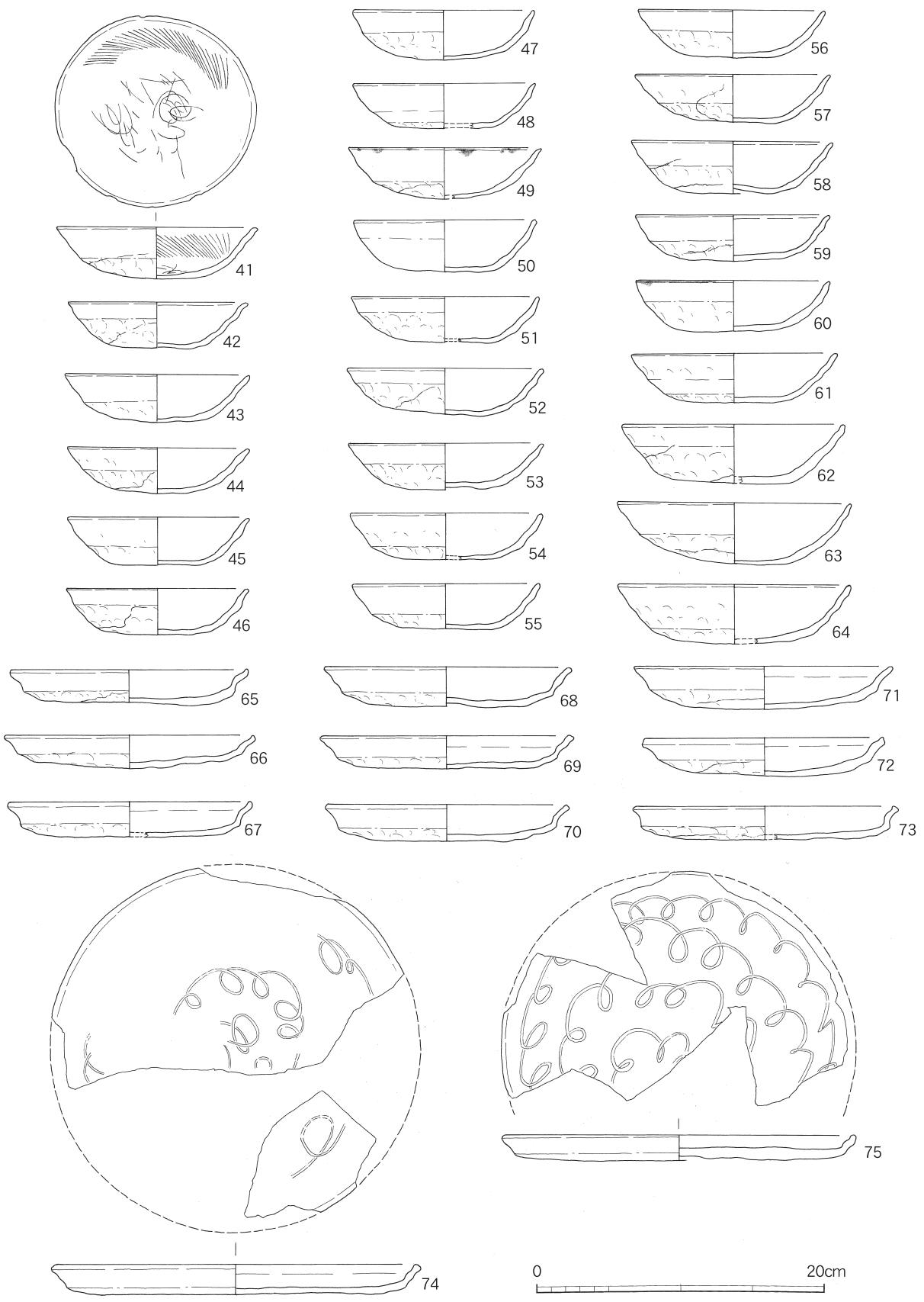
土器類からみると、土師器は杯A・杯B・杯G・椀A・椀B・皿A・皿B・蓋・高杯・鉢・盤A・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋B・竈のほか、全体の形状は不明だが、把手とみられる一部がある。杯・椀には完形品ないし完形に復元できるものが多く、口縁に油煙が付着するものもみられる。杯・椀・皿類はすべて底部をナデ調整するものあり、杯A（117～130）で口径約13～17cm、椀A（132～150）で10～17cmで、皿は17～18cmが中心で最大で22cmを超えるものもある。椀Aでは、内面に稠密に螺旋や放射状あるいは格子状の暗文を施すものが多数みられ、外表面をヘラミガキするものもある。また口径10cm前後の小型品も多い。椀Bは角高台を持ち、外表面をヘラミガキするもの（167・168）や、内面に暗文を施すもの（169）がある。皿A（151～158・162～164）にも内面に「×」や螺旋の暗文を施すものが散見される。皿B（166）は口縁端部内側に沈線をもち、奈良時代的な形状のものである。貯蔵具には平底の鉢（170・171）が、煮炊具としては鍋・甕（172～178）がある。長胴甕（176）や鍋A（177）・鍋B（178）など大形の器種もある。黒色土器には大小のA類椀（179・180）がある。

須恵器は、杯A・杯B・把手付杯・蓋・高杯・盤・台付盤・壺・壺E・甕・円面硯が出土した。美濃須衛窯産と猿投窯産がみられる。猿投窯の編年で第IV期の第3・4小期頃とみられるものである。なお、台付盤（194）の底部外面には「万」とみられる焼成前の線刻がある。このほか土製品としては、被熱痕のある志摩式製塩土器片や管状土錐がある。

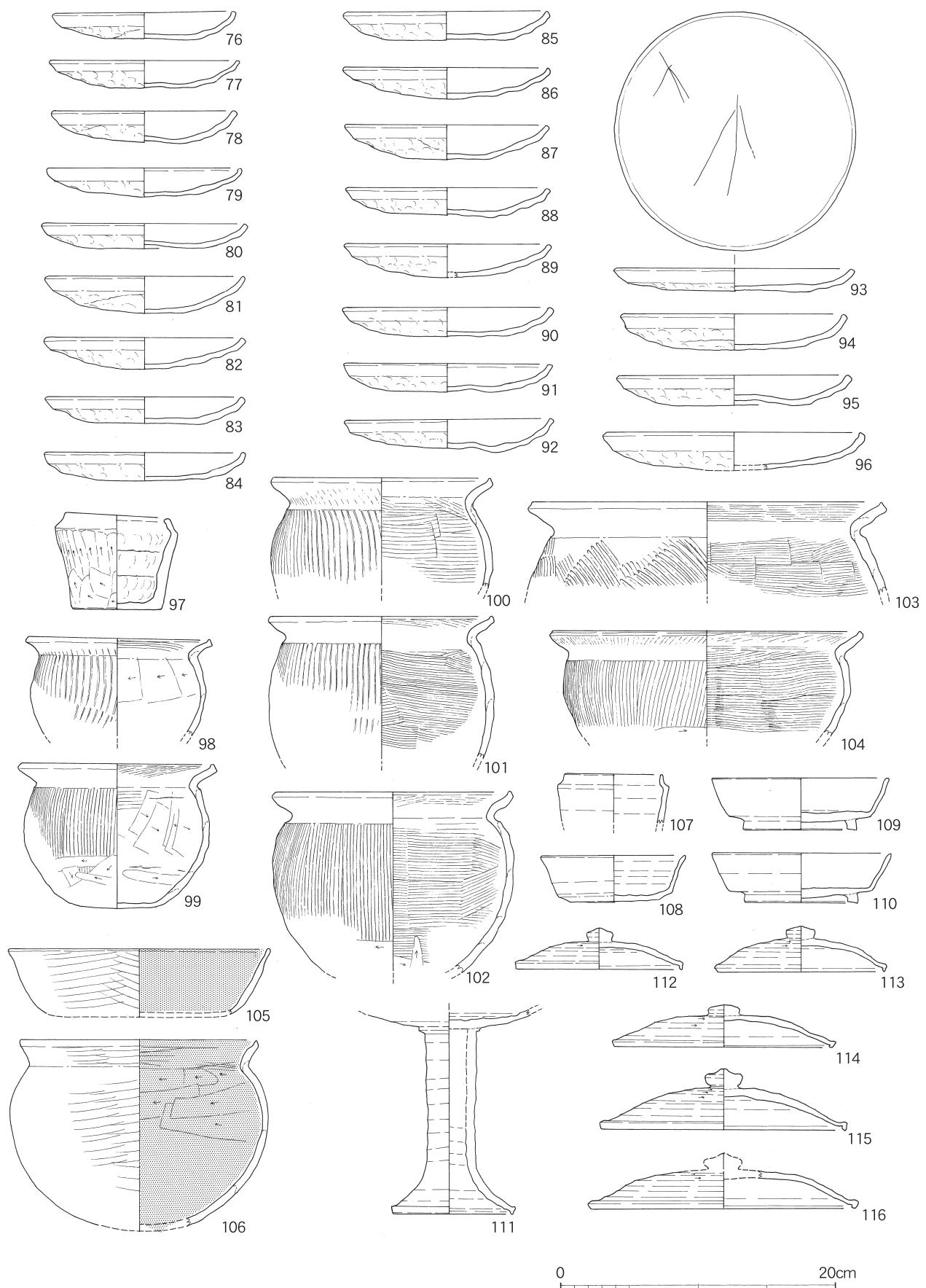
土器類以外では、鉄製品あるいはその残欠とみられるものが出土している。現段階ではまだ鋸の除去などをやっていないが、釘や刀子の残欠とみられるものや、片面に有機物痕のある直径約3cmの円盤状の鉄製品がある。鋳造に関わるとみられる金属滓（鉄か銅かは不明）や炭化材も多量に出土しており、第143次調査で鞴羽口が出土していることとあわせ、斎宮の造営に関わる鋳造等が周辺で行われていたことをうかがわせるものである。



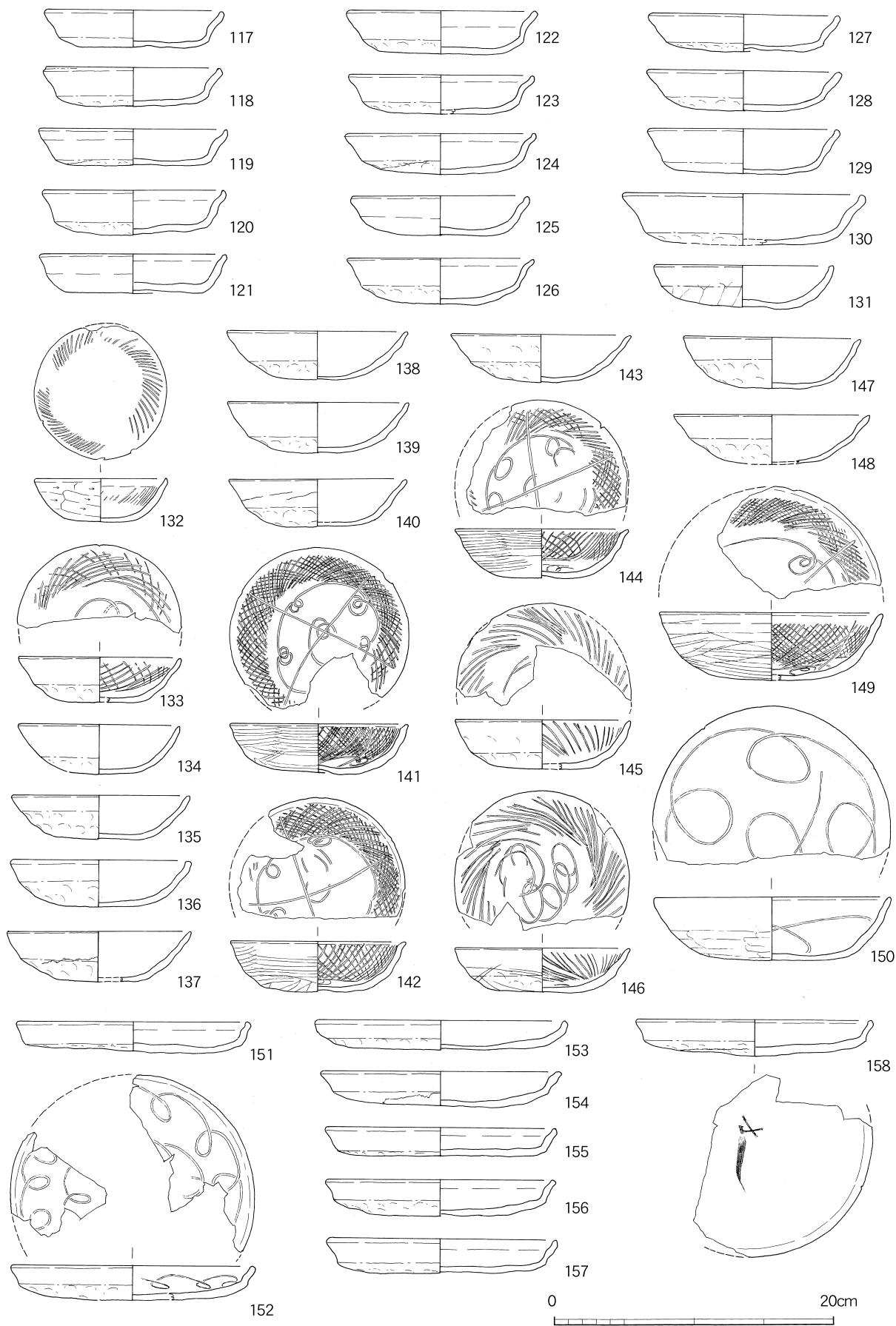
第II-11図 第152次調査 出土遺物実測図（1）（1：4）



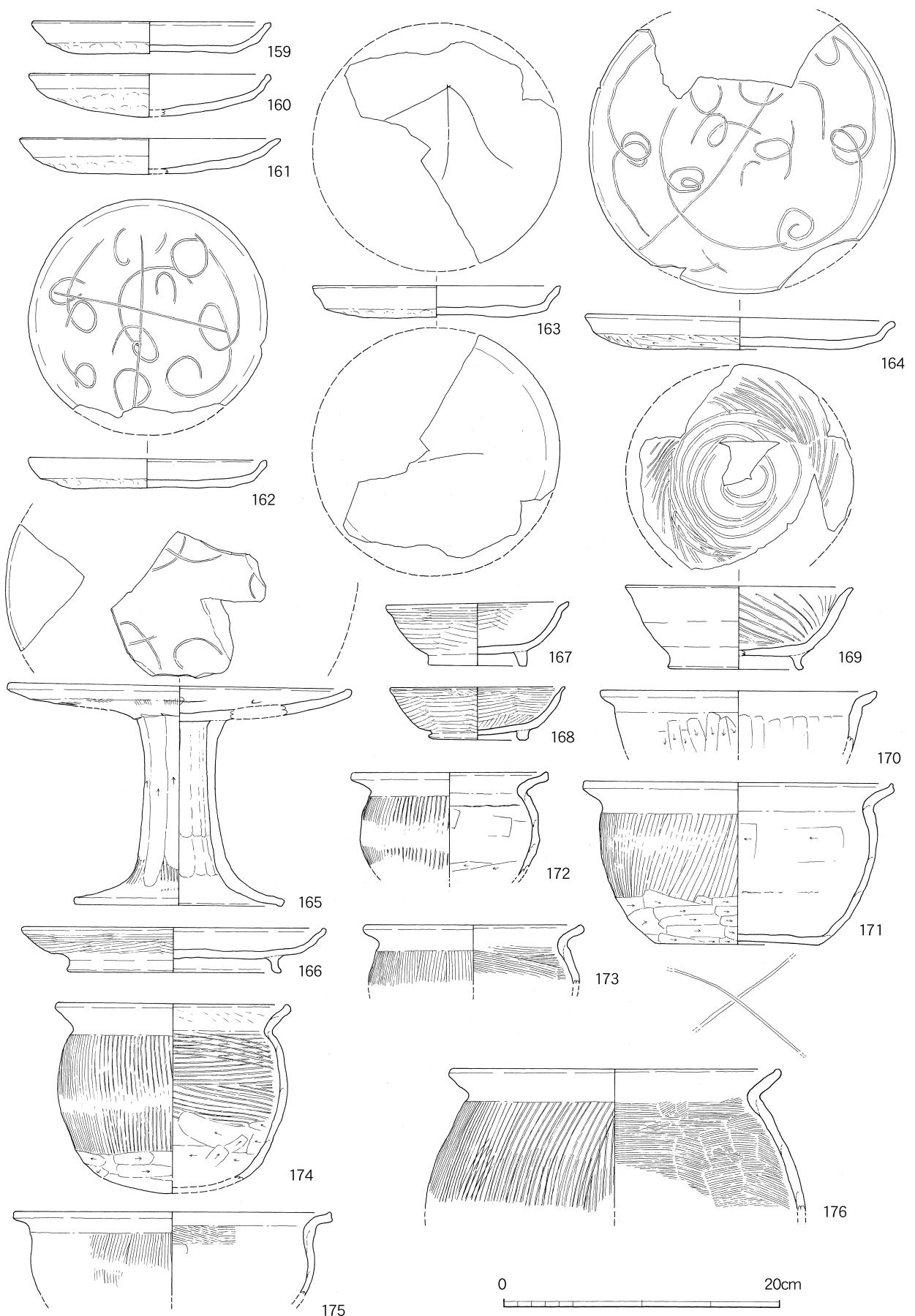
第II-12図 第152次調査 出土遺物実測図（2）（1：4）



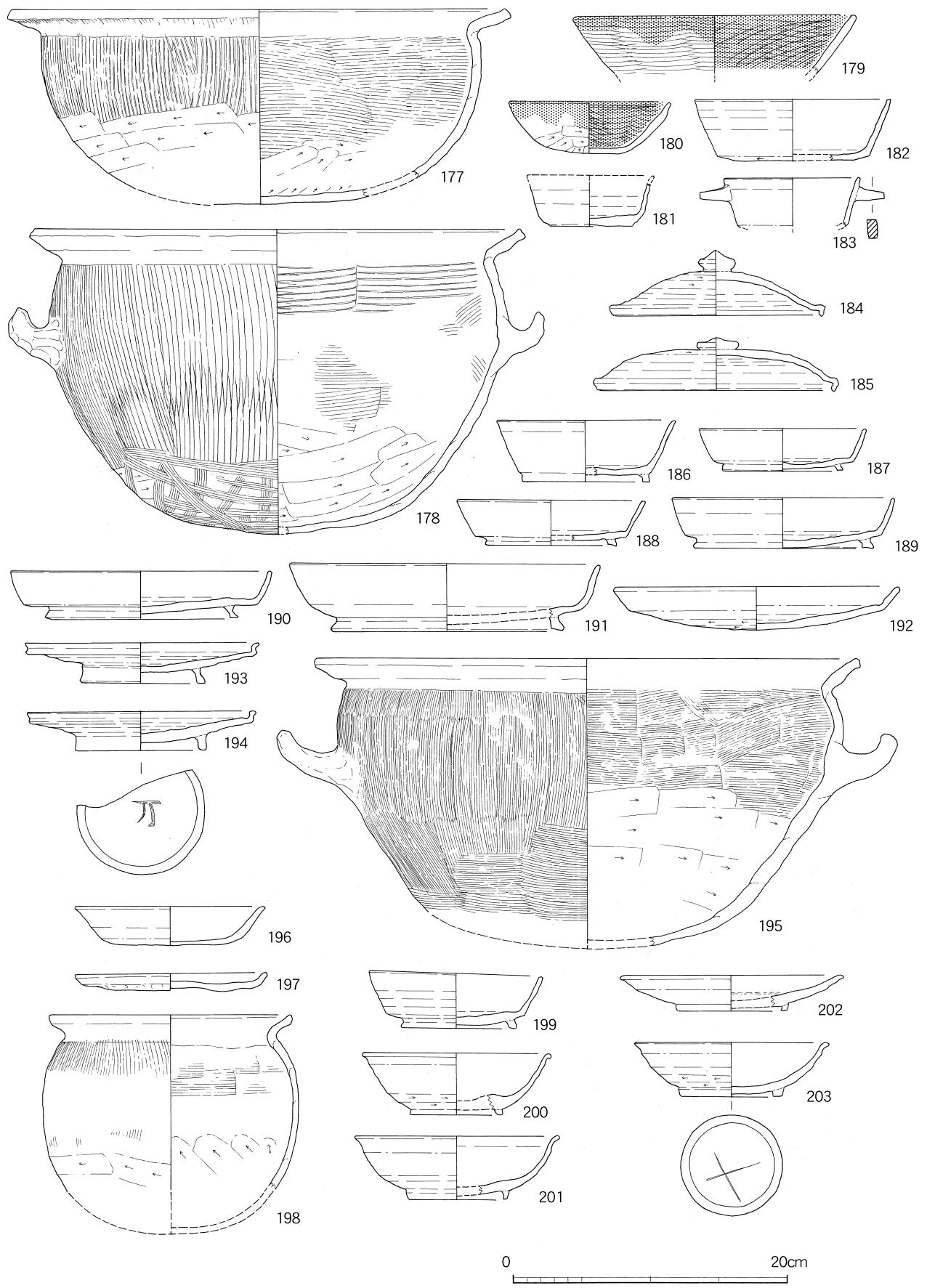
第II-13図 第152次調査 出土遺物実測図（3）(1:4)



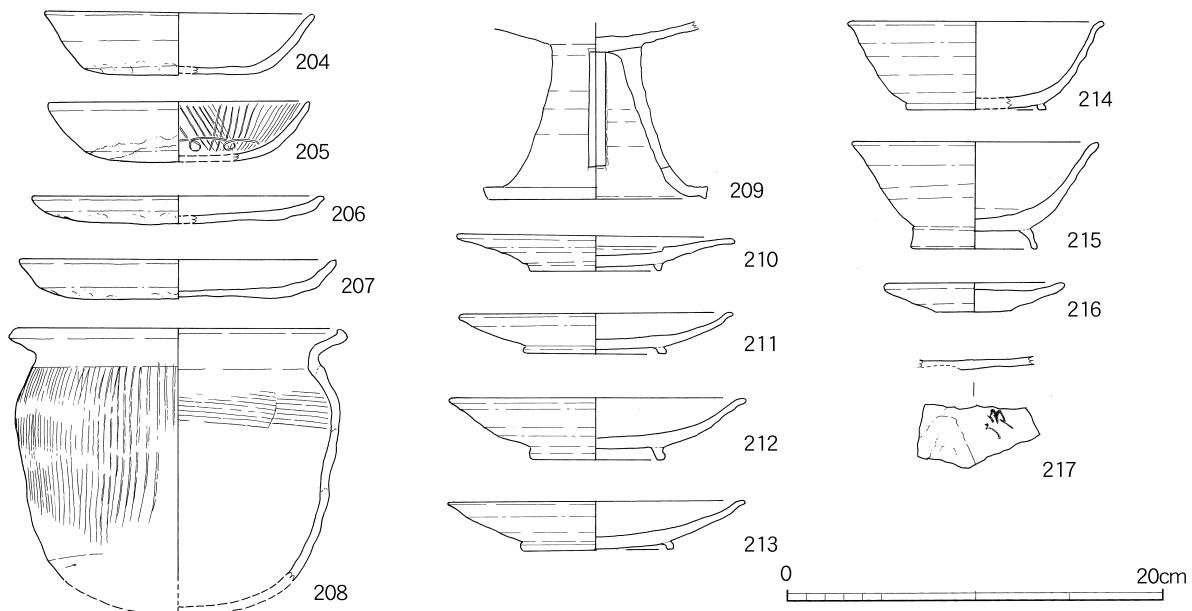
第II-14図 第152次調査 出土遺物実測図(4)(1:4)



第II-15図 第152次調査 出土遺物実測図（5）（1：4）



第II-16図 第152次調査 出土遺物実測図(6)(1:4)



第II-17図 第152次調査 出土遺物実測図(7)(1:4)

SK9785の出土遺物は、土師器でみると幅がうかがえず、器壁に厚みのある杯Aや、暗文やヘラミガキの多用などからII-1期の中に位置づけられ、この時期の良好な一括資料とみることができると考える。

(4) SK9786出土遺物(15~116)

SK9785の北東に位置する土坑からの出土資料である。整理箱で40箱の土器類・金属製品関係の遺物・炭化材が出土した。

土師器では杯A・椀A・椀B・皿A・蓋・高杯・小型平底壺・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋Bがある。量的に最も多い杯・椀には完形ないしはそれに近い状態のものが多く、やはり口縁に油煙が付着するものを含む。杯A(15~26)は口径13~17cmで底部はすべてナデ調整である。底部にやや丸みを持ち、口縁を外へ開く(23~26)のようなプロポーションのものがある。(17)の底部外面には漢字の墨書があるが、判読できない。椀A(29~64)は口径10.5~16cmで、底部をヘラケズリで調整するものもわずかながらみられる(37)。口径10cmほどの小型品も多い。SK9785のものに比べてやや器壁の薄いものがあり、また内面に暗文を施すものは(37・41)などわずかである。皿(65~96)は口径14~19cmの幅があり、口径25cmを超える

大型品の(74・75)の内面には螺旋暗文を施す。貯蔵形態のものでは、壺E(97)がほぼ完形で出土している。煮炊具では甕(98~102)・長胴甕(103)・鍋(104)がある。黒色土器にはA類の椀(105)や甕(106)がある。この段階の黒色土器甕は斎宮では稀少である。

須恵器は、杯A・杯B・蓋・盤・高杯・鉢・壺E・壺L・短頸壺・甕がある。美濃須衛窯と猿投窯の製品とみられる。中でも高杯(111)は斎宮跡では稀少な器種で、明るい灰白色の胎土に薄く自然釉がかかる精良なものである。生産地での年代観では、猿投窯編年の第IV期の第3・4小期頃のものとみられる。

土器類では、このほか志摩式製塙土器片と土錐が、また鉄製品ないしはその残欠が出土している。焼けた粘土塊も含まれる。また、炭化材も多い点はSK9785と同様である。

SK9786出土の土器群はおおむねII-1期に属するものとみられるが、土師器にやや後出の要素を含むことから、総体的にはSK9785より若干新しいII-1期から2期の前葉の土器群と考えたい。

(5) 調査区中央のII期土坑群の出土遺物

(196~215)

四面庇付建物SB9750に重なる位置で確認した土坑

群（SK9758・9760・9761）の出土遺物である。全体で整理箱10箱ほどの遺物があるが、先述のSK9785・9786のように大量の一括廃棄というものではない。遺構の節でも述べたが、これらの土坑は検出上面では区別ができない、埋土ではなく土坑の形状にあわせて分類したものであり、土器の形式の上でも差は見出せない。

全体では土師器は杯A・椀A・椀B・皿A・鉢・甕・甌・竈が、須恵器では杯B・椀・蓋・高杯・壺・甕がある。特に灰釉陶器がこの段階の遺構としては多数出土しており、椀・皿・段皿・細頸壺がある。椀・皿はごく一部を除いて角高台のもの（200・202・203・210～214）で、共伴する土師器からも総じて斎宮跡編年のII-2期のもので占められている。わずかに器壁が薄い土師器杯類や、三日月高台の灰釉陶器椀（201）もあるが、これらは比較的小さい破片であり、後世の搅乱や混入の結果によるものと考え、土坑群の出土遺物総体としてはII-2期からあるいは3期のごく初頭までに位置づけたい。

（6）その他特記すべき遺物

出土遺物の中で、特殊遺物として別途抽出されている遺物として、綠釉陶器83片、貿易陶磁34片がある。貿易陶磁では、北宋代の白磁片がみられる。また、墨書き土器では（217）として図示した「御」と思われる土師器片のほか、判読不能のものが数点ある。

土師器鍋B（195）は区画溝SD1386の東端近くで破粹した状態で出土したものである。溝の埋没過程で廃棄されており、遺構の下限を示すものである。

灰釉陶器椀（215）は掘立柱建物SB9778の柱穴の柱痕跡の埋土内に須恵器甕片とともに埋納されていたものである。東海西部の灰釉陶器編年で東山72号窯式期に位置づけられるものと考える。建物の廃絶に伴う祭祀が想定され、廃絶時期を考える根拠となる。

5まとめ

第152次調査では、面積的には柳原区画の約20%の面積を調査したことになる。区画の全体的な検討は他の調査区の遺構ともあわせてみる必要があるため、第153次の章であわせて行いたい。

先述のとおり、第152次調査区の中央付近は微高地にあたるため、後世の面的な削平も受けているとみら

れるため、柱穴が底部の一部しか残っていないかったり、一部の柱穴が欠落して柱筋の一部しか確認できない状況にあり、調査前に完全に失われた遺構もあるかもしれないものの、総数70棟という多数の掘立柱建物が、方格地割の初期から平安時代の終わりまで間断なく継続して分布していたことが確認できた。

その中で最大の成果は、やはり3棟の四面庇付建物の発見である。これまでの調査成果から、一般に側柱建物が主流の斎宮跡にあって、今回のような多面の庇付建物の検出例は少なく、方格地割内では平成20年度まで合計8棟しか確認されていない。そのうち四面庇付建物は、宮ノ前南区画のSB7890が報告されているのみである。このように事例の極めて限られた四面庇付建物が、今回の調査区内では、II-1期からIII-2期頃まで、複数回の建て替えを経て、他の建物群に影響されず、ほぼ同一規模と同一の棟方向を維持継続していることは大いに注目される点である。建物の性格は不明だが、斎宮の中にあって平安時代のほぼ全期を通じて特別な、何か象徴的な意味のある建物であったと考えるべきであろう。

次に、多数の掘立柱建物の時期を検討していくなかで、棟方向や遺構の重複関係により、いくつかの小期が設定できる可能性がてきた。まず、II-1期の建物群の中でみると、棟方向で方格地割に近いN4°Wを基準にした一群と、四面庇付建物SB9800を含む、ほぼ正方位を基準にした一群があり、本調査区内ではただ一箇所ながら、SB9710がSB9712に柱穴の一部を壊されており。N4°Wのグループが古いと想定できる。これは先のI-4期の建物の中にSB9735・9672やSB9802のようにN4°Wの棟方向のものがみられることと整合すると考えられる。

続くII-2～3期では、四面庇付建物SB9750を基準にして考えると、①SB9750が建てられる前のSB9767・9766や、それと同一の棟方向のSB9676・9691が建てられる段階、②SB9750が建てられ、それにあわせて正方位に近く、東面に庇を持つSB9774やこれらに近い棟方向を持つSB9688・9729やSB9795などが建てられた段階、③SB9750よりやや棟方向を西振った建物が現れる段階の3段階が想定できる。

III期も、少なくとも①III-1期に四面庇付建物SB9751が建てられる段階と、②III-2～3期にかけて

第II-3表 第152次調査 出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	杯A	SK9675	口径 器高 4.3	21.3 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内面ナデ	精良	良	橙7.5YR6/6	全体の約50%		034-06
2	土師器	杯A	SK9675	口径 器高 3.1	18.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口径の約1/4		034-08
3	土師器	杯A	SK9675	口径 器高 3.3	16.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約80%		034-04
4	土師器	杯A	SK9675	口径 器高 3.1	15.6 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の約90%	器表面の摩耗著しい	034-03
5	土師器	杯A	SK9675	口径 器高 3.2	13.0 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや砂粒多い	良	にぶい黄橙10YR6/4	ほぼ完形	口縁部端の内外面に油煙付着	034-01
6	土師器	杯G	SK9675	口径 器高 3.1	12.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な 砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の50%	外面に粘土接合痕	034-07
7	土師器	杯G	SK9675	口径 器高 3.7	13.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な 砂質含む	良	にぶい黄橙10YR6/4	ほぼ完形		034-02
8	土師器	皿A	SK9675	口径 器高 2.5	22.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ	精良	良	橙5YR7/6	全体の約80%		034-05
9	土師器	盤A	SK9675	口径 底径 器高 6.0	29.0 14.5 6.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約70%		036-02
10	土師器	盤A	SK9675	口径 底径 器高 8.8	36.2 17.4 8.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ後ケズリ・ ナデ・ヘラケズリ内面ハケ後ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	底部と口径の 1/4		036-01
11	土師器	盤B	SK9675	口径 底径 器高 11.5	36.4 16.2 11.5 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ後ヘラミ ガキ・ヘラケズリ内面ヘラミガキ、把手 挿入ナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の約50%		035-01
12	土師器	鍋A	SK9675	口径 残高 10.3	26.4 26.4 10.3 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ・ヘラケズリ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口径の約1/4		035-02
13	須恵器	杯B	SX9806	口径 高台径 器高 5.1	23.0 17.7 5.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・ナデ、底部ロクロケズ リ、貼付高台	密	良	浅黄2.5Y7/3	全体の約70%		028-03
14	須恵器	台付盤	SK9803	口径 高台径 器高 4.2	23.7 15.5 4.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ ロクロケズリ内面ロクロナデ、底部ロク ロケズリ、貼付高台	微細な 白色粒含む	良	灰白5Y7/2	全体の約70%		033-04
15	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.0	12.6 3.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ・オ サエ後ナデ内面ヨコナデ	やや粗	やや不良	明黄褐10YR7/6～橙5 YR6/8	口径の3/4	内面は摩耗	010-02
16	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 2.8	12.9 2.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面調整不明	密(赤色斑粒多く 含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/2	口縁部に油煙痕、内 面は摩耗	008-09
17	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.6	15.5 3.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	精良	良	橙5YR6/8	全体の約50%	外底面に墨書・判読 不能	037-01
18	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 2.9	13.6 2.9 体部外面オサエ後ナデ?内面ヨコナデ?	密(赤色斑粒多く 含む)	不良	橙5YR6/8	完形	器表面の風化著しい	011-03
19	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.3	13.0 3.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ? 内面ヨコナデ	密(クサリ繰含む)	良	橙5YR6/8	完形	底部に板目痕	011-02
20	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.1	14.0 3.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の5/12	外面に粘土接合痕	005-06
21	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.6	16.0 3.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の2/3	外面に粘土接合痕	008-10
22	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.7	16.5 3.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒・～ 1mmの砂粒少量 含む)	良	橙5YR7/8	口径の5/12		010-01
23	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 2.7	13.1 2.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ヨコ ナデ・オサエ後ナデ内面ヨコナデ	密(赤色斑粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/12		005-05
24	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.2	13.6 3.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の11/12		003-03
25	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.1	14.4 3.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	完形		010-08
26	土師器	杯A	SK9786	口径 器高 3.2	14.6 3.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒わずかに含む)	良	橙5YR6/6	口径の5/12		007-06
27	土師器	杯G	SK9786	口径 器高 3.1	12.4 3.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	粗(～1mmの砂 粒多く含む)	良	外面: 褐灰10YR4/1 内面: 浅黄橙10YR8/ 3	口径の2/3		009-02
28	土師器	杯G	SK9786	口径 器高 3.5	12.8 3.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ナデ	やや粗(～1mm の砂粒多く含む)	良	浅黄橙10YR8/3	全体の2/3	外面に粘土接合痕	002-06
29	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 2.7	10.2 2.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	全体の5/6	外面に粘土接合痕、 風化著しい	003-10
30	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.5	10.2 3.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒わずかに含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/2		007-08
31	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 2.6	9.0 2.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(クサリ繰含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/12	外面はやや風化	012-06
32	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 2.7	10.3 2.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒含む)	やや不良	橙5YR7/8	完形	全体に摩耗著しい、 外面に粘土接合痕	013-03
33	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.0	10.4 3.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の7/12	外面に粘土接合痕	003-09
34	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.2	10.8 3.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口径の1/2		008-08
35	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.2	10.3 3.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口径の7/12		007-07
36	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.0	11.0 3.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口径の5/12		005-04
37	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.1	10.5 3.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ヨコナデ後格子・螺旋状暗文	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形		013-01
38	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.2	12.0 3.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ内面ヨ コナデ	密	やや不良	外面: 明黄褐10YR7/6 内面: 橙5YR6/8	口径の5/6	外面は風化、内面は 摩耗、外面に粘土接 合痕	011-05
39	土師器	椀A	SK9786	口径 器高 3.3	12.4 3.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ内面ヨ コナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4～橙 7.5YR6/8	完形	外面は一部剥離	013-05

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
40	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.3	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	明黄褐10YR6/8～橙5 YR6/8	完形	外面に粘土接合痕	012-05
41	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.6	17.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ後放射・螺旋状暗文	密	良	橙5YR7/8～黒褐10Y R3/1	ほぼ完形	外面に粘土接合痕	013-02
42	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	12.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	やや不良	外面：黄橙10YR8/6 内面：にぶい黄褐10Y R5/4	口径の5/6	外面に粘土接合痕	007-03
43	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.3	12.6 口縁部ヨコナデ、体部外面調整不明内面 ヨコナデ	密(～2mmの砂 粒含む)	やや不良	橙5YR7/6	口径の2/3	外面は摩耗	010-07
44	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の1/2	外面に粘土接合痕	007-09
45	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.3	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	完形		013-04
46	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の5/12	外面に粘土接合痕、 底部に成形時の板目 (幅約3.0cm)が残る	009-09
47	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.5	12.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	口径の2/3		010-03
48	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.1	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ・オ サエ後ナデ内面ヨコナデ	密	良	明赤褐2.5YR5/8	口径の2/3		003-02
49	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.4	13.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口径の7/12	口縁部に4ヶ所の油 煙痕、外面に粘土接 合痕、外底面に粗穢 痕	003-01
50	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.6	13.5 体部外面オサエ後ナデ?内面ヨコナデ?	やや粗(微砂粒多 く含む)	完形	黄橙10YR8/6	完形	器表面の風化著しい	011-04
51	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の2/3		005-03
52	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.3	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	完形	外面に粘土接合痕	005-10
53	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	13.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8～浅黄橙10 YR8/3	口径の5/12		010-04
54	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ヨコ ナデ・オサエ・ナデ内面ヨコナデ	密	良	外面：灰褐7.5YR4/12 内面：橙5YR6/6	口径の1/2		007-02
55	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6～灰黄褐10 YR5/2	口径の7/12	底部に成形時の板目 わずかに残る	009-04
56	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.3	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6～橙7.5YR 7/6	完形		013-06
57	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.4	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒少量含む)	良	黄橙10YR8/6～灰黄 褐10YR5/2	口径の2/3	外面に粘土接合痕、 剥離激しい	009-03
58	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.6	13.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	外面：橙7.5YR7/6 内面：にぶい黄褐10Y R5/3	口径の1/2	外面に粘土接合痕	008-07
59	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.2	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒・赤色斑粒含む)	良	黄橙7.5YR7/8	口径の1/2	外面に粘土接合痕	007-04
60	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.6	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	完形	口縁部に油煙痕、外 面は一部剥離、内面 は剥離著しい	013-07
61	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 3.4	14.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ヨコ ナデ・オサエ後ナデ内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/4		007-01
62	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 4.1	15.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/12	外面に粘土接合痕	008-06
63	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 4.3	16.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒含む)	良	明黄褐10YR7/6	口径の7/12	外面に粘土接合痕	005-02
64	土師器	楕A	SK9786	口径 器高 4.1	15.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密(クサリ礫少量 含む)	良	橙5YR6/8	口径の7/12		009-10
65	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.5	16.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～3mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の2/3	器表面に剥離、外 面に粘土接合痕	012-02
66	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.3	17.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒含む)	良	橙2.5YR6/8	口径の1/2		008-02
67	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.4	16.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	口径の1/3		010-06
68	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.8	16.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑粒・～ 1mmの砂粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/6	内面は摩耗	010-10
69	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.3	16.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の5/12		011-06
70	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.55	16.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の3/4		003-04
71	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 3.0	17.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	完形	口縁に黒斑、外面に 粘土接合痕、内面は 一部摩耗	005-08
72	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.7	16.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の2/3	外面に粘土接合痕	005-07
73	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.3	16.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	全体の1/3	外面に粘土接合痕	003-05
74	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	24.8 口縁部ヨコナデ、体部外面板ナデ内面ヨ コナデ後螺旋状暗文	精良(赤色斑粒含 む)	良	橙5YR6/6	口径の5/12		011-01
75	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 1.8	24.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 後板ナデ内面ヨコナデ後螺旋状暗文	密	良	橙5YR6/8	全体の50%		012-01
76	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	完形	外面に粘土接合痕、 底部に白色物付着	009-06
77	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 1.8	13.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	黄橙7.5YR8/8	全体の3/4	外面に粘土接合痕、 内面は風化	003-07
78	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.5	12.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	完形	外面に粘土接合痕	012-04
79	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	13.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の3/4		009-07

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
80	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	やや不良	明赤褐2.5YR5/8	口径の7/12		009-08
81	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	明黄褐10YR7/6	完形	外面に粘土接合痕	005-09
82	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(褐色斑点含む)	不良	橙7.5YR7/6	口径の5/12	外面は風化著しい、 内面はやや風化	007-10
83	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(クサリ礫含む)	良	橙5YR6/6	ほぼ完形		012-03
84	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑点・~ 1mmの砂粒含む)	やや不良	橙5YR6/8~明黄褐10 YR6/6	口径の7/12	外外面は摩耗	010-09
85	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑点含む)	良	橙7.5YR7/6	口径の1/2		008-01
86	土師器	皿	SK9786	口径 器高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	黄橙10YR7/8	全体の7/12	外面に粘土接合痕	003-08
87	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑点含む)	良	浅黄橙7.5YR8/6	口径の1/2	外面に粘土接合痕	008-05
88	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(~3mmの白 色砂粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/6		008-03
89	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(赤色斑点含む)	良	橙5YR6/6	口径の5/12		007-05
90	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデか?	密	良	橙2.5YR6/8	口径の1/2		009-05
91	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口径の7/12		010-05
92	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の1/2		003-06
93	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・オサ エ後ナデ内面ヨコナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	ほぼ完形	外面に1ヶ所、内面 に2ヶ所線刻	006-01
94	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の50%	外面に粘土接合痕、 内面剥離	005-01
95	土師器	皿A	SK9786	口径 器高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/3		008-04
96	土師器	皿A	SK9786	口径 残高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の5/12		009-01
97	土師器	壺E	SK9786	口径 器高 底径 7.0 6.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面オサエ後ナデ	密(~1mmの砂 粒・クサリ礫含む)	良	橙5YR6/6	ほぼ完形		012-07
98	土師器	甕	SK9786	口径 残高 7.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ・ヨコナデ・板ナデ	密	良	橙5YR7/6	口径の7/12	外面は被熱により一 部赤変	002-02
99	土師器	甕	SK9786	口径 器高 10.5	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ・ハケ後板ナデ・ヘラケズリ	密(~1mmの砂 粒含む)	良	にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/3	外面に被熱による剥 離	001-02
100	土師器	甕	SK9786	口径 残高 7.9	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ	密(~1mmの砂 粒含む)	良	浅黄橙10YR8/4	口径の1/2		002-03
101	土師器	甕	SK9786	口径 残高 10.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ハケ後ヨコナデ・ヨコハケ	密(~1mmの砂 粒含む)	良	浅黄橙10YR8/3	口径の1/3	外面にスス付着、内 面に粘土接合痕	001-03
102	土師器	甕	SK9786	口径 残高 13.1	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘ ラケズリ内面ヨコハケ後ヨコナデ・ヨコ ハケ・ヘラケズリ	密(~2mmの砂 粒含む)	良	淡黄2.5Y8/3	口径の1/6	内面に粘土接合痕	001-04
103	土師器	甕	SK9786	口径 残高 6.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ナメハケ内 面ヨコハケ後ヨコナデ・ヨコハケ	密	良	外面: 橙5YR6/8 内面: にぶい黄橙10Y R6/4	口径の1/4		002-01
104	土師器	鍋	SK9786	口径 残高 7.7	口縁部ハケ後ヨコナデ、体部外面タテハ ケ・ヘラケズリ内面ヨコハケ	密	良	橙5YR6/6	口径の1/12		002-04
105	黒色 土器	椀	SK9786	口径 残高 4.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ミガキ・ヨコ ナデ内面ヨコナデ	密	良	外面: にぶい赤褐5Y R5/4 内面: 褐灰7.5YR4/1	口径の1/4		002-05
106	黒色 土器	甕	SK9786	口径 残高 13.6	体部外面ミガキ・ヘラケズリ内面ヘラケ ズリ	密(~1mmの赤 色斑点含む)	良	外面: 橙7.5YR6/6 内面: 黒褐2.5Y3/1	口径の11/12	口縁部は黒化処理、 外面に一部スス付着、 摩耗著しい	001-01
107	須恵器	壺E	SK9786	口径 残高 3.5	体部ロクロナデ	密	良	外面: 褐灰10YR4/1 内面: 灰黄2.5Y7/2	口径の1/6	外面に自然釉	004-04
108	須恵器	杯A	SK9786	口径 器高 底径 3.4 6.2	体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面 ロクロナデ・ナデ、底部ロクロケズリ、 貼付高台	密(~3mmの白 色砂粒含む)	良	黄灰2.5Y6/1	口径の5/6		004-03
109	須恵器	杯B	SK9786	口径 器高 底径 3.8 8.1	体部外面ロクロナデ内面ロクロナデ・ナ デ、底部ロクロケズリ・ケズリ後ナデ、 貼付高台	密(~3mmの白 色砂粒含む)	良	灰5Y6/1	全体の70%		004-01
110	須恵器	杯B	SK9786	口径 器高 底径 3.5 8.1	体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面 ロクロナデ・ナデ、底部ロクロケズリ、 貼付高台	密(~2mmの白 色砂粒含む)	良	灰5Y6/1	口径の7/12		004-02
111	須恵器	高杯	SK9786	底径 残高 9.2 14.8	脚部ロクロナデ	密	良	にぶい黄2.5Y6/3	底部の1/2	杯外面・脚部内面に 自然降灰	004-10
112	須恵器	杯B蓋	SK9786	口径 器高 3.0 1.9	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ・ 貼付宝珠つまみ	密(~1mmの砂 粒含む)	良	灰白N7/	口径の1/3	内面に自然降灰	004-08
113	須恵器	杯B蓋	SK9786	口径 器高 3.3 2.0	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ・ 貼付宝珠つまみ	密(~1mmの白 色砂粒含む)	良	灰黄2.5Y6/2	口径の1/4		004-07
114	須恵器	杯B蓋	SK9786	口径 器高 3.1 2.3	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ・ 貼付宝珠つまみ	密(~2mmの白 色砂粒含む)	良	灰10Y5/1	口径の1/12		004-09
115	須恵器	杯B蓋	SK9786	口径 器高 4.4 2.7	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ・ 貼付宝珠つまみ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口径の1/3	内面に自然降灰	004-06
116	須恵器	杯B蓋	SK9786	口径 残高 19.0 2.7	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口径の7/12		004-05
117	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや砂粒多い	良	明赤褐5YR5/8	完形	器表面の摩耗著しい	029-05

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
118	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.9	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ヨコナデ	微細な砂粒含む	良	黄橙7.5YR7/8	完形		030-02
119	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.7	13.5 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや砂粒多い	良	橙5YR6/8	完形	外面に粘土接合痕	029-07
120	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.3	12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/6	全体の90%		020-06
121	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.8	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ内面ヨコ ナデ	密(～1mmの赤 色斑点含む)	良	橙5YR6/8～黄橙10Y R8/6	全体の50%		019-01
122	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.2	13.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～2mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の7/12		021-03
123	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.8	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～4mmの砂 粒少量含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/12		019-09
124	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.9	13.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(微砂粒多・～ 1mmの砂粒少量 混じる)	良	外面の一部：明黄褐10 YR7/6 内面：橙5YR6/8	口径の7/12	外面に粘土接合痕	020-05
125	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.9	12.4 体部内面ヨコナデ	密(～2mmの褐色 色斑点・クサリ巣 含む)	やや不良	外面：橙7.5YR7/6 内面：橙5YR6/8	口径の5/6	外面の剥離著しい	020-04
126	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.3	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ、 内面ヨコナデ	密(～1mmに砂 粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/2		018-05
127	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.7	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(微砂粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の11/12		021-01
128	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 2.9	13.9 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の約60%		030-03
129	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.3	13.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の80%		019-04
130	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.7	16.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ・オ サエ後ナデ内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/8～橙7.5YR 7/6	口径の11/12		020-03
131	土師器	杯G	SK9785	口径 器高 3.3	12.8 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR6/4	完形		029-04
132	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.1	9.3 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ヨコナデ後放射状暗文	密	良	橙2.5YR6/8	全体の90%	内面は摩耗	016-03
133	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.2	11.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ後斜格子状暗文	密	良	橙5YR6/8	全体の50%		022-01
134	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	11.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の約60%		030-04
135	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.3	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	完形	口縁部端に油煙付着	029-08
136	土師器	杯A	SK9785	口径 器高 3.3	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な 砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	完形	口縁部外面に一部油 煙付着	030-01
137	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	12.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の90%	外面に粘土接合痕	019-10
138	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.5	12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	外面：浅黄橙7.5YR8/ 6 内面：橙5YR7/8"	口径の7/12	内面は風化	019-07
139	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の2/3		021-04
140	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.4	12.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8～浅黄橙10 YR8/4	ほぼ完形	内面底が剥離、外面 に粘土接合痕	018-06
141	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	12.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 後粗いヘラミガキ内面ヨコナデ後斜格子・ 螺旋状暗文	精良	良	橙5YR6/6	口径の3/4		023-04
142	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 後粗いヘラミガキ内面ヨコナデ後斜格子・ 螺旋状暗文	精良	良	橙5YR6/6	口径の1/3		023-03
143	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.4	12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	橙5YR6/8～橙7.5YR 7/6	口径の5/12		019-02
144	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.5	12.2 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ・ ヘラミガキ内面ヨコナデ後斜格子・螺旋 状暗文	精良	良	橙5YR6/8	口径の1/3		023-02
145	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.5	12.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ後放射状暗文・底面螺旋状 暗文	精良	良	橙5YR6/6	口径の5/12		022-04
146	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.2	12.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ・ 粗いヘラミガキ内面ヨコナデ後放射・螺 旋状暗文	精良	良	橙5YR6/6	口径の7/12		022-05
147	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 3.6	12.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の11/12		019-08
148	土師器	椀A	SK9785	口径 残高 3.5	13.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	やや不良	橙7.5YR7/6～明黄褐1 0YR7/6	口径の5/12	器表面は風化	019-06
149	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 4.8	15.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ・ 粗いヘラミガキ内面ヨコナデ後斜格子・ 螺旋状暗文	精良	良	橙5YR6/6	口径の1/4		023-01
150	土師器	椀A	SK9785	口径 器高 4.5	16.7 口縁部ヨコナデ、体部外面板ナデ内面ヨ コナデ後暗文	密(～1mmの赤 色斑点・クサリ巣 含む)	良	橙5YR6/8	口径の7/12		021-02
151	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.3	16.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の5/12		020-02
152	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.5	17.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ後螺旋状暗文	精良	良	にぶい橙5YR6/4	口径の1/3		018-01
153	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.1	17.5 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	やや粗(～1mm の砂粒多く含む)	良	浅黄橙10YR8/4	口径の5/12		019-03
154	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.6	16.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmの砂 粒少量含む)	やや不良	橙5YR6/8	口径の1/2	外面に粘土接合痕	016-05
155	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.1	16.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	粗(～2mmの砂 粒・クサリ巣多く 含む)	良	橙5YR6/8	口径の5/12		022-03
156	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.6	16.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ、 内面ヨコナデ	密(～2mmのク サリ巣含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/3		016-04

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
157	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.5	16.5 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約70%	器表面の摩耗著しい	030-05
158	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.6	16.6 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(～1mmのク サリ疊含む)	良	明赤褐5YR5/8	口径の1/4	外面底に墨書・粘土 接合痕	018-04
159	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.4	17.3 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	完形	外面に粘土接合痕、 内面にスス付着	029-06
160	土師器	皿A	SK9785	口径 残高 3.1	17.1 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の1/2		018-03
161	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.6	18.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の2/3		022-02
162	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.2	16.9 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後板ナ テ内面ヨコナデ後暗文	密(～3mmのク サリ疊・～1mm の砂粒と赤色斑粒 含む)	良	橙5YR6/8～橙7.5YR 7/6	口径の3/4	内面の摩耗著しい	020-07
163	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.3	17.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密(クサリ疊含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/4		017-01
164	土師器	皿A	SK9785	口径 器高 2.5	22.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ後螺旋状暗文	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の約70%		030-06
165	土師器	高杯	SK9785	口径 脚台径 器高 16.0	25.0 15.2 16.0 杯部：口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ ナデか？内面ナデ後螺旋状暗文 脚部：口縁部ヨコナデ、外面ハケ・ヘラ ケズリ内面ナデ・シボリ	密	良	橙5YR6/8	全体の約50%		031-03
166	土師器	皿B	SK9785	復元口径 復元器高 復元底径 15.0	21.6 3.3 15.0 口縁部ヨコナデ、体部外面板ナデ・ミガ キ内面ヨコナデ、底部板ナデ、貼付高台	密(～1mmの砂 粒含む)	良	明黄褐10YR7/6	口径の1/3		020-01
167	土師器	椀B	SK9785	口径 高台径 器高 4.7	13.2 7.1 4.7 体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、貼付 高台	精良	良	橙7.5YR6/6	全体の約60%	器表面の摩耗著しい	031-02
168	土師器	椀B	SK9785	口径 高台径 器高 3.9	12.7 7.2 3.9 体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、貼付 高台	精良	良	明赤褐5YR5/6	全体の約30%		031-01
169	土師器	椀B	SK9785	口径 器高 6.0	16.3 6.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ内面 ヨコナデ後暗文、底部ナデ、貼付高台	密(～3mmのク サリ疊・～1mm の赤色斑粒含む)	良	橙5YR6/8	口径の1/4		021-05
170	土師器	鉢	SK9785	口径 残高 4.3	19.7 4.3 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面板ナデ	密	良	浅黄橙7.5YR8/16	口径の1/6		015-04
171	土師器	鉢	SK9785	口径 器高 11.7	22.0 11.7 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘ ラケズリ内面板ナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の5/12		015-01
172	土師器	甕A	SK9785	口径 残高 7.7	14.0 7.7 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 板ナデ・ヘラケズリ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	にぶい黄橙10YR7/4 ～灰黄褐10YR5/2	口径の5/12	外下面下部は被熱し剥 離、内面に粘土接合 痕	015-03
173	土師器	甕A	SK9785	口径 残高 4.3	15.5 4.3 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ	密(～1mmの砂 粒含む)	不良	灰白2.5Y8/2～灰黄褐 10YR5/2	口径の11/12	口縁部内面にコゲ痕、 外面に被熱による黒 変	015-05
174	土師器	甕A	SK9785	口径 残高 12.7	16.4 12.7 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘ ラケズリ内面ヨコハケ・ヘラケズリ	密(～1mmの砂 粒含む)	良	外面：にぶい黄橙10Y R6/4 内面：灰黄褐10YR5/ 2	口径の5/12	口縁部内面にコゲ痕、 外面に被熱痕・スス 付着	016-02
175	土師器	鉢	SK9785	口径 残高 6.1	22.6 6.1 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ・板ナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の1/12		015-02
176	土師器	甕C	SK9785	口径 残高 10.2	23.4 10.2 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ	密(～2mmの砂 粒含む)	良	外面：明黄褐10YR6/ 6 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	口径の1/3	外面にスス少量付着	016-01
177	土師器	鍋A	SK9785	口径 器高 14.3	36.6 14.3 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘ ラケズリ内面ヨコハケ・ヘラケズリ	微細な砂粒を多量 に含む	良	外面：橙7.5YR7/6 内面：浅黄橙10YR8/ 3	全体の約70%		038-01
178	土師器	鍋B	SK9785	口径 器高 22.2	35.2 22.2 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘ ラケズリ後ヨコハケ内面ヨコハケ・ヘラ ケズリ	密(～3mmの砂 粒含む)	良	橙7.5YR7/6	全体の40%	内面はやや摩耗	014-01
179	黒色 土器	椀	SK9785	口径 残高 4.3	20.0 4.3 体部ヨコナデ後ヘラミガキ	密(微細な雲母・ ～1mmの砂粒含 む)	良	外面：橙7.5YR6/6 内面：オリーブ黒5Y3 /1	口径の1/4	内面は黒化処理	018-02
180	黒色 土器	椀	SK9785	口径 器高 4.0	11.8 4.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・ヘラケ ズリ内面ヘラミガキ	密	良	外面：にぶい黄橙10Y R6/4 内面：黒10YR1.7/1	全体の約90%	黒色土器A類、口縁 部は黒化、内面に沈 線	029-03
181	須恵器	小型杯	SK9785	底径 残高 3.2	6.0 3.2 体部ロクロナデ、底部ロクロヘラ切後無 調整	密	やや 軟調	灰白5Y7/2	全体の約50%		033-03
182	須恵器	杯A	SK9785	口径 底径 器高 4.5	14.2 11.1 4.5 体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口径の約1/3		032-07
183	須恵器	双耳杯	SK9785	口径 残高 3.6	9.8 3.6 体部外面ロクロナデ・ロクロケズリか？ 内面ロクロナデ、貼付把手	密	良	外面：黒褐5YR3/1 内面：暗灰黄2.5Y5/2	口径の約1/4		032-03
184	須恵器	蓋	SK9785	口径 器高 4.8	15.7 4.8 口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、外面 頂部ロクロケズリ、貼付把手珠つまみ	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体の約60%	内面に自然降灰釉	031-04
185	須恵器	蓋	SK9785	口径 器高 3.8	17.2 3.8 口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、外面 頂部ロクロケズリ、貼付把手珠つまみ	密	良	暗灰黄2.5Y4/2	全体の約40%		032-02
186	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 4.5	13.0 9.2 4.5 口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部 ロクロケズリ、貼付高台	密	良	灰7.5Y5/1	高台径の約1/ 2		032-04
187	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 3.1	12.1 8.8 3.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼 付高台	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体の約60%		029-02
188	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 3.3	13.7 9.6 3.3 口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ・ロ クロケズリ内面ヨコナデ・ロクロナデ、 底部ロクロケズリ、貼付高台	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体の約40%		032-08
189	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 3.7	16.2 13.1 3.7 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・ナデ、底部ロクロケズ リ、貼付高台	密	良	灰黄2.5Y7/2	全体の約40%		032-05
190	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 3.4	19.0 14.0 3.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼 付高台	密	良	灰白5Y7/1	全体の約30%	底部に数ヶ所焼きぶ くれ	032-06

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
191	須恵器	杯B	SK9785	口径 高台径 器高 22.6 17.0 5.0	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ・ロクロナデ、貼付高台	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口径の約1/3		033-01
192	須恵器	盤	SK9785	口径 器高 20.8 3.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	全体の約40%	内外面に焼成時の火だすき	033-02
193	須恵器	台付盤	SK9785	口径 高台径 器高 16.9 9.1 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付高台	密	良	黒褐2.5Y3/1	完形		029-01
194	須恵器	台付盤	SK9785	口径 高台径 器高 16.6 9.5 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付高台	密	良	灰黄褐10YR5/2	高台径の3/4	底部に焼成前の線刻「万」か?	032-01
195	土師器	鍋B	SD1326	口径 残高 39.6 20.9	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヨコハケ内面ヨコハケ・ヘラケズリ、把手貼付ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約80%	外面にスス付着	039-01
196	土師器	杯A	SK9758	口径 器高 13.8 2.8	口縁部ヨコナデ、体部調整不明(ナデか?)	微細な砂粒含む	やや軟調	橙7.5Y R6/6	全体の約80%	器表面の摩耗著しい	027-05
197	土師器	皿A	SK9758	口径 器高 14.0 1.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	明黄褐10Y R7/6	全体の約60%		027-06
198	土師器	甕A	SK9758	口径 残高 17.3 12.7	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ内面ヨコハケ・ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	良	明黄褐10Y R7/6	全体の約20%	器表面の摩耗著しい	028-02
199	須恵器	杯B	SK9758	口径 高台径 器高 12.7 8.4 4.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ内面ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付輪高台	やや砂質多い	良	灰5Y6/1	全体の約80%	口縁部に油煙付着	027-04
200	灰釉陶器	椀	SK9758	口径 高台径 器高 13.8 6.8 4.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面ロクロナデ、貼付高台	密	良	灰黄2.5Y6/2	口径の約1/4	内面に自然降灰釉、内底面に焼けぶくれ	027-07
201	灰釉陶器	椀	SK9758	口径 高台径 器高 14.9 7.2 4.7	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部回転糸切痕、貼付高台	密	良	灰白5Y7/1	全体の約20%	内面に自然降灰釉	027-08
202	灰釉陶器	皿	SK9758	口径 高台径 器高 16.1 7.9 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付高台	密	良	釉:オリーブ灰10Y6/2 素地:灰5Y6/1	口径の約1/4	内面に重ね焼痕	028-01
203	灰釉陶器	椀	SK9761	口径 高台径 器高 14.1 7.3 4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ロクロケズリ内面ロクロナデ、底部ロクロケズリ後ナデ、貼付輪高台	密	やや軟調	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰オリーブ5Y6/2	全体の約60%	底部外面に「×」の線刻	027-01
204	土師器	杯A	SK9760	口径 器高 14.1 3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約90%	外底面に大きな黒斑	025-02
205	土師器	杯A	SK9760	口径 器高 13.6 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ後放射・螺旋状暗文	密	良	橙7.5YR7/6	口径の1/3	外面上に粘土接合痕	025-03
206	土師器	皿A	SK9760	口径 器高 15.4 1.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の約50%		025-05
207	土師器	甕A	SK9760	口径 器高 16.6 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5Y R6/6	全体の約60%	器表面の摩耗著しい	025-04
208	土師器	甕A	SK9760	口径 残高 17.8 13.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ内面ヨコハケ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10Y R7/4	口径の約1/4	外面上に被熱による赤変・スス付着	025-06
209	須恵器	高杯	SK9760	脚台径 残高 11.4 9.3	脚部ナデ、脚部口縁部ヨコナデ、内外面ロクロナデ	密	良	灰N4/	脚台径の1/3		025-01
210	灰釉陶器	段皿	SK9760	口径 高台径 器高 14.6 6.9 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ内面ロクロナデ・ロクロケズリ、底部回転ヘラ切、貼付輪高台	密	良	灰黄2.5Y7/2	全体の約70%	灰釉はほぼすべてとぶ	024-02
211	灰釉陶器	皿	SK9760	口径 高台径 器高 14.4 7.5 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付輪高台	密	良	外面:灰白2.5Y7/1 内面:黄褐2.5Y5/3	全体の約60%	内面に自然降灰	024-06
212	灰釉陶器	皿	SK9760	口径 高台径 器高 15.6 7.1 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付輪高台	密	良	釉:灰白5Y7/2 素地:灰白2.5Y7/1	口径の約1/4	内面に三叉トチン痕	024-03
213	灰釉陶器	皿	SK9760	口径 高台径 器高 15.6 8.0 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付輪高台	密	良	外面:灰黄2.5Y6/2 内面:灰黄2.5Y7/2	全体の約30%	上面に自然釉	024-04
214	灰釉陶器	椀	SK9760	口径 高台径 器高 13.5 7.4 4.7	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付輪高台	密	良	外面:灰5Y6/1 内面:灰オリーブ5Y5/3	全体の約30%	内面に自然釉	024-05
215	灰釉陶器	椀	SB9778	口径 高台径 器高 13.0 6.6 5.7	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部回転糸切、貼付高台	密	良	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰黄2.5Y6/2	全体の約70%	灰釉はすべてとぶ	024-01
216	ロクロ土師器	小皿	SK9715	口径 器高 9.6 1.6	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	微細な砂粒を多量に含む	良	淡黄2.5Y8/3	完形		027-02
217	土師器	杯	包含層	長幅 6.6 3.8	器表面ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	底部の一部	外面上に「御」あるいは「佛」の墨書き	037-02

SB9751が廃絶し、N 4°W前後の棟方向で5間×2間の東西棟SB9707やSB9752・9753とともに、庇付建物SB9733などが建てられる段階に大きくわけられる。またSB9764・9769がSB9751に先行するとみると、Ⅲ-1期の中でもう1段階の変遷過程が想定できる。②の段階も建物の重複からさらに2期ほどに分離できる可能性もある。以上のように、第152次調査区の中だけでも、従来の斎宮跡の土器編年による時期区分を越えて、建物群の変遷の画期を検討する多くの材料が得られたということができる。

また、建物に関する平安時代全体の傾向として、3段階の変遷が追える四面庇付建物の周囲の建物には3間×2間の規模が多く、特に調査区の北半分で繰り返し建て替えが行われている場所が何箇所か認められる。一方、調査区の東半分を中心に南北棟が卓越することも、今回の調査での特徴と言えるだろう。第152次調査区の東辺は、柳原区画の東からほぼ4分の1の部分にあたり、そのライン周辺に南北棟が集中することは、区画全体の利用を考える上で大きな材料となるだろう。

出土遺物の面では、SK9785・9786からⅡ-1～2期の良好な土器群を得ることができた。この時期の編年上の基準資料は、Ⅱ-1期では第86次調査のSK6030や、第34次調査のSK1445、またⅡ-2期では柳原区画内の第20次調査SK1045がある。今回の二つの土坑

の出土遺物はこの二段階の土器群の流れを補強するだけでなく、斎宮跡では比較的少ないこの段階の須恵器類を得ることができた。今後、年代観の検討や様式的な検討に良好な資料となるだろう。

一方、この二つの土坑からは、少なからず鉄製品・金属滓・炭化材が出土している。また、製塩土器片も多い。今回これらについて十分報告していないが、柳原区画の中でみると、第143次調査区で大形の轍羽口が出土しているのをはじめ、各地で金属滓や焼土面が見つかっている。時期の判断とともに、柳原区画周辺での工房的な性格の遺構の検討が必要になるとみられる。これらは科学的な分析なども踏まえて、当区画の正報告の中で検討していきたい。

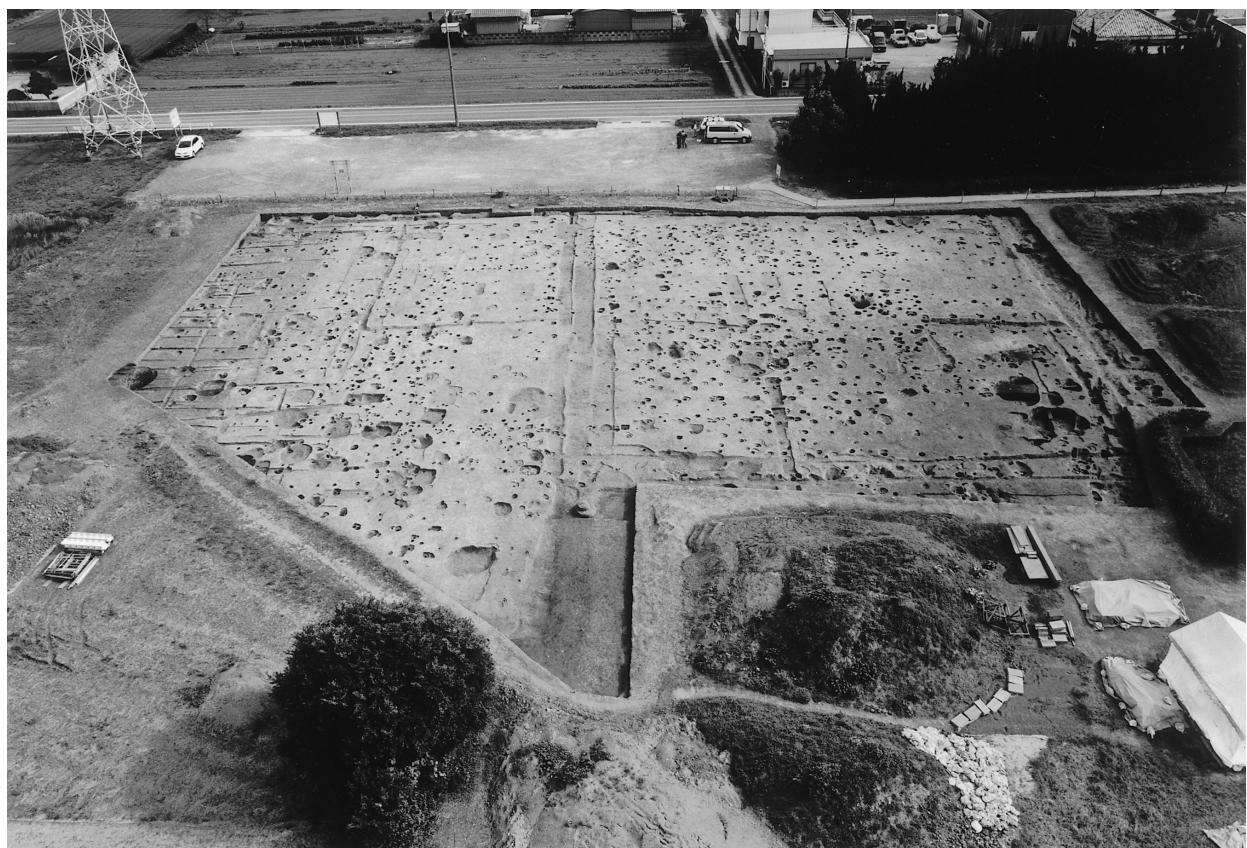
斎宮跡の調査で特殊遺物として別途抽出しているものの中では、綠釉陶器の出土が全部で83片と調査面積に比して少なかった反面、11世紀代の白磁片の出土が目立った。これは第20次調査や、同年度の第153次でもこの傾向がみられ、かねてからこの区画周辺に集中して分布する傾向がうかがわれていた。柳原区画での出土資料の中には刑窯系の精良なものもみられ、Ⅲ期にいたるまで四面庇付建物が継続する当区画の、他の区画にない性格の一端を示していると考えられ、これも区画全体の中で総合的に検討していきたいと思う。

(大川勝宏)

写真図版 II-1 第152次調査 遺構（1）



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）

写真図版 II-2 第152次調査 遺構（2）



SB9072（西から）



SB9687・9688（東から）

写真図版 II-3 第152次調査 遺構（3）



SB9702（東から）



SB9706・9707（東から）

写真図版 II-4 第152次調査 遺構 (4)



SB9712 (北から)



SB9735 (西から)

写真図版 II-5 第152次調査 遺構（5）



SB9739（北から）



SB9750・9800（北から）

写真図版 II-6 第152次調査 遺構 (6)



SB9750 (西から)



SB9800 (北から)

写真図版 II-7 第152次調査 遺構 (7)



SB9800 (西から)

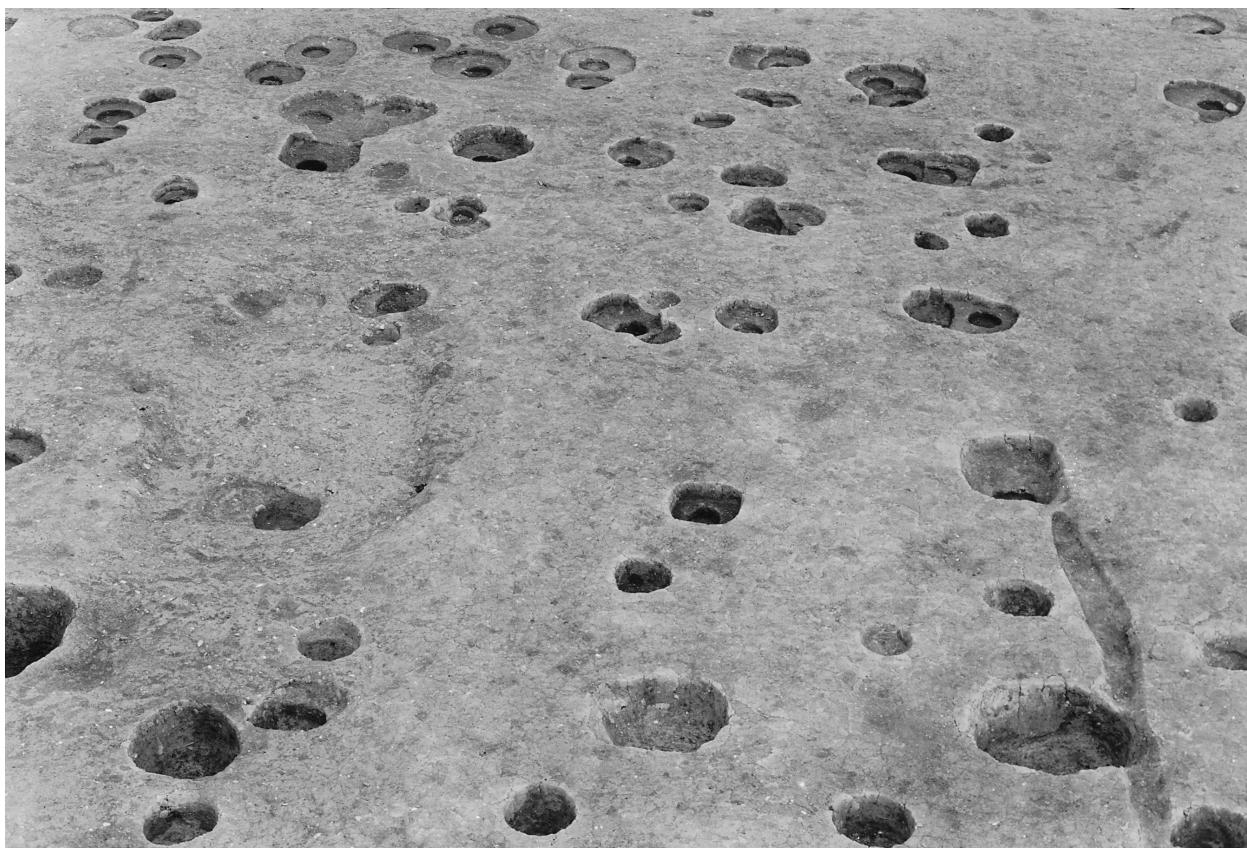


SB9764・9766 (北から)

写真図版 II-8 第152次調査 遺構 (8)



SB9776周辺（北から）



SB9779（西から）

写真図版 II-9 第152次調査 遺構 (9)



SB9782・9783 (北から)



SB1391・1392 (北から)

写真図版 II-10 第152次調査 遺構 (10)



SB9110・9194 (北から)

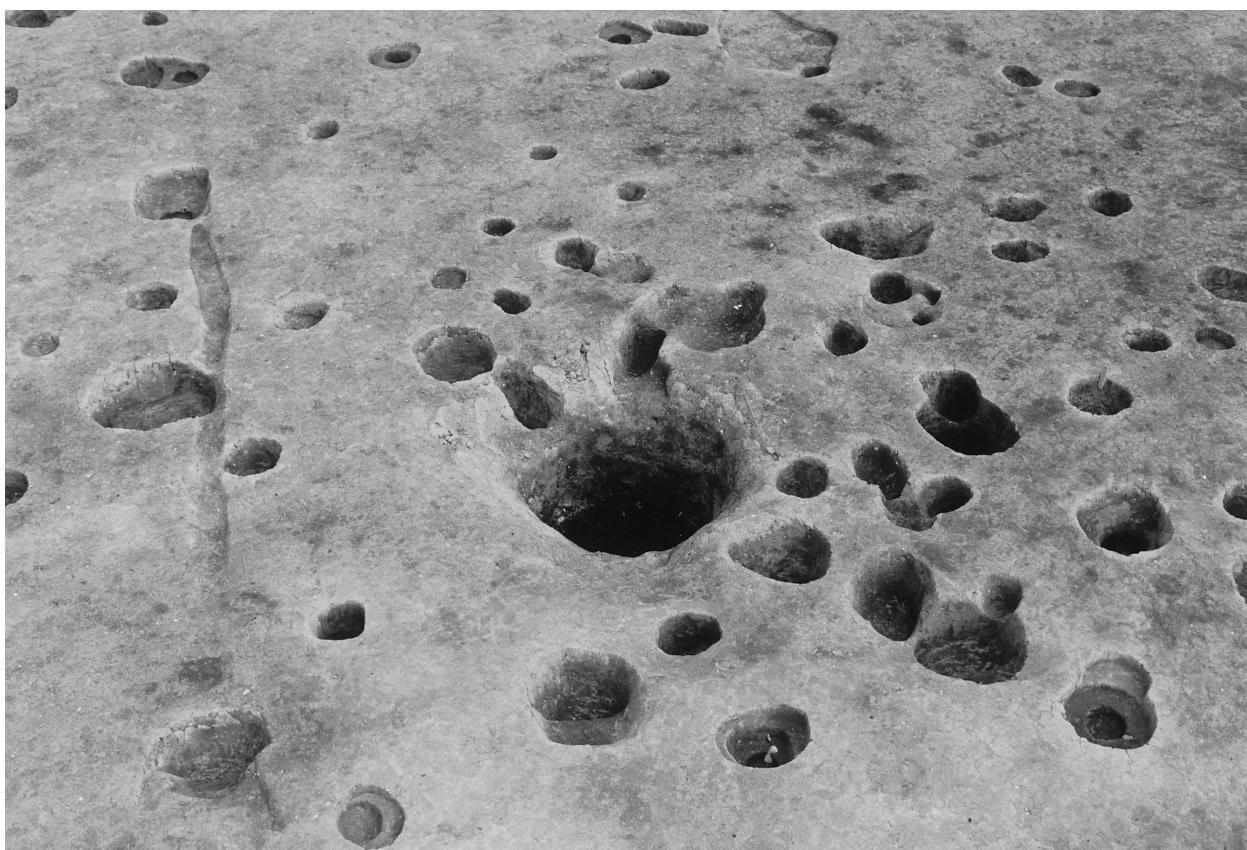


SB9802 (北から)

写真図版 II-11 第152次調査 遺構 (11)



SB9007 (北から)



SE0276 (西から)

写真図版 II-12 第152次調査 遺構 (12)



SK9785 (北から)



SD9046 (南から)

写真図版 II-13 第152次調査 遺構 (13)

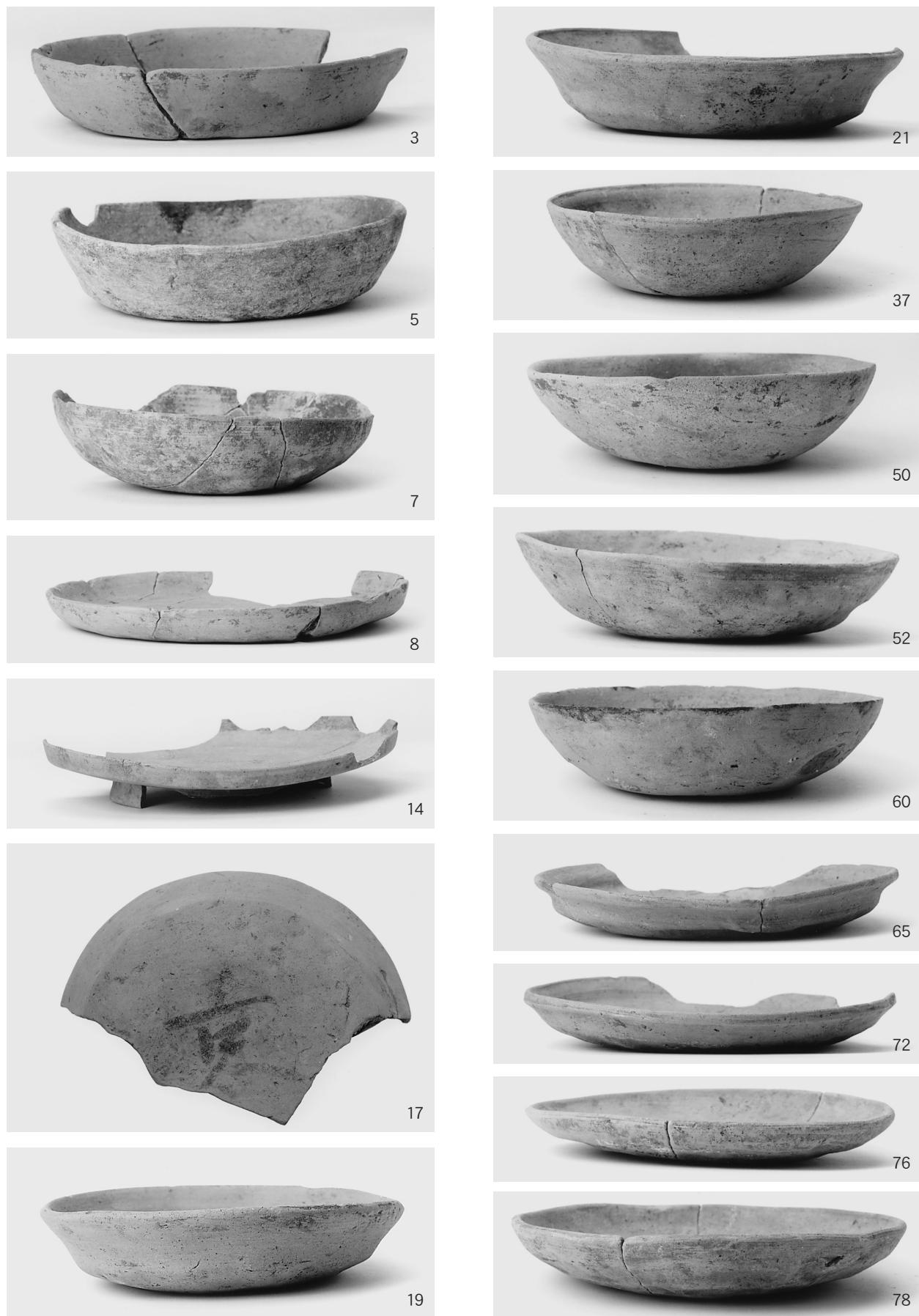


SD1326 (西から)



SD1326土師器鍋出土状況 (西から)

写真図版 II-14 第152次調査 遺物 (1)



写真図版 II-15 第152次調査 遺物 (2)



写真図版 II-16 第152次調査 遺物 (3)



III 第153次調査 (6 AR11 柳原地区)

1 はじめに

平成19年度の2回目の計画調査として、第152次調査に引き続き、史跡東部、方格地割の柳原区画内で第153次調査を実施した。

調査位置は、柳原区画内の南部にあたり、昭和49年度に第8-9次調査(Nトレーニング)を実施しており、その後の昭和53年度の第20次調査、平成16年度の第143次調査と同19年度の第152次調査区にはさまれた部分でL字形に調査区を設定して、面積744m²を調査した。現況の地番により、南北方向に長い調査区を西調査区、東西方向に長い調査区を東調査区とした(調査区の位置や周辺地形は第II-1図を参照)。

今回の調査区の周囲では、第20次調査で大形の柱掘形を持ち、南北の2面に庇を持つSB1080が確認されており、本調査区内に延長してくることが予想された。一方、調査区東西中央付近が柳原区画の東西センターラインにあたってることから、門や堀などの区画施設の存在も予想された。一方、第8-9次調査や第143次調査から、柳原区画の南東部に掘立柱建物の密集地があることが予想され、この部分の解明と整理を行う必要性がある。そのためSB1080の柱穴の形状と変遷過程を明らかにするためにd-6・d-7グリッド付近を西に、第143次から延長してくる建物群を把握するためにg-6・g-7グリッドで東に調査区を拡張して課題解決に努めた(第153次調査の大地区・グリッドについては第II-3図を参照)。調査期間は平成19年11月18日から20年3月10日である。

2 地形と層位

柳原区画は、第152次調査区の東辺中央から南にかけての現況の標高約10.4mを最高点に、西・南・北の3方向に緩やかに傾斜している。また、これまでの研究で、柳原区画の北・南を限る区画道路は、それぞれ斎宮台地上の浅い谷にあたっていることも判明している。そのため、第153次調査区は地形的に南東に向かって傾斜しており、それにあわせて表土から明黄褐色粘質土の遺構検出面までは徐々に深くなり、約

0.4~0.6mの幅がある。また遺物包含層の層厚も0.3~0.5mの幅がある。なお、遺構が検出できる地層面として、谷部などではしばしば確認される黒色のシルト質土壤は今回の調査区の範囲内では検出されなかった。

調査区の基本層序は、褐灰色壤土の耕作土(表土)、やや赤味がかった黒褐色壤土(包含層I)と、調査区の南部では黒色分の強い黒褐色壤土(包含層II)が加わり、明黄褐色粘質土(地山・遺構検出面)となる。

3 遺構

現段階で整理された遺構は、掘立柱建物27棟、柵列(掘立柱塀)1条、井戸1基、土坑19基、溝11条である。以下、斎宮跡の土器編年を基準とした時期区分に従い、遺構の記述を行う。

(1) 斎宮I-4期以前の遺構

SD1395・6802 西調査区の北端で検出した溝で、いわゆる「奈良古道」の南側溝にあたる溝である。調査区内で2条はくい違つようく終わって合流せず、第20次調査に続く側をSD1395、第143次調査に続く側をSD6802とした。いずれも黒色の埋土で、出土遺物はほとんどなく、遺構検出面から深さがSD1395で最大5cm、SD6802で西端で5cm、東端で30cmほどになっている。底部高は、今回の調査区内を最高点にして、東と西に傾斜していくことになる。

この2条のくい違つについては、第152次調査区でも反対側の北側溝がこの付近で浅くなっている様子がうかがわれ、道路側溝掘削の際の施工区分によるものではないかと考える。こうした状況のデータを収集することで、「奈良古道」の施工状況の一端が解明できるかもしれない。

(2) 斎宮I-4期の遺構

SB0263 東調査区の北東端で柱穴1個を検出した。第8-9・143次調査の成果とあわせると、南北4間、東西2間分までを検出している。第8-9次調査区内に柱穴の痕跡のあるくぼみが2個あるため、総柱建物になる可能性がある。柱穴は一辺約1.0mの隅丸方形とみられ、第143次調査区内では、直径30cm強の柱痕跡がみられる。柱間寸法は約1.8mで、総柱

建物ならば倉庫である可能性が高い。棟方向はN 4° Wで、柱穴の埋土は黒色のシルト質で出土遺物をほとんど含まない。こうした特長から区画内の最古段階の建物とみられ、I - 4期のものと判断した。

SD9044 東調査区のiグリッド列で検出した南北溝で、調査区内では、幅約0.8~1.0m、深さ約0.1~0.15m、ごくわずかに南に傾斜している。黒色シルト質の埋土を持ち、出土遺物は少量の土師器片が出土したのみである。第8-9次・143次調査区まで延びており、これまでに検出した総延長は27.6mになる。溝の方向はおおむねN 4° Wである。第143次調査の時点ではIII-3期と想定されているが、以上の条件からI - 4期まで遡りうるものとして判断した。

(3) 斎宮II-1期の遺構

SB1080 西調査区の北半で検出した6間×4間の東西棟である。今回新たに東側の庇出が確認され、5間×2間の身舎に東南北の3方向にそれぞれ1間分の庇出がつくことが判明した(第III-3図)。

庇の柱穴は一辺0.5~0.6mの隅丸方形で、直径15~20cmの柱痕跡があり、黒色の埋土を持つ。一方、身舎の柱穴は遺構検出面でも輪郭があいまいで、埋土も茶色がかかった黒褐色土で、庇の柱掘形埋土とは異なる。この埋土を2~3cmずつ慎重に掘り下げたが、方形や円形の明瞭な柱掘形の輪郭を判別しがたく、第20次調査で完掘した柱穴の一個を再発掘して底部までの形状を確認した上で、身舎の3個の東梁行の柱穴のうち中央の1個の掘形埋土を途中まで半裁して遺構の状況を確認した。その結果、身舎の部分では、ほぼ同位置で少なくとも2回以上の掘り直しがあったことが確認された。さらに、庇と身舎で掘形埋土が異なることもあわせ考えると、SB1080は最低でも、①5間×2間の身舎に、南北東の3方向に1間ずつ庇がつく6間×4間の段階(SB1080a)、②庇がなくなり、身舎の部分の柱穴を前段階とほぼ同じ場所でより大きく掘削したため、前段階の柱穴の痕跡が失われ、5間×2間の建物に変化した段階(SB1080b)、③ほぼ同じ位置で5間×2間の建物が再度建て直された段階(SB1080c)の3段階以上の変遷があったと推定される。この3段階を通じて、棟方向は東西正方位からN 1° Wの間におさまる。

SB1080の存続時期については、柱穴埋土の出土遺

物と棟方向から、初現をII-1期の中に想定し、建て替えを経たのち、後述するII-2~3期の建物が重複してくることから、II-2期頃には廃絶するものと判断した。なお、身舎の柱掘形埋土の中で直径30cm前後の柱痕跡かと思われ土壌の質の異なる部分も見られたが、明確に柱痕跡とは断定しがたい。

SK9828 西調査区の南端のSD9837の調査中に確認したピットで、土師器皿(1)が出土している。

SK9838 調査区の南端で東・西両調査区にまたがって検出した、東西2.8m、深さ約0.5mの土坑で、壁はほぼ垂直に立ち上がるものである。埋土は黒色シルト質の壤土で、整理箱2箱分の土器類が出土している。土師器杯・椀・皿・甕類、須恵器杯・蓋、土錐がある。土師器類の形式から、II-1期と判断される。

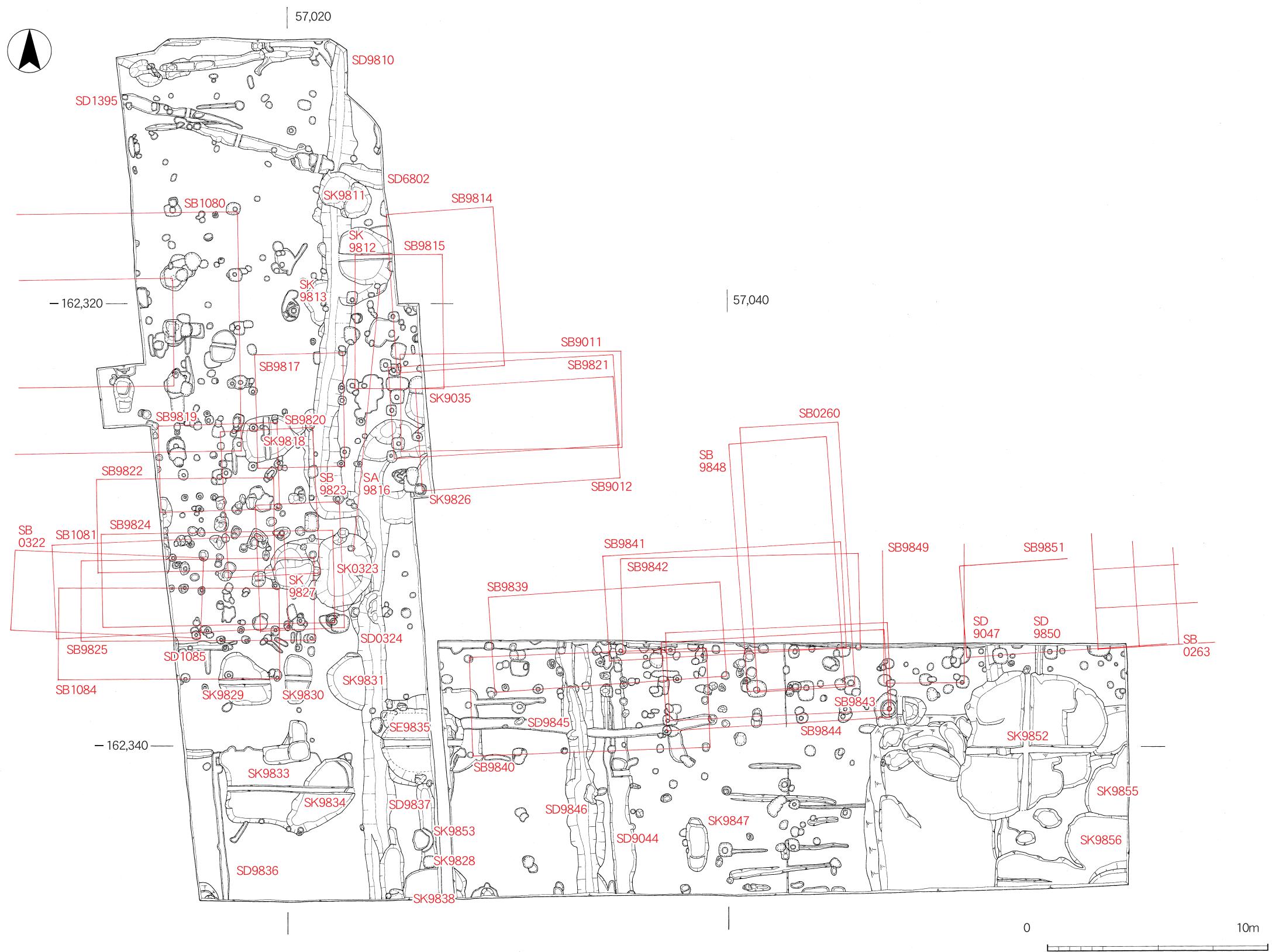
SK9853 SK9838の北約1.0mで検出した、直径約1.0mの不整円形土坑である。SD9837の埋土に重複して掘られており、須恵器杯B(2)と盤(3)の大形の破片が出土している。

SK9855 東調査区の東部の近世以降の大きな搅乱土坑の底部に深さ約0.15m残存していた土坑で、褐灰色の埋土を持つ。II-1期の土坑の一部とみられ、この時期の土師器杯・椀・皿・甕、須恵器片、炭化材が出土している。

SK9856 SK9855の南に接して、調査区の南東隅で底部のみ検出した土坑である。黒褐色土の埋土が厚さ0.2~0.3m分残っている。土師器椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕の破片が出土しており、II-1期に位置づけた。調査区東端の土層断面からSK9855より新しいと判断される。

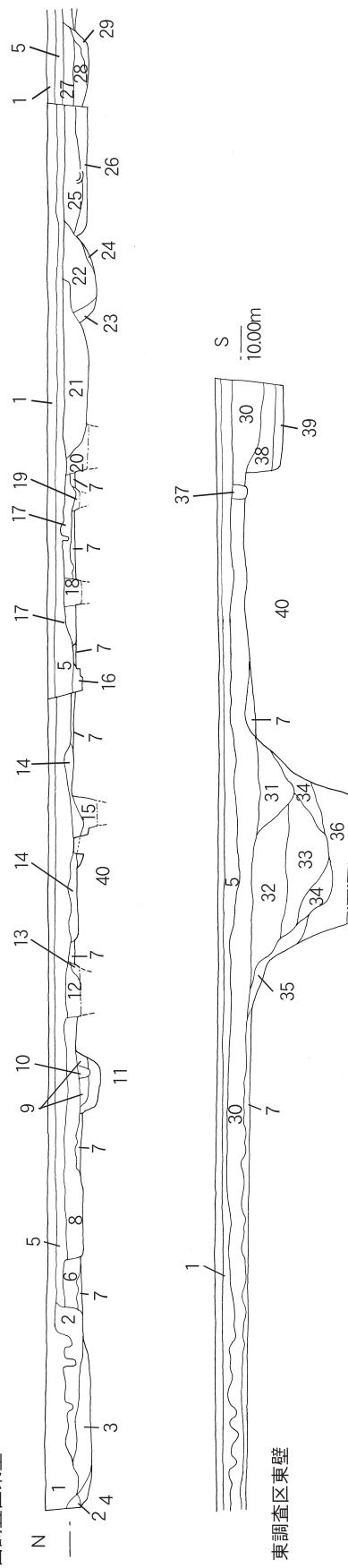
SE9835 調査区の南部で、東・西両調査区にまたがって検出された、直径約3.8mの井戸である。石組み等ではなく、素掘りの井戸である。肩部で不規則にピットが認められ、井戸屋形の柱穴ないしは井戸掘削の際の足場等の性格が考えられたが、ピット同士の組み合わせなどを明らかにできなかった。

埋土上層の出土遺物から最終的な埋没はIII期になってからと考えられ、また、今回の調査では遺構検出面から深さ約1.5mまで調査を止めているので、具体的な掘削時期は分からぬが、方格地割中央部の柳原区画内にあって、平安時代を通して重複する遺構がなく、また南にのびるSD9837もII-1期まで遡る可能



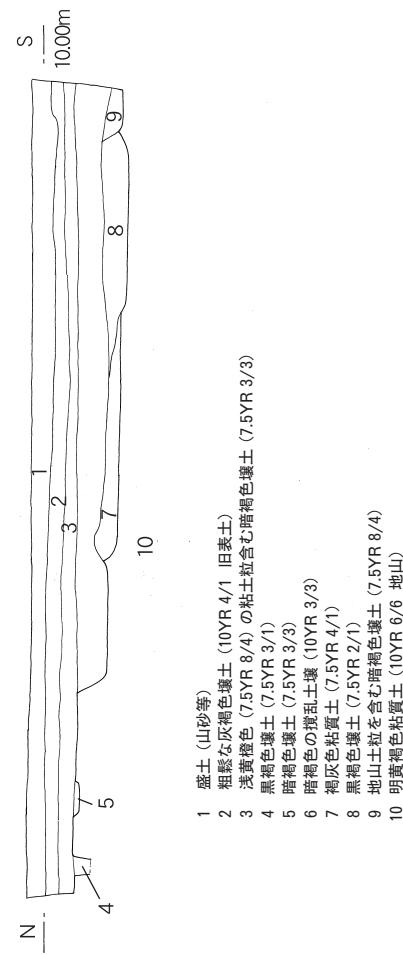
第三－1図 第153次調査 遺構平面図（1：200）

西調査区東壁

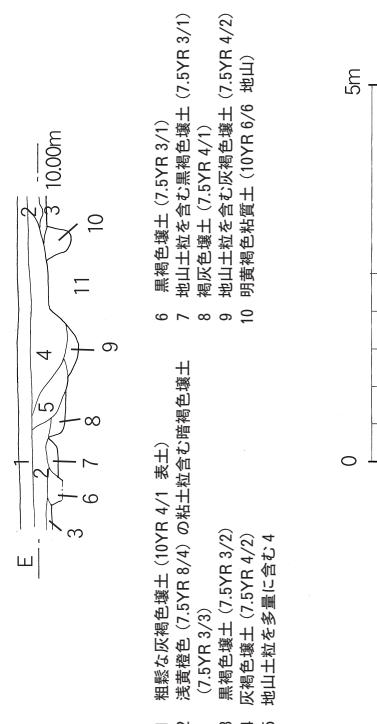


第三-2図 第153次調査 土壌断面図 (1 : 100)

東調査区東壁



SD9044埋土断面



性があるため、SE9835も区画の造営当初から掘られたものであったと仮定した。

埋土の上部からは、Ⅲ-1～2期の土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、白磁のほか、火打ち鎌とみられる鉄片や石英塊も出土している。

SD9837 調査区西区の南東隅で検出した幅0.7～0.8m、深さ0.2～0.3mの溝である。Ⅱ-2期の土師器、須恵器が出土しているが、検出段階でSK9853より古いとされているため、Ⅱ-1期まで遡るものとした。SE9835との関連性が考えられる。

(4) 斎宮Ⅱ-2～4期の遺構

SB0260 東調査区の北端中央で、梁行2間分のみを検出したが、第8-9・143次調査区までのびる5間×2間の南北棟であることが確定した。柱掘形は一辺約0.9～1.0mの隅丸方形で、直径30cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行2.4m、梁行2.2mで、棟方向はN3°30'Wである。柱穴の遺物などからⅡ-3期頃に位置づけられる。

SB9011 西調査区の東端中央付近で西梁行柱筋を検出した。第143次調査の成果とあわせて5間×2間の東西棟になる。柱掘形は一辺約0.5～0.6mの略方形で、直径約15cmの柱掘形がある。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、棟方向はN1°Wである。柱穴出土遺物からⅡ-2～3期のものとみられる。

SB9012 SB9011のやや南よりで、西側梁行柱筋を検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は0.5～0.9mの略方形ないしは円形で、直径15cm前後の柱掘形がある。柱間は桁行1.8m、梁行2.3mで、棟方向はN3°30'Wである。柱穴の重複関係や出土遺物からは、SB9011との前後関係は明らかでないが、棟方向の状況から後出のものである可能性がある。

SB9814 西調査区の東端北よりで検出した3間×2間の南北棟である。今回西側柱筋のみを検出した。第143次調査区にかけて、南梁行柱筋と東桁行の一部だけが残存している。柱穴は一辺0.5m前後の隅丸方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は2.4mで、棟方向はN4°Wである。出土遺物は乏しいが、柱穴の埋土の重複関係からSB9012・9821より古いため、少なくともⅡ-2～3期頃のものと考えられる。

SB9815 西調査区の東端で、第143次調査区にまたがって検出した3間×2間の南北棟である。北西隅の柱穴

がSK9812に壊されており、第143次調査側の検出状況も明瞭ではない。第153次調査側では、柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、直径約15cmの柱痕跡がある。柱間は、桁行で中央の1間が1.8m、との2間は2.1m、梁行は2.0mとなっており、棟方向はほぼ南北正方位である。Ⅱ-2～3期のものとみられ、柱穴の重複関係からSB9011より古い可能性がある。

SB9817 西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。北側棟柱と、東側柱の1個を欠失する。柱穴は直径約0.4mの円形ないしは略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行1.7m、梁行2.0mで、棟方向はN1°Wである。

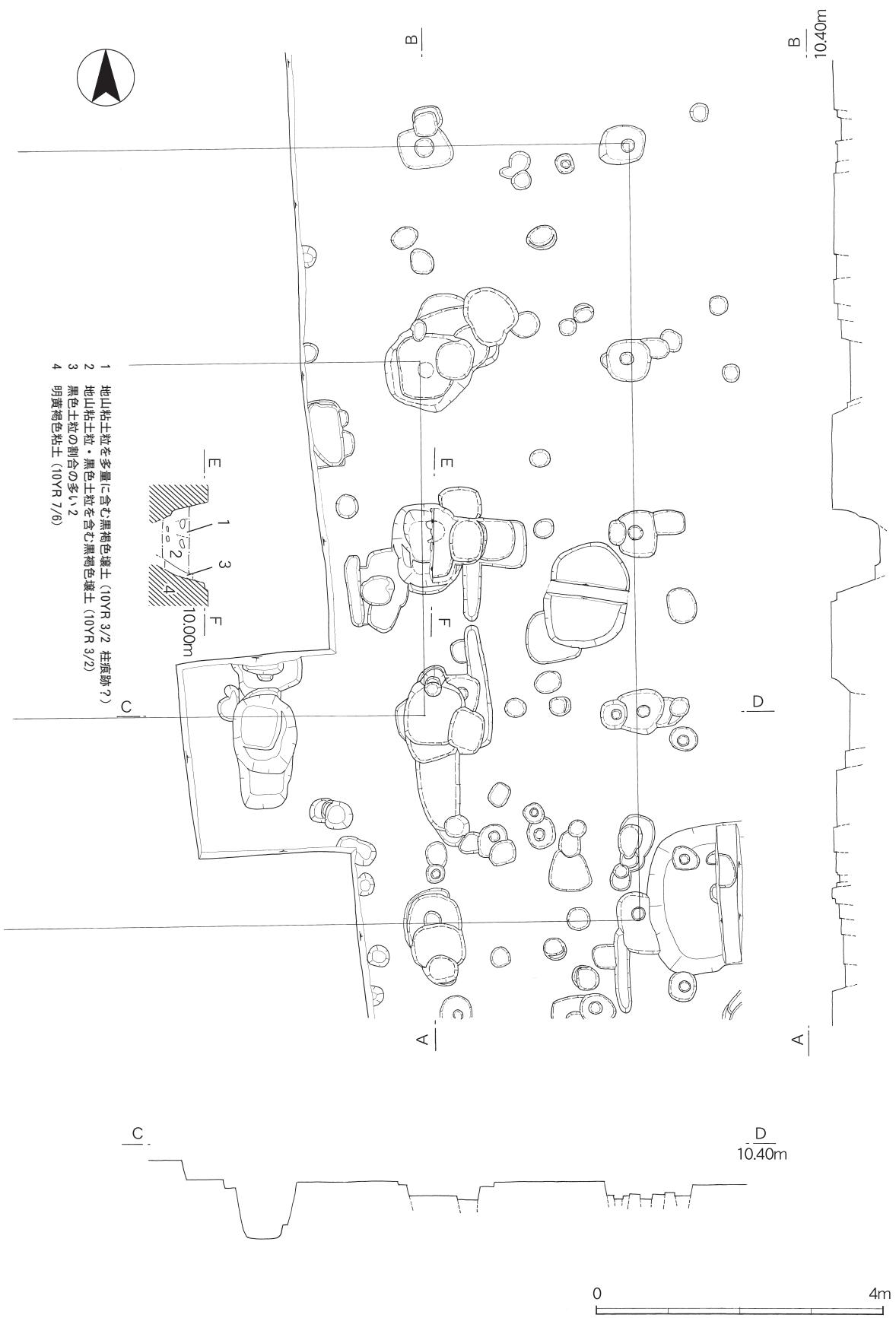
SB9819 西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡を持つ。柱間は桁行1.8m、梁行1.95mで、棟方向はN1°Wである。細片ながら柱穴の出土遺物からⅡ-2～3期のものと推定した。SB1080より後出のものである。

SB9820 西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は0.6～0.7mの隅丸方形で、直径20cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.2m、梁行2.1mで、棟方向はN4°Wである。柱穴の出土遺物からⅡ-3期に位置づけられる。

SB9821 西調査区の東端中央付近で検出した5間×2間の東西棟である。大半は第143次調査区内で検出されているが、今回ひとつの建物としてまとめることができた。柱穴は一辺約0.5mの隅丸方形で、直径約20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.05m、梁行1.9mで、棟方向はN3°30'Wである。他の建物との関係からⅡ-3期に位置づけられようか。柱穴の埋土の重複関係からSB9011・9821より新しい。

SB9823 西調査区の中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱穴は一辺0.5～0.6mの略方形で、直径10cm前後の柱痕跡がある。柱間は1.9mで、棟方向はN2°Wである。柱穴の出土遺物などから、Ⅱ-3～4期頃のものとみられる。なお、第8-9次調査で掘りあげてしまっているため、判断に苦しむが、ほぼ同位置・同規模での建て替えがあった可能性がある。

SB9839 東調査区の北端西よりで、南側柱筋のみを検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は直径約0.5mの円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間



第三-3図 第153次調査 SB1080平面図・横断面図 (1 : 80)

は桁行2.1m、梁行2.15mで、棟方向はN 4°Wである。柱穴埋土の出土遺物はII期とみられるもののみだが、II-3期のSB0260との位置関係から、やや新しいII-3~4期頃のものと考えられる。

SB9840 東調査区の西よりで検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.3~0.4mの円形で、柱間は桁行2.15m、梁行2.25m、棟方向はN 2°Wである。ほぼ同規模のSB9839の建て替えと考えられ、II-3~4期の建物と推定した。

SB9848 東調査区の北端中央で南側柱筋を検出した5間×2間の南北棟である。柱穴の重複関係からSB0260の建て替えと判断できる。柱穴は直径0.6m前後の略円形である。柱間は桁行2.25m、梁行2.2mで、棟方向はN 4°Wである。

SB9849 東調査区北端の東よりで東西2間分の柱筋を検出した。北へ延長するとみられるが、第8-9・143次調査区では明瞭な柱穴は確認されていない。3間×2間の規模の南北棟であろうか。柱穴は一辺約0.6mの略方形で、直径約15cmの柱痕跡がある。梁行の柱間は1.8mで、棟方向は南北正方位であろうか。

SB9851 東調査区の北東端で柱穴4個分を検出した東西棟である。第8-9次調査区で続きの西側梁行の柱穴を確認しているので、5間×2間の規模になると推定される。柱掘形は一辺0.7~0.9mの隅丸方形で、直径約20cmの柱痕跡がある。柱間は2.1mで、棟方向はN 4°Wである。

SK9818 西調査区のほぼ中央で検出した2.6×2.0m、深さ約0.3mの土坑である。土師器杯A・椀A・椀B・皿A・高杯・片口鉢・甕・鍋B、須恵器杯A・杯B・蓋・双耳壺・甕・円面硯や少量の灰釉陶器片、綠釉陶器片が整理箱で1.5箱分出土した。土器の形式からII-2~3期に位置づける。

SK9829 西調査区の南部で検出した、2.4×2.3m、深さ約0.35mの不整形の土坑である。土師器杯A・椀A・皿A・鉢・甕・長胴甕・竈、黒色土器A類の椀、須恵器片、灰釉陶器椀、綠釉陶器碗が整理箱2箱分出土した。土器の形式からII-2~3期に位置づける。

SK9830 SK9829の東0.7mほどのところで検出した2.2×1.3m、深さ約0.1mの不整橿円形土坑である。土師器杯A・鍋B・甕、須恵器蓋、灰釉陶器碗の破片が少量出土した。II-3期に位置づけられる。

SK9831 SK9830の東0.7mで検出した土坑で、南北2.6m、深さ約0.2mで、東半分をSD0324に壊される。土師器杯A・椀A・皿A・鉢・台付鉢・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀・皿・段皿、綠釉陶器椀・皿、志摩式製塩土器が、整理箱で約1.5箱分出土した。II-3期に位置づけられる。

SK9834 西調査区の南端付近で検出した、4.0×2.3m、深さ約0.3mの略橿円形の土坑である。土師器杯A・椀A・椀B・皿A・甕、須恵器蓋・壺・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺が整理箱2箱分出土している。II-2~3期に位置づけられる。

SK9847 東調査区のほぼ中央で検出した、2.5×1.0m、深さ約0.4mの船底状の土坑で、黒色シルト質の埋土に少量の土師器杯A・椀A・皿A・甕、須恵器片が出土している。II-2期に位置づけられる。

SK9852 東調査区の東端近くで検出した黒色の埋土の、6.7×6.8m、深さ0.75mの大形の土坑である。南3分の2を搅乱土坑に壊されているが、底部は残存していた。出土遺物は整理箱1箱以下と少ない。土師器杯A・椀A・皿A・高杯・鉢・甕、須恵器甕の破片に混じって、弥生土器の朱彩の器台部や甕が出土した。

SD9836 西調査区の南端で検出した幅約0.3m、深さ約0.05mの小規模な溝である。溝底は南から北に傾斜している。少量の土師器片が出土しているのみだが、II期の中に位置づけられると考えられる。

(5) 斎宮III期の遺構

SB0322 西調査区の西端で東側梁行の柱筋を検出した5間×2間の東西棟で、大部分は第8-9・20次調査区で検出されている。柱穴は0.4~0.3mの円形で、直径10cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行1.7m、梁行1.8mで棟方向はN 3°Eと、他の建物と大きく異なる。柱穴埋土からの出土遺物からIII期に相当する土器片が出土している。詳細な時期決定はできないが、柱穴の重複関係からSB1081より新しい。III期の終わりからIV期にかけてのものであろうか。

SB1081 西調査区の南部で、第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.3m前後の円形で、直径10cmほどの柱痕跡がある。柱間は2.1mで、棟方向はN 3°Wである。出土遺物からIII-2期以降のものとみられる。なお、SB1081の東方約15.5mで、第8-9・143次調査区にまたがって

未命名の5間×2間の東西棟があり、並列配置であったとみられる。

SB1084 西調査区の南部で、第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は0.3~0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、棟方向は概ね東西正方位である。柱穴埋土の出土遺物からはⅢ期頃のものとしか分からぬが、約15m東方のSB9841と大略南側柱筋を揃えて並存していたとみるとⅢ期でも前半に位置づけられるかもしれない。

SB9822 西調査区のほぼ中央付近で、第20次調査区にかけて検出した4間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.5m前後の円形ないしは略方形で、直径15cm前後の柱痕跡を持つ。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、棟方向は東西正方位である。Ⅱ-3期のSB9820より新しいが、棟方向や出土遺物からⅢ期でも古いとみられ、Ⅲ-1~2期のものと推定した。

SB9824 西調査区の南部で、第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は北側柱で直径0.4m、南側で0.2~0.3mの円形である。柱間は2.1m、棟方向はN 1°Wである。出土遺物からⅢ期のものとみられるが、詳細は不明である。棟方向からⅢ期でも前半のものと推定される。

SB9825 西調査区の南部で、第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.3~0.4mの円形ないしは略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.1m、梁行1.9mで、棟方向は東西正方位である。出土遺物と棟方向からⅢ-1期以降のものとみられる。

SB9841 東調査区の北端で、南側桁行柱筋のみを検出した5間×2間の東西棟で、第8~9次調査区で棟柱を検出している。柱穴は直径0.5m前後の円形ないしは略方形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行2.15m、梁行2.4mで、棟方向はN 3°Wである。出土遺物等からⅢ-1期以降のものとみられる。

SB9842 SB9841とほぼ同位置の5間×2間の東西棟で、第8~9次調査区で棟柱を検出している。柱穴は直径0.4~0.5mの円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。柱間は2.15mで、棟方向はN 1°Wである。SB9841同様、出土遺物等からⅢ-1期以降のものとみられる。

SB9843 東調査区の中央で南側桁行柱筋を検出した

5間×2間の東西棟で、北側柱筋は第8~9次調査で検出している。柱穴は0.4~0.5mの円形ないし不整円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は2.0mで、棟方向はN 3°Wである。ほぼ同位置のSB9844より柱穴の重複関係より新しいと判断される。Ⅲ-1~2期のものと推定される。

SB9844 SB9843とほぼ同位置で検出された5間×2間の東西棟である。北側柱筋は第8~9次調査区内にある。柱穴は直径0.5~0.6mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は2.0mで、棟方向はN 3°Wである。Ⅲ-1~2期のものと推定される。

SA9816 西調査区の中央東よりで検出した掘立柱列である。検出した柱穴は7個で、直径0.2~0.3mの小型のものである。柱間は2.0mのものが一番多いが、1.5mや2.6mのものもありバラつきがある。N 5°Eの方向を取り、調査区内の大半の建物とは異なる。Ⅲ期のSB0322ないし、Ⅳ期の遺物を含むSD9810が方向的に最も近似するので、Ⅲ期の後葉からⅣ期にかけてのものと推定される。

SK9811 西調査区の北部で検出した2.5×1.5m、深さ約0.45mの不整円形土坑である。検出時には1個の土坑と見ていたが、2個の土坑の複合である。ただし出土遺物に時間的な差異はない。出土遺物は少なく、少量の土師器片・須恵器片があるのみだが、Ⅲ期のものと判断される。埋土の重複関係から、SD9810より新しい。

SK9813 SK9811の南3.5mで検出した南北約2.2m、深さ約0.2mの土坑である。ここからも少量の土師器片、灰釉陶器片、土錘が出土したのみだが、Ⅲ期のものとみられる。これもSD9810より古い。

SK0323 西調査区の中央で検出した3.2×2.5m、深さ約0.5mのすり鉢状の土坑である。北半分は第8~9次調査で掘削しているが、南半分からも土師器皿・台付皿・台付小皿・甕・鍋、ロクロ土師器台付皿、灰釉陶器片、綠釉陶器片、山茶椀、白磁椀、鉄滓が整理箱1箱分出土している。Ⅲ-3期に位置づけられる。

SK9833 西調査区の南端近くで検出した、4.3×3.5m、深さ約0.2mの浅い方形の大型土坑である。出土遺物は多くないが、土師器杯・皿類、須恵器片、灰釉陶器碗が出土している。Ⅲ-2~3期に位置づけられる。

SD9047 東調査区の東部で検出した、幅約0.7mの断

第III-1表 第153次調査 挖立柱建物一覧表

遺構番号	ピット番号 ※()はグリッド番号	時期	規模		柱間寸法	主軸	方位 (N基準)	備考
			間(m)×間(m)					
SB0260	(k10)P5/(l10)P3	II-3	5(12.0)×2(4.4)		(桁行)2.4m (梁行)2.2m	南北	N3°30' W	SB9854より古
SB0263	なし	I-4～II-1	4(7.2)×-(-)		1.8m	-	N4° W	総柱建物か・SB9851より古
SB0322	(d9)P3・P4	III	5(8.5)×2(3.6)		(桁行)1.7m (梁行)1.8m	東西	N3° E	SB1081より新
SB1080	(d4)P7・P8/(d5)P2/(d6)P1・P11・P12/(d7)P1/(e4)P2/(e5)P1/(e6)P2・P7	II-1～2	6(15.0)×4(10.8)	身舎 庇	2.4m 東南北3.0m	東西	N1° W	東南北に1間分の庇 (庇出3.0m)・3回程度の建て替えが想定される
SB1081	(e9)P19・P26	III-2～	5(10.5)×2(4.2)		2.1m	東西	N3° W	SB0322より古
SB1084	(d9)P2/(e9)P4・P17・P25/(e10)P1・P3・P4	III	5(10.0)×2(4.2)		(桁行)2.0m (梁行)2.1m	東西	N0°	
SB9011	(g6)P2・P3/(g7)P4	II-2～3	5(10.0)×2(4.4)		(桁行)2.0m (梁行)2.1m	東西	N1° W	SB9821より古
SB9012	(g6)P13/(g8)P2	II-2～3	5(9.0)×2(4.6)		(桁行)1.8m (梁行)2.3m	東西	N3°30' W	
SB9814	(g5)P1/(g6)P4	IIか	3(7.2)×2(4.8)		2.4m	南北	N4° W	SB9821より古
SB9815	(f6)P7/(g6)P7	II-4～	3(6.0)×2(4.0)		(桁行)2.1・1.8m (梁行)2.0m	南北	N0°	
SB9817	(e6)P6・P6・P8/(f6)P12・P13/(e7)P19・P20/(f7)P14	II-3～4	3(5.1)×2(4.0)		(桁行)1.7m (梁行)2.0m	南北	N1° W	
SB9819	(d7)P5/(e7)P12・P21・P26	II-2～3	3(5.4)×2(3.9)		(桁行)1.8m (梁行)1.95m	東西	N1° W	
SB9820	(e7)P2・P5/(f7)P8	II-3	3(6.6)×2(4.2)		(桁行)2.2m (梁行)2.1m	南北	N4° W	SB9822より古
SB9821	(g6)P1/(g7)P5	II-3	5(10.25)×2(3.8)		(桁行)2.05m (梁行)1.9m	東西	N3°30' W	SB9011・9814より新
SB9822	(d7)P10/(e7)P8・P23・P30	III-1～2	4(8.0)×2(4.2)		(桁行)2.0m (梁行)2.1m	東西	N0°	SB9820より新
SB9823	(e8)P2/(e9)P1・P7/(f9)P3	II-3～4	3(5.7)×2(3.8)		1.9m	南北	N2° W	SB9824より古
SB9824	なし	III	5(10.5)×2(4.2)		2.1m	東西	N1° W	SB9823より新
SB9825	(d8)P2/(f9)P7/(e9)P14	III-1～	5(10.5)×2(3.8)		(桁行)2.1m (梁行)1.9m	東西	N0°	
SB9839	(h10)P5・P10/(i10)P15・P10/(J10)P1	II-3～4	5(10.5)×2(4.3)		(桁行)2.1m (梁行)2.15m	東西	N4° W	
SB9840	(h10)P1・P7・P11/(h11)P6・P8/(i10)P9・P17	II-3～4	5(10.75)×2(4.5)		(桁行)2.15m (梁行)2.25m	東西	N2° W	
SB9841	(i10)P18/(j10)P10・P12/(k10)P6・P7/(l10)P14	III-1～	5(10.75)×2(4.8)		(桁行)2.15m (梁行)2.4m	東西	N3° W	
SB9842	(i10)P1/(j10)P11/(k10)P11/(l10)P18	III-1～	5(10.75)×2(4.3)		2.15m	東西	N1° W	
SB9843	(j10)P5・P21/(k10)P8/(l10)P4・P9・P10・P22	III-1～	5(10.0)×2(4.0)		2.0m	東西	N3° W	SB9844より新
SB9844	(j10)P4・P23・P24/(k10)P9/(l10)P15	III-1～2	5(10.0)×2(4.0)		2.0m	東西	N3° W	SB9843より古
SB9848	(k10)P1・P4/(l10)P1	II-3～4	5(11.25)×2(4.4)		(桁行)2.25m (梁行)2.2m	南北	N4° W	SB9848より新
SB9849	(l10)P8/(m10)P8・P12・P13	II-3～4	-(-)×2(3.6)		1.8m	南北	N0°	
SB9851	(m10)P10・P13/(n10)P1・P5/(o10)P1	II-4～III-1	(4)(-)×2(4.2)		2.1m	東西	N4° W	SB9850より新
SA9816	(f6)P8/(f7)P5・P9・P10	III～IV	検出長12.0m		2.0m	南北	N5° E	6間分検出

第III-2表 第153次調査 遺構一覧表

遺構名	遺構の種別	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
SK0323	土坑	土坑3	f8・f9	III-3	土師器:皿・台付皿・台付小皿・甕・鍋 ロクロ土師器:台付皿 灰釉陶器:壺 緑釉陶器:椀・皿 陶器:椀(山茶椀)・壺 白磁:椀 鉄滓
SD0324	溝	溝2	f7・g7・f8・g8・f9・ g9・f10・g10・f11・ g11・f12・g12	IV~	土師器:杯A・皿・小皿・高杯・鍋B・鍋・粗製鉢 黒色土器: 椀 ロクロ土師器:椀・小皿・台付小皿 灰釉陶器:椀・段皿 陶器:椀 陶器:鉢・壺 鉄製品:釘
SD1085	溝	なし	d9・e9	不明	遺物なし 第20次調査で検出
SD1395	溝	溝7	d3e3	Iか	土師器片
SK9035	土坑	土坑36	g7	IV~	土師器:皿・甕・鍋・把手片 ロクロ土師器:小皿 陶器片 青磁:皿
SD9044	溝	溝40	i9・i10・i11・i12	I-4~II-1	土師器片
SD9047	溝	溝43・45	m9・n9・m10・n10	III-2~3	土師器:杯A・皿・甕 ロクロ土師器:皿 灰釉陶器:椀 緑 釉陶器片 陶器:椀(山茶椀) 白磁片
SD9810	溝	溝1	f3・f4・f5・f6・f7・ f8・g8	IV~	土師器:杯A・皿・小皿・台付皿・甕 ロクロ土師器:杯・小皿 須恵器片 陶器:椀(山茶椀)・壺 白磁:皿
SK9811	土坑	土坑10	f4	III	土師器:杯・皿・甕 須恵器片
SK9812	土坑	土坑9	f5・g5	IV	土師器:皿・小皿・台付皿・鍋 灰釉陶器片 緑釉陶器片 陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿) 青磁:椀 鉄製品:釘
SK9813	土坑	土坑16	f5・f6	III	土師器片 灰釉陶器片 土錐
SK9818	土坑	土坑25	e7・f7	II-2~3	土師器:杯A・椀A・椀B・皿A・高杯・片口鉢・甕・鍋B 須恵器:杯A・杯B・蓋・双耳壺・甕・円面硯 灰釉陶器片 緑釉陶器片
SK9826	土坑	土坑30	g7・g8	IV	土師器:皿・小皿・台付皿・鍋 ロクロ土師器:椀・皿 陶器: 椀(山茶椀)・鉢 用途不明土製品
SK9827	土坑	土坑27	e8・f8・e9・f9	IV	土師器:皿・小皿・台付皿・甕 須恵器:高杯 緑釉陶器片 陶器:椀(山茶椀) 鉄製品:釘
SK9829	土坑	土坑20	e10	II-2~3	土師器:杯A・椀A・皿A・鉢・甕・長胴甕・竈 黒色土器: 椀 須恵器:壺・甕 灰釉陶器:椀 緑釉陶器:椀
SK9830	土坑	土坑28	e10・f10	II-3	土師器:杯A・鍋B・甕 須恵器:蓋 灰釉陶器:椀
SK9831	土坑	土坑11	f10	II-3	土師器:杯A・椀A・皿A・鉢・台付鉢・甕 須恵器:甕 灰 釉陶器:椀・皿・段皿 緑釉陶器:椀・皿 製塩土器
SK9833	土坑	土坑14	e11・f11	III-2~3	土師器:杯A・椀A・皿A・高杯・甕・長胴甕・竈 須恵器:杯B・甕 灰釉陶器:椀
SK9834	土坑	土坑12	f11	II-2~3	土師器:杯A・椀A・椀B・皿A・甕 須恵器:蓋・壺・小型平 底壺・甕 灰釉陶器:椀・皿・段皿・壺
SE9835	井戸	土坑4	g10・h10・g11・h11	III-1~2 (埋没時期)	土師器:皿・小皿・台付皿・台付杯・高杯・甕 ロクロ土師器: 椀・皿・小皿・台付小皿 須恵器:細頸壺・鉢・甕・円面硯 陶器:椀 灰釉陶器:椀・耳皿・小型壺 緑釉陶器:椀 白磁: 椀 鉄製品:火打ち鍊 石英塊
SD9836	溝	溝26	e11・e12	IIか	土師器片
SD9837	溝	溝6	g11・g12	II-1~2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕・長胴甕 須恵器:杯B 土錐
SK9838	土坑	土坑15	g12	II-1~2	土師器:杯A・椀A・皿A・蓋・鉢・長胴甕 須恵器:杯B・蓋・ 壺 土錐
SD9845	溝	溝34	h10・i10・j10	IV~	土師器:皿 ロクロ土師器:皿 陶器:壺
SD9846	溝	溝33・35	i9・i10・i11・i12	近世~	土師器片 陶磁器片
SK9847	土坑	土坑31	j11・j12	II-2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕 須恵器片
SD9850	溝	溝44	n9・n10	III-2~3	土師器:皿 ロクロ土師器:皿 陶器片
SK9852	土坑	土坑47	m10・n10・o10・m11・ n11・o11	II-2か	土師器:杯A・椀A・皿A・高杯・鉢・甕 須恵器:甕 弥生 土器:器台部片・甕

遺構名	遺構の種別	調査時 遺構名	グリッド	時 期	出土遺物・その他備考
SK9853	土坑	g12-pit2	g12	II - 1~2	須恵器:杯B・盤
SK9855	土坑	土坑48	o11	II - 1~2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕 須恵器:甕 炭化材
SK9856	土坑	土坑49	n11・o11・n12・o12	II - 1~2	土師器:椀A・皿A・高杯・甕 須恵器:杯B・蓋・壺・甕

面U字形の溝である。調査区内での溝底のレベルは北と南で約0.3mの差があり、南に向かって傾斜している。また、第8-9・143次調査区内で検出されている分とあわせると、延長約16mとなり、さらに北のSD9041につながっていくものとみられる。土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、綠釉陶器片、山茶椀、白磁片が出土しており、III-2~3期のものと推定される。

SD9850 東調査区の北東端で検出した幅約0.3m、深さ0.25mの断面U字形の溝である。第8-9・143次調査区でも延長を検出しており、14.5m分は確認されている。少量の土師器皿、ロクロ土師器皿、陶器片が出土しており、III-2~3期のものと考えられる。

(6) 斎宮IV期以降の遺構

SK9035 西調査区を東へ拡張した箇所で検出した、第143次調査区から続く土坑である。直径約2.0m、深さ約0.15mの略方形で、SB9012の柱穴の一部を壊している。土師器皿・甕・鍋・把手、ロクロ土師器小皿、陶器片、青磁片が出土しており、IV期以降のものとみられる。

SK9812 西調査区の北部で検出した、2.5×2.7m、深さ約0.3mの円形のすり鉢状の土坑である。出土遺物は細片が多いが、土師器皿・小皿・台付皿・鍋、灰釉陶器片、綠釉陶器片、山茶椀、山皿、青磁椀や鉄釘が整理箱で2箱分出土している。

SK9826 西調査区を東へ拡張した箇所の南東隅で検出した3.0×2.0m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。土師器皿・小皿・台付皿・鍋、ロクロ土師器椀・皿、山茶椀などが出土している。

SK9827 西調査区のほぼ中央で検出した、2.1×2.0m、深さ約0.7mの深いすり鉢状の土坑である。遺物の出土は多くはない。土師器皿・小皿・台付皿・甕、須恵器片、綠釉陶器片、山茶椀、鉄釘が出土している。

SD0324 西調査区の南半部東辺を南北に伸びる溝である。幅1.2~1.5m、深さ0.2~0.3mで、溝底のレベルはここも北に傾斜している。調査区内では、南端から約21m北にあがって東に直角に折れるが、その先は第143次調査区で約2m東進して途切れる。土師器片、黒色土器片、ロクロ土師器椀・小皿・台付小皿、灰釉陶器椀・段皿、陶器片、鉄釘が出土している。なお、類似するSD9810との前後関係は、第8-9次調査で交差する部分を掘っており、出土遺物からは判断できなかった。

SD9810 西調査区の北半部東辺を南北に伸びる溝である。幅1.0~1.7m、深さ0.15~0.25mで、調査区内では溝底の高低差はほとんどない。調査区北端から約21m南下してきて、東へ直角に曲がる。第143次調査区では、SK9826の部分で途絶している。一方北へは、第152次調査区のSD9784に接続する可能性がある。このような規模・形状から、SD9810は、SD0324とともに、溝の東西を区画する施設であったと考えられる。土師器片、ロクロ土師器杯・小皿、須恵器片、山茶椀、白磁皿などが出土している。

SD9845 東調査区の西半で検出した、幅約0.5m、深さ約0.1~0.15mの緩やかに屈曲する溝である。溝底はわずかに東へ下がっている。土師器片、ロクロ土師器皿、陶器片が出土している。

4 出土遺物

第153次調査全体では、一次整理の段階で整理箱で94箱の遺物が出土している。第152次調査のように、一箇所で大量の遺物を出土するような遺構はなかった。出土遺物は土坑などの遺構からのものが中心である。その中の代表的なものを概述したい。

(1) SD9837内小土坑出土遺物（1~3）

SK9828出土の土師器皿（1）は、全体の約90%が

残っており、口径17.2cmのものである。全体をナデ・オサエ調整で成形したのち、底部外面のみヘラケズリ調整する。底部から口縁の屈曲が強く、口縁端部を内側に丸くまとめるなど、I期的な要素を残す。

SK9853出土の須恵器（2・3）は猿投窯の折戸10号窯式期頃に相当するものとみられる。

（2）SK9838出土遺物（4～8）

調査区南端の廃棄土坑からの一括遺物である。土師器杯A・椀A・皿A・蓋・鉢・長胴甕、須恵器杯B・蓋・壺、土錐が整理箱で2箱分出土している。土師器杯類は小型のものが多く、口径12～13cm前後で、口縁の外反の度合いが強くなっているが、器壁は厚く、灰釉陶器をまったく含まないことなどから、II-1期の後半からII-2期にかけての一群とみられる。

（3）SK9834出土遺物（9～15）

西調査区南端の廃棄土坑からの出土遺物である。土師器杯A・椀A・椀B・皿A・甕、須恵器蓋・壺・小型平底壺・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺が整理箱2箱分出土した。土師器杯Aの口径は15～16cmのものが主体である。図示していないが、灰釉陶器は黒筐14号窯式から黒筐90号窯式のものまで含み、斎宮跡の編年でII-2～3期の幅がある。土師器類でみる限りは、大半はII-2期の形式内のものが占めるとみられる。無釉の須恵器平底壺（15）は、底部に糸切痕が残り、肩部にわずかに墨痕がみられる。

（4）SK9818出土遺物（16～21）

調査区中央部の土坑からの出土遺物である。土師器杯A・椀A・椀B・皿A・高杯・片口鉢・甕・鍋B、須恵器杯A・杯B・蓋・双耳壺・甕・円面硯、灰釉陶器片、綠釉陶器片が整理箱で約1.5箱分出土した。土師器供膳具類は、口縁が外側に広がり、器壁も薄くなっているといった特徴から斎宮跡編年のII-3期の特徴を持つが、灰釉陶器片には若干古い様相を持つものも含む。II-3期を中心に、一部II-2期の資料も含むように思われる。双耳壺（21）は青灰色の胎土で、斎宮跡では稀少な器種である。円面硯（20）は直径16cmと比較的大形のもので、脚部を欠失するが、方形とみられる透かしの一部が残存する。

（5）SK9829出土遺物（22～31）

西調査区のほぼ中央部の土坑から出土した遺物である。土師器杯A・椀A・皿A・鉢・甕・長胴甕・竈、

黒色土器椀・台付椀、須恵器壺・甕、灰釉陶器椀、綠釉陶器椀が整理箱で2箱分出土している。土師器供膳具類はSK9834・9818のものに比して口径が小さいものが主体で、杯Aは14～15cmである。椀Aには（24）のように口径10cm前後の小型のものもあるが、14～19cmのものが一般的である。（28）には内面に放射状・螺旋状の暗文がある。皿は、底部と口縁部が区別できるものはなくなる。黒色土器には（31）のようなA類で、内面をヘラミガキ、外側をヘラケズリで仕上げる腰高の椀状の高台がつくものがある。斎宮跡の編年でII-2期のものも含むが、主体はII-3期のものである。

（6）SK9831出土遺物（32～42）

西調査区南部の土坑から出土した遺物である。土師器杯A・椀A・皿A・鉢・台付鉢・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀・皿・段皿、綠釉陶器椀・皿、志摩式製塩土器片が整理箱で約1.5箱分出土している。土師器の杯Aには口径14～17cmのものがある。（33）の口縁部にはまんべんなく油煙が付着する。土師器甕は外側に粗いタテハケを施し、口縁端部を内側に丸めるものである。灰釉陶器は釉をツケ掛けするもので、椀（39）のように三日月高台の大椀や、角高台気味の皿（40・41）などがある。綠釉陶器椀（42）は、内面にヘラミガキを施し、淡緑色の猿投窯産のものである。一部にやや古相のものも含むが、全般的にはII-3期の範疇に収まるものである。

（7）東調査区南東隅土坑の出土遺物（43・81・82）

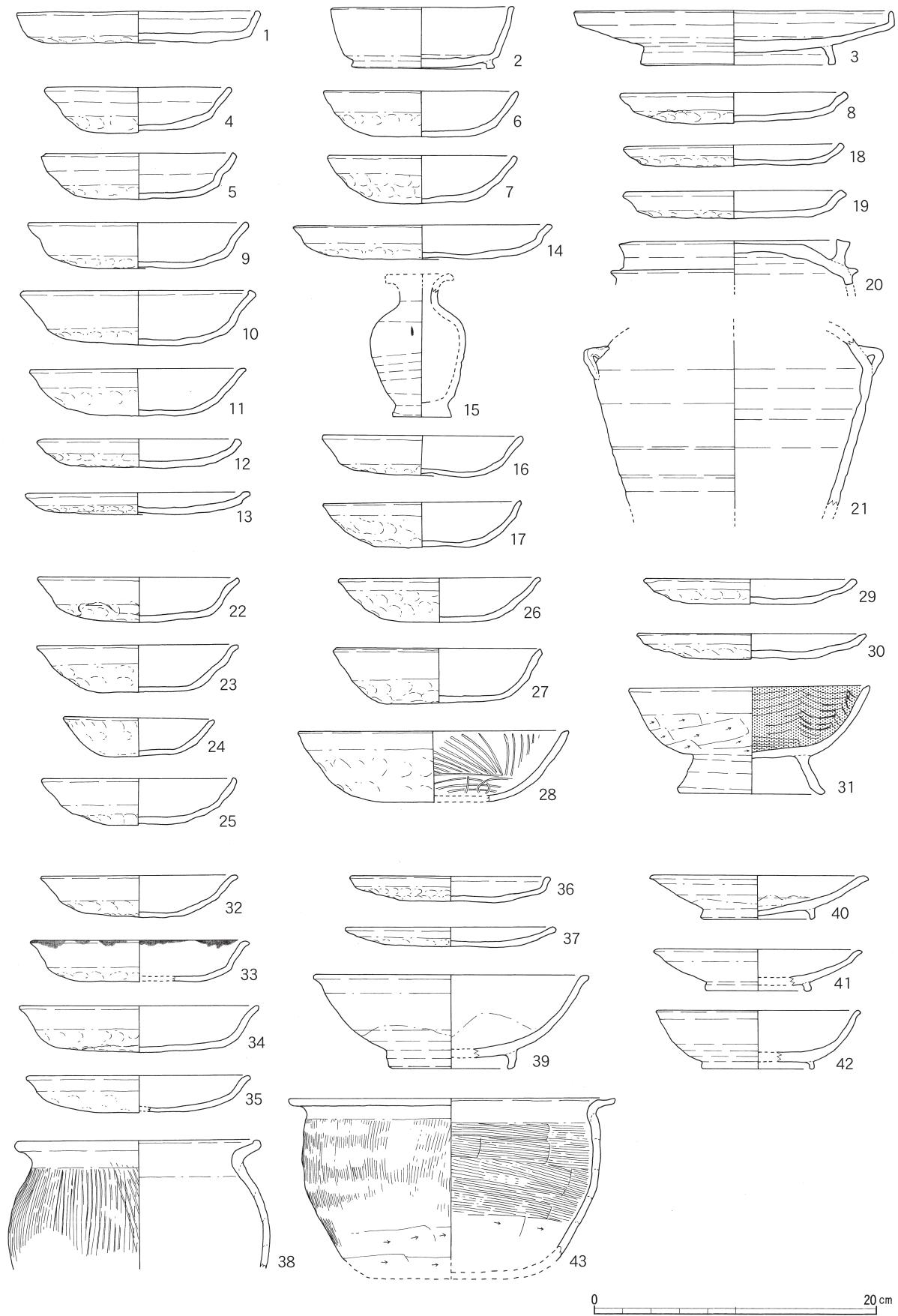
東調査区の南東隅ではSK9852・9855・9856が、後世の搅乱にもかかわらず一部が残存していたが、これらの時期を示す遺物である。

SK9852の土師器鉢（43）は大形の破片で、口径の2分1程度残存している。胎土や焼成も良好で、形式的にII-2期のものとみられる。

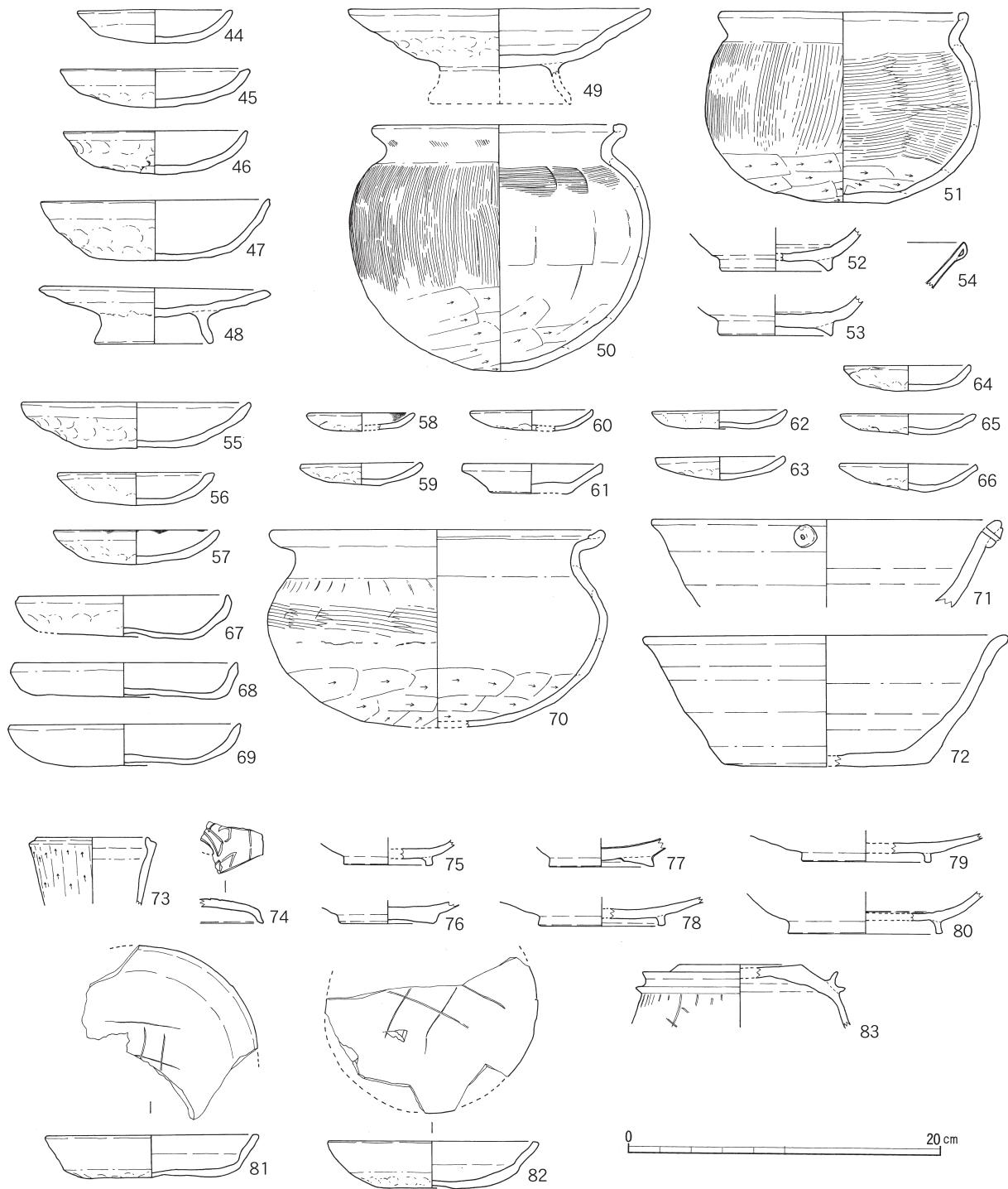
土師器杯A（81・82）はいずれもSK9855の底部から出土したものである。（81）は底部から口縁への屈曲も強く、（82）も厚い器壁を持っていることから、II-1期の中でやや新しい段階の資料とみられる。いずれも見込み部に「井」状のヘラ書きの線刻があり、祭祀遺物的な性格がうかがわれる。

（8）SE9835（上層）出土遺物（44～54）

調査区南部の井戸の埋土から出土した遺物だが、遺



第三-4図 第153次調査 出土遺物実測図(1)(1:4)



第三-5図 第153次調査 出土遺物実測図(2)(1:4)

第III-3表 第153次調査 出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	皿A	SK9828	口径 器高 17.2 2.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ・ ヘラケズリ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約90%		003-02
2	須恵器	杯B	SK9853	口径 高台径 器高 12.9 10.0 4.4	体部クロナデ、底部クロケズリ、貼付高台	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体の約70%		003-01
3	須恵器	盤	SK9853	口径 高台径 器高 22.4 13.7 3.9	口縁部ヨコナデ、体部外面クロケズリ内面ナデ、 底部クロケズリ、貼付高台	密	良	外:灰N5/ 内:浅黄5Y7/3	全体の約90%		003-03
4	土師器	杯A	SK9838	口径 器高 13.2 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約70%		010-03
5	土師器	杯A	SK9838	口径 器高 13.7 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/6	全体の約60%		010-04
6	土師器	杯A	SK9838	口径 器高 13.7 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	全体の約80%		010-01
7	土師器	杯A	SK9838	口径 器高 13.3 3.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	完形		010-02
8	土師器	皿A	SK9838	口径 器高 16.0 2.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	ほぼ完形	外面に粘土接合痕	010-05
9	土師器	杯A	SK9834	口径 器高 15.5 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約50%		007-05
10	土師器	杯A	SK9834	口径 器高 16.6 3.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/6	全体の約90%		007-01
11	土師器	皿A	SK9834	口径 器高 15.2 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8～にぶい黄 橙10YR7/4	全体の約80%		007-04
12	土師器	皿A	SK9834	口径 器高 14.4 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/6	全体の約60%		007-03
13	土師器	皿A	SK9834	口径 器高 15.8 1.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約70%		007-06
14	土師器	皿A	SK9834	口径 器高 18.2 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約40%	被熱によりもろくなる	007-07
15	須恵器	小壺	SK9834	残高 底径 9.2 4.1	体部外面クロナデ・クロケズリ、底部静止系糸	密	良	灰7.5Y5/1	口頸部欠失	外面に墨痕	007-02
16	土師器	杯A	SK9818	口径 器高 14.1 3.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	完形		003-04
17	土師器	杯A	SK9818	口径 器高 14.0 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	全体の約70%		003-05
18	土師器	皿A	SK9818	口径 器高 15.5 1.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約50%		004-01
19	土師器	皿A	SK9818	口径 器高 15.7 1.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の約40%		004-02
20	須恵器	円面鏡	SK9818	口径 残高 16.2 3.2	体部外面クロナデ内面クロナデ・ナ デ、鏡面クロケズリ、貼付外堤部、貼付突部	密	やや 軟調	灰白5Y7/1	口径の1/2弱	方形と見られる透かし、 鏡面に墨痕	002-06
21	須恵器	壺(短 頸部) カ	SK9818	残高 11.7	体部ヨコナデ、貼付把手	密	良	外:灰N5/ 内:灰白5Y7/1	全体の約10%	体部外面に自然降灰	004-03
22	土師器	杯A	SK9829	口径 器高 14.2 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約60%	外面に粘土接合痕	012-06
23	土師器	杯A	SK9829	口径 器高 14.2 3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	全体の約70%		012-02
24	土師器	小型杯	SK9829	口径 器高 10.6 2.9	外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約60%		012-04
25	土師器	杯A	SK9829	口径 器高 13.8 3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	完形		012-01
26	土師器	杯A	SK9829	口径 器高 14.3 3.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の約40%		012-07
27	土師器	杯A	SK9829	口径 器高 14.8 4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/6	全体の約60%		012-03
28	土師器	椀A	SK9829	口径 器高 19.0 5.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ後放射・螺旋暗文	密	良	橙2.5YR6/8	全体の約20%		004-06
29	土師器	皿A	SK9829	口径 器高 15.0 1.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	完形	外面の摩耗著しい	004-04
30	土師器	皿A	SK9829	口径 器高 16.2 1.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	明黄褐10YR6/6	全体の約40%	内面に被熱痕	004-05
31	黒色 土器	(A類) 椀	SK9829	口径 高台径 器高 16.9 10.4 7.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ後横方向のヘラミガキ、底部ヘラ ケズリ、貼付高台	密	やや 軟調	外:橙7.5YR7/6 内:オリーブ黒5Y3/1	全体の約70%	内面のみ黒化処理	012-05
32	土師器	杯A	SK9831	口径 器高 13.8 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	浅黃橙7.5YR8/4	全体の約90%	器表面の摩耗著しい	008-04
33	土師器	杯A	SK9831	口径 器高 15.4 2.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	浅黃橙10YR8/4	口径の約1/2	口縁部端に断続的に油 煙付着	008-03
34	土師器	杯A	SK9831	口径 器高 16.8 3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約50%	外底面に粘土接合痕	008-05
35	土師器	皿A	SK9831	口径 器高 15.7 2.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の約30%		009-01
36	土師器	皿A	SK9831	口径 器高 14.2 1.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の約80%	器形のゆがみ大きい	008-06
37	土師器	皿A	SK9831	口径 器高 14.9 1.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約80%	器形のゆがみ大きい	008-07
38	土師器	甕A	SK9831	口径 残高 17.3 9.1	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ナ デ	微細な砂粒を多 量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/3	口径の約3/4	外面は被熱で赤変	009-02
39	灰釉 陶器	椀	SK9831	口径 高台径 器高 19.4 8.8 6.6	口縁部ヨコナデ、体部外面クロナデ・ クロケズリ内面クロナデ、底部回転 ヘラ切り、貼付高台	密	良	釉:灰白5YR8/1 素地:灰白5Y7/1	全体の約40%	灰釉ツケ掛け、内面に 重ね焼痕	008-01

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号	
40	灰釉陶器	皿	SK9831	口径 高台径 器高	15.4 8.0 3.1	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、底部ロクロケズリ、貼付高台	密	良	釉：明緑灰10GY7/1 ～灰白5Y7/2 素地：浅黄2.5Y7/3	全体の約60%	灰釉ツケ掛け、内底面のみハケ塗り、内面に重ね焼痕	008-02
41	緑釉陶器	皿	SK9831	口径 高台径 器高	14.6 7.2 2.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ後へラミガキ、底部ロクロヘラ切り、貼付輪高台	密	堅緻 (硬質)	釉：ねこやなぎ色 素地：灰黄2.5Y7/2	口径の1/4、 高台径の1/4	猿投産、全面施釉	001-03
42	緑釉陶器	椀	SK9831	口径 高台径	14.4 7.8	体部外面ロクロヘラケズリ内面ロクロナデ後へラミガキ、底部ロクロヘラ切、貼付輪高台	密	堅緻 (硬質)	釉：ねこやなぎ色 素地：灰黄2.5Y7/2	口径の1/3、 高台径の1/2	猿投産、全面施釉、内面に三又トチン痕	001-02
43	土師器	鉢	SK9852	口径 残高	23.0 11.5	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ内面ヨコハケ・ヘラケズリ	密	良	黄橙7.5YR7/8	口径の約1/2		009-03
44	土師器	小皿	SE9835	口径 器高	9.9 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2～黄灰2.5 Y5/1	全体の約80%		005-04
45	土師器	小皿	SE9835	口径 器高	12.1 2.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	全体の約40%		006-01
46	土師器	皿	SE9835	口径 器高	11.7 2.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	外面に粘土接合痕	005-03
47	土師器	杯	SE9835	口径 残高	14.5 3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	良	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形	外底面に大きな黒斑	005-01
48	土師器	台付皿	SE9835	口径 高台径 器高	14.8 7.5 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ナデ、 貼付高台	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	全体の約60%	見込み部に布目压痕	005-05
49	土師器	台付皿	SE9835	口径 残高	19.4 4.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ、底部ナデ、貼付高台	Φ 1mm以下の砂粒を多量に含む	良	明褐灰7.5YR7/2	全体の約50%	外表面に被熱による赤変、 高台は意図的に欠いた可能性がある	006-03
50	土師器	甕	SE9835	口径 器高	16.2 15.8	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ 内面ヨコハケ・板ナデ・ヘラケズリ	密	良	灰白2.5Y8/2	全体の約60%	外表面に多量のスス・ 黒色物付着	006-02
51	土師器	鍋	SE9835	口径 器高	16.0 12.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ・ヘラケズリ、 底部ヘラケズリ	密	良	淡黄2.5Y8/3	全体の約60%	外表面に被熱による赤変、 黒色物付着	005-06
52	緑釉陶器	椀	SE9835	高台径 残高	6.8 2.8	体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕、 貼付輪高台	密	軟調 (土師質)	釉：黒緑 素地：浅黄橙10YR8/ 4	高台径の 約1/2	近江産、全面施釉、内 外面に三又トチン痕	001-05
53	緑釉陶器	椀	SE9835	高台径 残高	7.2 2.6	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕、貼付 輪高台	密	軟調 (土師質)	釉：千歳緑 素地：灰白2.5Y8/2	高台部のみ 完形	近江産、全面施釉、内 外面に三又トチン痕	001-04
54	白磁	椀	SE9835	残高	3.0		緻密	良	釉：白 素地：灰白7.5Y8/1	口縁の一部	刑窓系	002-05
55	土師器	皿	SK0323	口径 器高	14.6 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	全体の約60%		005-02
56	土師器	小皿	SK9833	口径 器高	10.0 2.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約60%		010-06
57	土師器	小皿	SK9833	口径 器高	10.6 2.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	微細な砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約90%	口縁に油煙付着	010-07
58	土師器	小皿	SK9812	口径 器高	6.9 1.3	ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	全体の約60%	内面の一部に油煙付着	013-05
59	土師器	小皿	SK9812	口径 器高	7.8 1.4	ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	全体の約80%		013-03
60	土師器	小皿	SK9812	口径 器高	7.8 1.3	ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約70%	器形のゆがみ大きい	013-04
61	陶器	皿(山皿)	SK9812	口径 器高	8.8 1.9	体部外面ヨコナデ内面ヨコナデ・ナデ、 底部回転糸切り痕	密	良	灰黄2.5Y7/2	全体の約60%	内面にスス付着	013-06
62	土師器	小皿	SK9826	口径 器高	8.6 1.2	ナデ	微細な砂粒含む	良	にぶい橙7.5YR7/4	全体の約60%		011-05
63	土師器	小皿	SK9826	口径 器高	8.2 1.5	ナデ	微細な砂粒含む	良	浅黄橙10YR8/4	全体の約90%		011-06
64	土師器	小皿	SK9826	口径 器高	8.1 1.6	体部ナデ・オサエ	密	良	浅黄橙10YR8/4	完形	外表面に粘土接合痕	003-06
65	土師器	小皿	SK9826	口径 器高	8.6 1.4	ナデ	微細な砂粒含む	良	浅黄橙10YR8/4	ほぼ完形	外表面に粘土接合痕	011-04
66	土師器	小皿	SK9826	口径 器高	8.8 1.9	ナデ	微細な砂粒含む	良	にぶい橙7.5YR7/4	全体の約70%		011-07
67	土師器	皿	SK9826	口径 器高	13.3 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	全体の約50%		011-03
68	土師器	皿	SK9826	口径 器高	14.2 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	全体の約80%		011-02
69	土師器	皿	SK9826	口径 器高	14.8 2.8	ナデ	微細な砂粒含む	良	灰黄2.5Y6/2	全体の約90%		011-01
70	土師器	鍋	SK9826	口径 器高	21.4 12.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・ハケ・ ヘラケズリ内面ナデ・ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい褐7.5YR5/4	全体の約40%	外表面にヘラ工具痕・多 量のスス付着	011-08
71	陶器	鉢	SK9826	口径 残高	22.2 5.6	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口径の1/3	円形浮文・穿孔、自然 降灰釉	013-01
72	陶器	鉢	SK9826	口径 器高	23.2 8.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ・ ロクロケズリ内面ロクロナデ、底部ヘラ 切り後無調整	密	良	灰白2.5Y7/1	全体の約30%	内面に自然降灰による 自然釉	013-02
73	土師器	壺E	SK9856	口径 残高	7.0 4.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ	密	良	明赤褐2.5YR5/8	口径の約1/3	肩部外間に墨書き痕があ るが判読不能	002-08
74	緑釉陶器	香炉蓋	包含層	口径 残高	不明 1.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ内面ナデ	緻密	堅緻 (須恵質)	釉：千歳緑 素地：暗灰黄2.5Y5/2	全体の10% 程度	外表面に沈潜による陰刻 花文と木葉形の透穴	001-01
75	緑釉陶器	小椀	包含層	高台径 残高	5.6 1.6	体部外面ナデ内面ヘラミガキ、底部ロク ロナデ、貼付輪高台	密	良 (須恵質?)	釉：豌豆綠(ビーグリー ン) 素地：灰白5Y8/1	高台径の1/2 弱	全面施釉	002-03
76	緑釉陶器	椀	包含層	高台径 残高	6.2 1.3	体部ナデ、底部調整不明(平高台)	密	軟調 (土師質)	釉：蒸栗色 素地：灰白2.5Y8/2	底部のみ	全面施釉、釉の大半剥 離	002-01
77	越州窯青磁	椀	包含層	高台径 残高	6.6 1.8	体部ロクロナデ、底部ナデ?、貼付蛇目 高台	緻密	堅緻	釉：海松茶 素地：灰白7.5Y7/1	高台径の 約1/4	全面施釉	002-04

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
78	緑釉陶器	皿	包含層	高台径 残高 8.0 1.8	体部ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、貼付輪高台	密	堅緻 (硬質)	釉：老竹色 素地：灰黄褐10YR6/ 2	高台径の1/3	全面施釉、内外面に三 又トチン痕	002-02
79	緑釉陶器	皿	包含層	高台径 残高 8.2 1.8	体部外面ロクロケズリ内面ヘラミガキ、 底部ロクロナデ・ヘラミガキ、貼付輪高台	密	堅緻 (硬質)	釉：ねこやなぎ色 素地：にぶい黄2.5Y6/ 3	高台径の 約1/3	全面施釉	001-07
80	緑釉陶器	椀	f-7 p7	高台径 残高 9.8 2.7	体部ロクロナデ、底部ロクロナデか？、 貼付輪高台	密	軟調 (土師質)	釉：香櫞緑（シトロン グリーン） 素地：浅黄橙10YR8/ 4	高台径の1/4 弱	猿投産か？全面施釉、 内面に沈線	001-06
81	土師器	杯A	SK9855	口径 器高 13.6 2.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	全体の約30%	見込み部に「井」状の 線刻	014-01
82	土師器	杯A	SK9855	口径 器高 13.4 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	全体の約40%	見込み部に「井」状の 線刻	014-02
83	須恵器	円面硯	包含層	外堤径 残高 12.4 3.6	体部ロクロナデ、硯面ロクロケズリ、貼 付外堤部と突帶	密	良	灰黄2.5Y7/2	口径の約1/4	脚部にヘラ描きで格子 文、硯面は摩耗すすむ	002-07

構検出面から約1.5mの深さまでの調査であるため、埋没の最終段階の遺物群である。土師器皿・小皿・台付杯・台付皿・高杯・甕、ロクロ土師器椀・皿・小皿・台付小皿、須恵器壺・鉢・甕・円面硯、無釉陶器椀、灰釉陶器椀・耳皿・小型壺、緑釉陶器椀、白磁椀などの土器類の他、火打ち鎌とみられる鉄製品や、それと対応する可能性のある石英塊が整理箱で4.5箱分出土している。土師器杯・皿類(44~47)はほとんど形態上の区別がなくなりつつあり、甕(50)・鍋(51)は球形の体部に、内側に丸める口縁端部を持つ。灰釉陶器は猿投窯跡の編年観で東山72号窯式期～百代寺窯式期のものとみられる。(52・53)は緑釉陶器の椀で、軟質の胎土に濃緑色の釉を施す近江産のものである。白磁椀(54)は灰白色の精緻な胎土に明白色の釉が均質にかかる玉縁口縁の椀である。

これらSE9835上層の遺物は、III-1～2期に位置づけられるものと考えられ、井戸の最終埋没時期を示すものとみられる。

(9) III-2～3期の遺物 (55～57)

III-2期以降になると、良好な状態の遺物が少なくなる。SK0323出土の土師器杯(55)は、砂粒の多い胎土で、口縁部がわずかに肥厚する。III-3期の前半のものとみられる。SK9833の(56・57)は直径約10cmの小皿で、微細な砂粒の多い胎土で器壁も厚い。形式的にIII-2期に位置づけられよう。なお、(57)の口縁には油煙が付着している。

(10) IV期の遺物 (58～72)

鎌倉時代の遺物を斎宮跡第IV段階とし、その遺物に示される段階をIV期とするが、今回の調査区内では、斎宮方格地割の中では比較的多くこのIV期の遺物が出土している。

SK9812から土師器と陶器の小皿がまとまって出土している(58～61)。土師器小皿は口径7～8cmで、薄手の硬質な焼き上がりである。(58)は口縁に油煙が付着する。無釉陶器の小皿(山皿・61)は高台のない、生産地の渥美・湖西の編年観でIII-1～2段階のものである。鎌倉時代前半の13世紀中葉頃に位置づけられようか。

SK9826からは、土師器皿・小皿・台付皿・鍋、ロクロ土師器椀・皿、無釉陶器椀(山茶椀)・鉢など(62～72)が出土している。土師器皿の口径は14cm内外、小皿は8～9cmである。おそらく高台のつく鉢の(71)は口縁外面にボタン状の粘土塊を貼付し、直径4mmほどの穴を貫通させている。目的は不明である。鎌倉時代前半に位置づけられるだろう。

IV期の遺構・遺物は、第143次調査でも確認されているが、周辺では、南の牛糞東区画やその隣の鍛冶山西区画といったいわゆる「内院」推定地では、これまでの調査では出土しておらず、斎宮駅周辺の内山地区や方格地割の外側に多く分布している。その中でわずかながら今回のように遺物が確認できたということは、確実に存続していた鎌倉時代の斎宮を、検討していく上で貴重な資料といえる。

(11) その他特記すべき遺物 (73～83)

特殊遺物として整理上抽出しているものでは、緑釉陶器が遺構出土のものも含めて121片ある。これは同じ柳原区画内でも第152次調査区と比べて多い。実際遺構からの大形破片の出土もあり、区画の北と南で使用する器物に差があるのかもしれない。(74)は合子ないし香炉の蓋で、濃緑色の釉で外面に線刻で花文とみられる文様を描く。(75・76・78～80)は緑釉陶器の椀ないしは皿で、こうした図化可能な破片が各所で

出土した。これらはいずれも猿投産のものである。

また、北宋代の白磁ないしは青白磁を中心に貿易陶磁片は23片あり、方格地割全体の中で突出した傾向がうかがわれる。(77) は越州窯系青磁の碗である。蛇の目高台を持ち、精緻な胎土に均質なオリーブ色の釉が施される。

(83) は須恵器の円面鏡で、細く鋭角的な外堤部に、大きく上に突き出した陸部を持つ。一部が残存する脚部には格子目とみられる線刻の装飾がつく。

5 まとめ

(1) 第153次調査の成果

第153次までの調査で、柳原区画の内側の調査面積は約56%に達した。第153次調査は、この区画でのこれまでの調査の隙間を埋めるようにして調査しており、掘立柱建物は、ほとんどが周囲の調査区から続いてくるため、合計27棟を検出し、ほぼ予想通りの成果をあげることができた。

特にその中で、今回の調査の主目的であるSB1080の規模については、新たに東面の庇を検出し、東南北の三面に庇を持つ建物であることを確認した。同年度の第152次調査でも斎宮跡では稀な四面庇付建物が9世紀から少なくとも11世紀半ばころまで、複数回の建て替えを経ながら存続していたことが確認された。このように三・四面という多面の庇付建物は、斎宮跡の方格地割内ではこれまで8棟しか検出されておらず、これが一区画に集中し、同じ規模で継続していく例はこれまでにない。柳原区画の方格地割内での際立った性格を現していると言えよう。SB1080はその間面上の規模だけでなく、柱間が身舎で約2.4m(8尺)前後、庇出で約3.0m(10尺)という構成で、身舎の柱穴は重複した掘削のため明瞭に測定できる箇所はないが、一辺1mは超える規模のものである。これは「内院」推定地の鍛冶山西区画・牛葉東区画の建物を除けば、方格地割内にあって最大級の建物である。このSB1080は、位置的には柳原区画の南西4分の1の範囲のほぼ中央にあることも重要であろう。ただしSB1080が庇を持つのはII-1期の限られた期間であったとみられ、その後存続が確認できるII-2期までの間、つまり8世紀末から9世紀前葉までの間に2回以上の建て替えがあり、庇は早期に無くなつて、5間×2間

の一般的な大形の東西棟に変わっていく。このようなことからSB1080は、柳原区画の中にあって特別な建物であるとはみられるが、具体的な性格の検討については、区画内のさらなる調査の進展を待ちたい。

第153次調査区では、II-1期にはSB1080以外の建物は全くみられないが、II-2期以降になると西調査区では中央部(Aグループ)と第143次調査と重複した部分(Bグループ)に、東調査区では第8-9・143次調査区と重なる部分(Cグループ)で柱穴の規模はそれほど大きくはないが一定の建物のグループができる。III期には西調査区中央部のグループが、第20次調査区にかかる東西棟の一群(Dグループ)になる。これらのグループ内では、3間×2間の南北棟(A・Bグループ)、5間×2間の東西棟(B・C・Dグループ)、5間×2間の南北棟(Cグループ)といったように、建物規模におおよその規格が認められる。棟方向も、一部例外を除き、正方位か2~4°北で西に振ったものであり、棟方向の継時的な変化は第152次調査区に比べてやや乏しい。さらに区画の全体的な検討を行わなければならないが、II-2期以降は、柳原区画内で全体の構成に変化があった可能性もある。

一方でこうしたまとまった建物の分布は、門などの可能性のあるピットはあるものの、調査区内で10グリッド列より南にはまったくみられていない。今回の調査区内で方格地割の区画道路や、それに関連する施設を確認していないが、これまでの調査成果から調査区南端から5~3mほどのところに区画の南を限る区画道路の北側溝の計画ラインが想定されている。西の第20次調査の成果ともあわせると、このラインから約12mまでの間隔には、平安時代を通じて建物跡が認められない。この東西の道路については、一部ではあるが平成5年度の第103次調査で道路面を確認しているが、区画道路は若干幅員を減じるもの、建物などが侵入することなく、平安時代を通じての道路の機能維持がなされていたことがうかがわれる。方格地割内の、調査が及んでいる近鉄線路以北の調査例では、方格地割の区画道路や、区画の遺制は早ければ9世紀のうちに失われていく地点も多数みられ、「内院」推定地の牛葉東区画と鍛冶山西区画間の道路であっても平安時代後期から末期には道路機能が維持されなくなる中で、この牛葉東区画と柳原区画の区画間の道路は、特別に

意識された道路あるいは空間であったとみられる。

Ⅲ期以降では、区画溝的な性格が想定されるものが、Ⅲ期の後半からⅣ期にかけて現れる点が注目される。遺構の章でも触れたが、文献の上から確実に存続している鎌倉時代の斎宮については、断片的に遺構・遺物は確認されるものの、構造的な把握は全くできていない。第153次調査で確認した、末端がL字形に折れるSD0323・9810は第152次調査のSD9737・9738などとあわせ、平安時代末期から鎌倉時代にかけての斎宮中枢部の重要な構成要素であった可能性がある。

出土遺物の上では、区画の性格を検討する上で有効な墨書き土器などは見つかっていない。しかし、区画の北半に比べて縁釉陶器が多いこと、また調査区内ではやや大型の(20)を含め、円面窯の出土が目立つこと、10~12世紀の比較的初期の貿易陶磁が他の区画・エリアと比べても多く、また破片ながら優品がみられることも、柳原区画の性格を検討する上で有効な情報であろう。

(2) 柳原区画内の建物配置の検討

平成19年度は、3年間を予定する柳原区画の調査計画の初年度で、平成21年度までこの区画を集中的に調査する予定で、その後、当区画の調査の正報告書の刊行を予定しているが、今後の調査の課題を整理しておくためにも、この区画の成立や、構成を検討する上で鍵となるSB1080・第152次調査の四面庇付建物の成立期について、大まかな建物配置を検討してみた。柳原区画での建物の初現はⅠ-4期頃で、これは方格地割の中心部分の成立期であり、また、先に報告してきた通り、SB1080や最初の四面庇付建物であるSB9800はⅡ-1~2期に存続時期が求められる。また建物の棟方向に着目すると、Ⅱ-1期の中でも、N 4°W前後を基調とするものと、ほぼ正方位に近いものの二つのグループに、おおよそ区分することができる事が分かった。これらを手がかりに今回は、柳原区画で確認されたこの時期の主要な建物に絞って、これらの建物の配置と変遷を素案として整理してみた。

①Ⅰ-4期~Ⅱ-1期(第Ⅲ-6図)

現在、方格地割の成立過程については、Ⅰ-4期を光仁朝期にあて、この段階は鍛冶山西区画の部分が整備され、周辺には付属的な建物がみられる程度であり、Ⅱ-1期の桓武朝にいたって、光仁朝の斎宮中心部を

拡大整備する形で方格地割が形成されていったという認識にある。Ⅰ-4期にはSK9675など、出土遺物の上で確実にこの時期にあてられる遺構もあるものの、方形区画の造営が及んでいたとは考えにくい。確実にこの時期まで遡りえると思われる建物はない。ただ、大幅に棟方向を違えるSB9783などは可能性が高いと言えようか。

方格地割の枠を当てはめて考えると、区画の東西・南北のセンターラインには、それぞれSD9044と、第28次調査のSD1332が位置や方向の上で合致してくる。この他には区画溝は見当たらないが、この2条の溝の存在から、方形区画の成立段階では、約120m四方の区画を4分の1に区分して使用する意識があったとみられる。そうすると、区画内の井戸がこの時期まですべて遡り得るとすると、それぞれの小区画に1基づつ配置されているとみられるとともに、南の2小区画にはSB1050やSB0263といった総柱建物がそれぞれに置かれていることにも意味があるだろう。いずれにしても、それぞれの小区画には、現在のところ建物の規模や形状の上から大きな差が認められない。ほぼ全体を調査した南西の小区画に注目すると、SB1040とSB0321との間隔は約17.9m(約60尺)、SB1040の東側柱筋とSB1050の西側柱筋の間隔は8.9m(約30尺)、区画溝であるSD0046の溝の中心線からSB0312の東側柱筋の間隔は29.6m(100尺)である事が分かる。今後、他の小区画でも、同様の建物の計画的配置が認められるであろう。

②Ⅱ-1期~(第Ⅲ-7図)

Ⅱ-1期は、土器の編年観から8世紀末から9世紀前葉にかけての段階と位置づけられる。この段階の中で先の区画を4分割する利用形態が変更され、建物の棟方向がほぼ正方位を基調としたものに変わる。柳原区画内部では、新たに東西方向のSD1326が設けられる。この溝はほぼ東西正方位で、柳原区画の南北センターラインの北側に位置するものの、区画を南北に2分するものである。この南側では、区画最大のSB1080や四面庇付のSB9800など大型の建物が建てられる。一方、北半では3間×2間程度の小規模なものが中心で、区画内のバックヤード的な性格がうかがわれる。

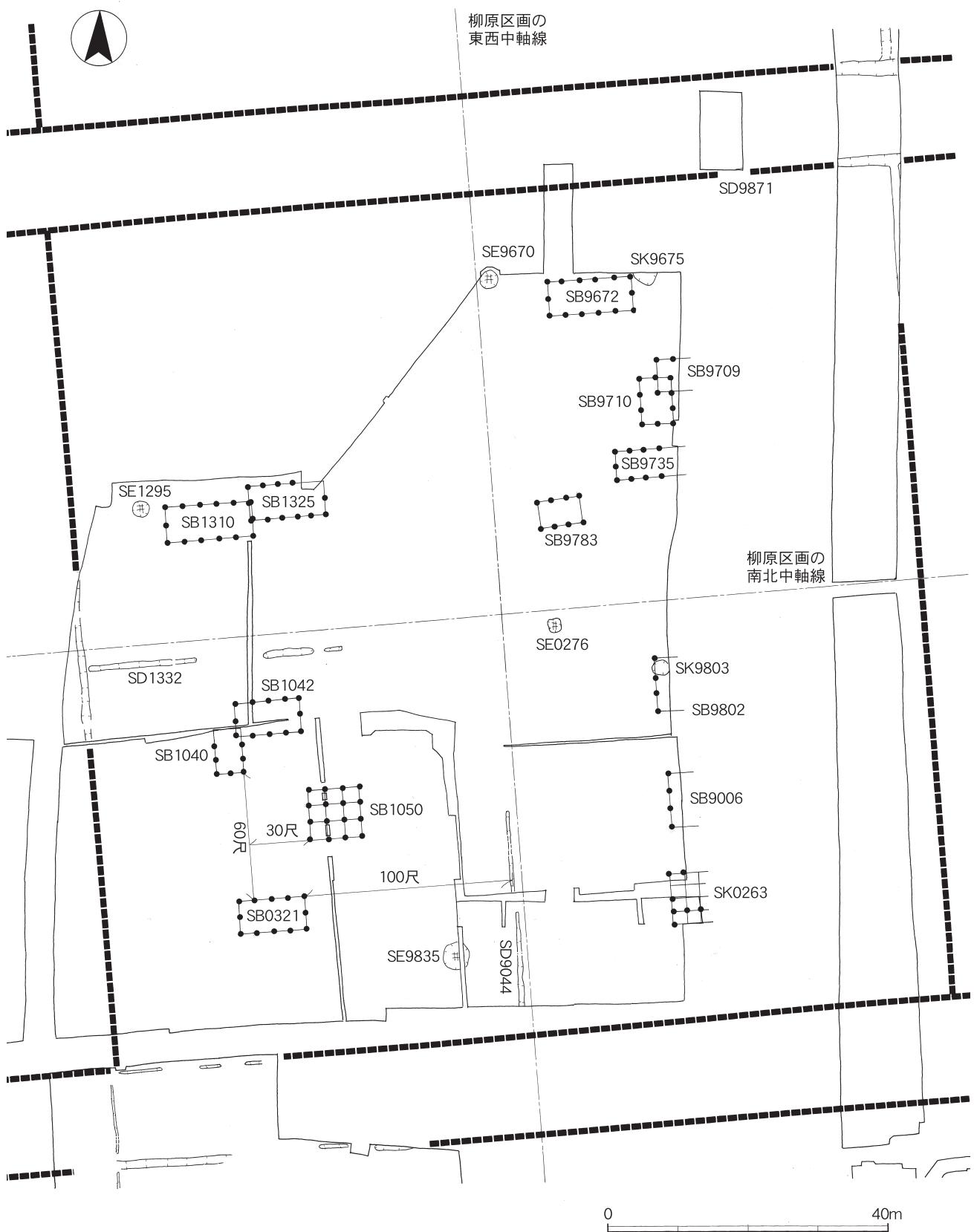
これにより、区画を南北に2分するものの、区画全体が一体の機能を持つようになったといえる。建物の配置計画を検討すると、SD1392の溝の中心からSB1080の北側柱筋までは約29.4m（約100尺）、SB1080の東側柱筋とSB9800の西側柱筋は11.6m（約40尺）、同じくSB1080の北側柱筋とSB9800の南側柱筋は11.5mでほぼ40尺といえる。このように区画南半の大形建物はそれぞれに強い関連性を持って配置されたことがうかがえる。

以後、SB1080は変容しつつも少なくとも9世紀中葉まで、SB9800は複数回の建て替えを経つつ11世紀

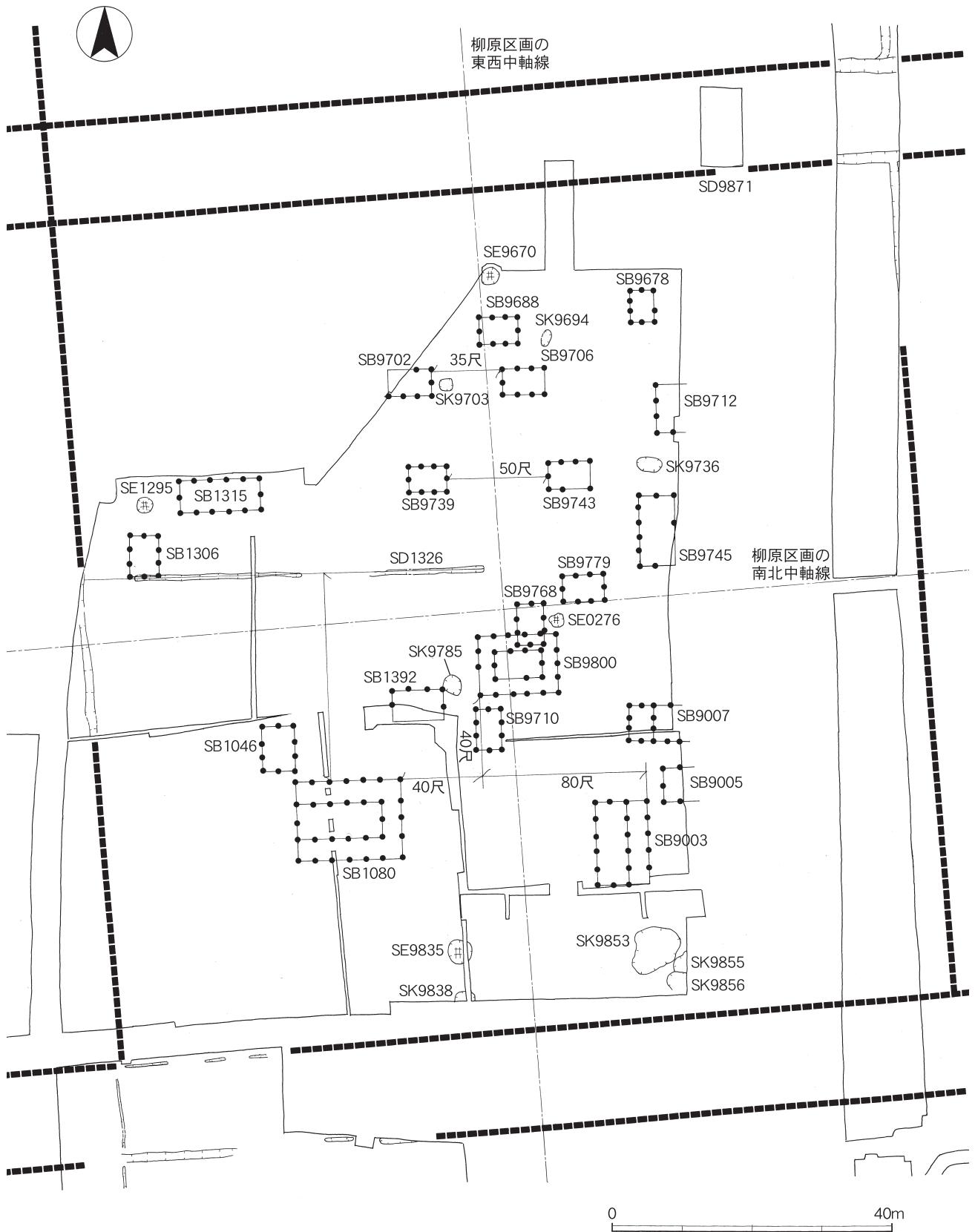
代まで存続する。このII-2期以降の区画内の変遷については、建物の数や棟方向のバリエーションなどが複雑になるため、次年度以降の調査成果や、第8-9・20・28・143次調査の成果も再検討しながら分析するのが望ましいと考える。
（大川勝宏）

《参考文献》

- ・竹内英昭「II 第143次調査」『史跡斎宮跡平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2006
- ・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994
- ・大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館研究紀要十七』2008



第III-6図 柳原区画の主要遺構配置 (I-4~II-1期)



第III-7図 柳原区画の主要遺構配置（II-1期～）

写真図版 III-1 第153次調査 遺構（1）



調査区全景（北から）



調査区全景（東から）

写真図版 III-2 第153次調査 遺構（2）



西調査区全景（北から）



SB1080（東から）

写真図版 III-3 第153次調査 遺構 (3)



SB1080の第20次調査で完掘した柱穴（東から）



SB9817（北から）

写真図版 III-4 第153次調査 遺構 (4)



SB9012・9821 (西から)



東調査区全景 (東から)

写真図版 III-5 第153次調査 遺構 (5)



SD1395・6802 (西から)



SD9044 (北から)

写真図版 III-6 第153次調査 遺構 (6)

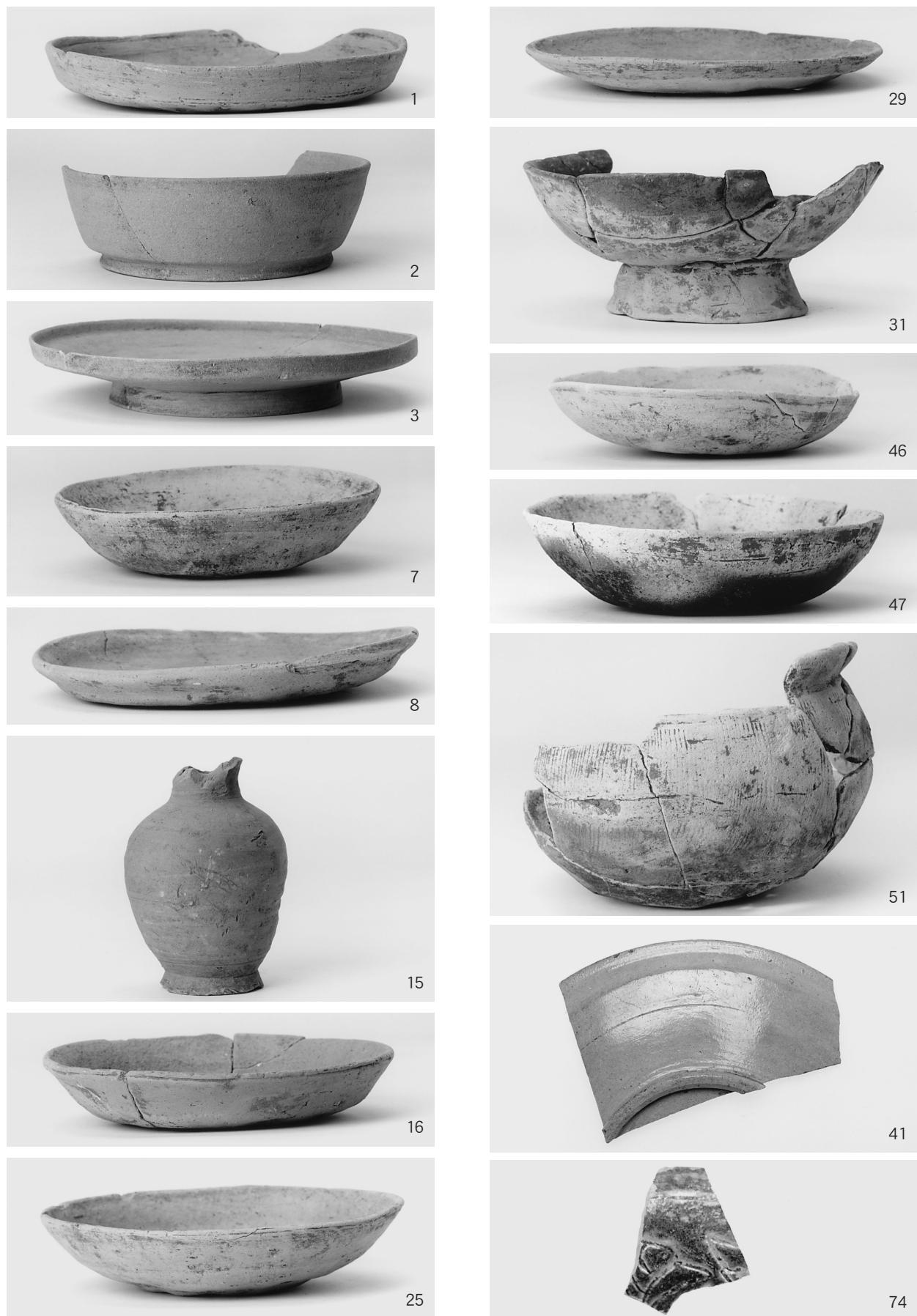


SE9835 (北から)



SK9853 (西から)

写真図版 III-7 第153次調査 遺物



IV 第154次調査 (6AL9 広頭地区)

1 はじめに

史跡西部から東に延びる奈良時代の古道（通称：奈良古道）は、史跡東部では平成19年度に実施した第152次・第153次調査ほか、多数の計画調査で確認している。さらに史跡の東端から東0.6kmには、平成18年度に三重県埋蔵文化財センターが調査した笛笛川左岸の丁長遺跡があり、ここでも奈良古道両側溝が確認されており、総延長約1.9km以上の直線的な道路が確認されている。

斎宮歴史博物館から史跡中央部にある斎宮跡歴史ロマン広場までの区間については、調査箇所が少ないとから、平成14年度には第139次調査として、昭和58年度に実施した第50次調査区の西側と東側で2箇所の調査区を設けている。

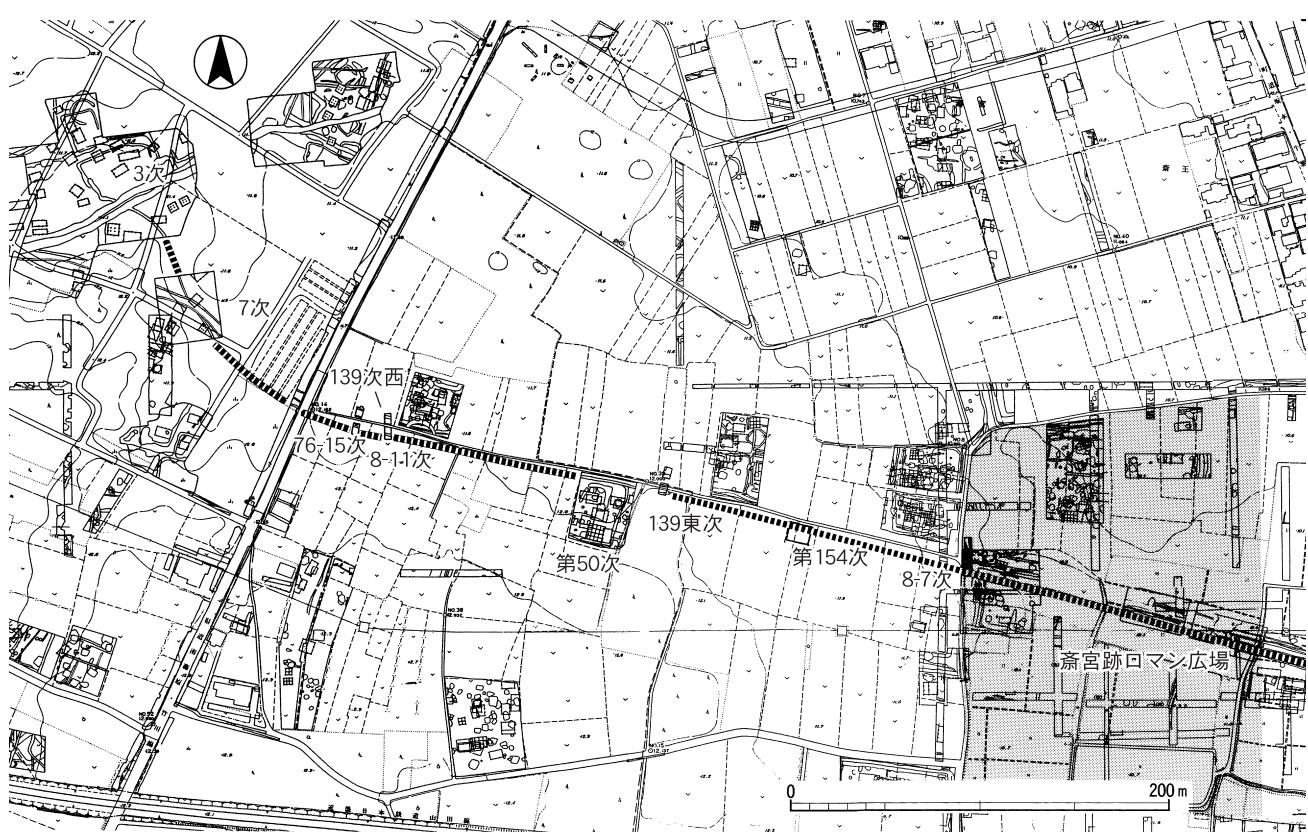
第139次調査は、幅2mのトレンチ調査であることから、北側の道路側溝については西側トレンチでしか確認していない。また、第139次東調査区とロマン広

場との間隔は広いことから、そのほぼ中間にあたる位置に調査区を設定し、奈良古道南側溝の実態を解明する目的で第154次調査を行った。

調査区は、斜方向に延びる現在の農道に沿って、長辺14m、短辺11mとした。調査面積は、調査区西側に沿って南北溝が検出されたため、西南部を西側に一部拡張して溝の幅を確認した結果、 157m^2 となった。

地区設定は、近年の調査で使用している史跡全体を4mのメッシュに区切り、それぞれに異なる名称を与えた表示方法ではなく、調査区が斜方向となるために長方形の調査区の西北隅を基準として4mに区切り、長辺「ア～エ」のカタカナ、单辺「1～3」の数字を組み合わせた地区設定とした。

調査期間は、平成20年3月3日から3月19日で、このうち3月7日まで遺構掘削を行い、10・11日に写真撮影、遺構実測を行った後、埋め戻しは12日から19日にかけて行った。



第IV-1図 第154次調査 調査区位置図 (1:4,000) 点線は奈良古道南側溝

2 地形と層位

史跡西部の地形は、台地縁辺部西側で近鉄線南側が14.5mと最も高く、東北に向かって緩やかに傾斜しており、当調査区周辺での標高は約12mで、地目は畠である。

層位は、調査区南側では茶褐色土（表土）の下は黄褐色粘土層（地山）で、地山層は北側に向かって傾斜しており、途中から表土の下に褐色土（床土）が入る。遺構検出面は、黄褐色粘土層（地山層）上面で、その深さは調査区南側で0.2mと浅く、調査区北側に向かって深くなり、調査区北端では0.4mの深さである。

3 遺構

検出した主な遺構について種別に概要を述べ、その後に掘立柱建物、土坑、溝の順に記述する。

掘立柱建物は、調査区南側で柱穴を幾つか確認しているが、奈良時代まで遡るものではなく、平安時代でも後半に入る2棟の掘立柱建物と掘立柱塀1条を検出した。

土坑は少なく、SD9857南肩の東端から調査区西南部に向かってのびる大きな落ち込みSK9860や調査区西北部にあるSK9865があるだけである。

溝では、調査区北側で斜行する奈良時代の道路南側溝SD0170、重複する平安時代後期のSD9857やその北側に鎌倉時代の東西溝SD9858、トレンチ西壁に沿う位置での南北溝SD9859のほか、建物の周囲を取り巻くと推定できるSD9864がある。

SB9861 調査区南東部に位置し、1間分しか確認していないため、調査区東と南に延びるものと考えられる。SD9864と重複し、溝よりも新しいことを確認した。柱掘形は直径0.4m、深さ0.1m以上の円形を呈する。柱間は2.1mで建物方位は東で南に18度振れる。柱穴から出土した遺物は少ないが、遺物から見て平安時代後期と考えられる。

SB9862 SB9861の西側にあり、2間分しか確認していないため、南側に延びる南北棟と思われる。柱掘形は直径0.4m、深さ0.1m以上の円形を呈する。柱間は2.2m、棟方向は東で南に22度振れる。柱穴から出土した遺物はほとんどないが、SB9861同様に平安時代後期と考えられる。

SA9863 SB9861の北側に位置し、東西3間分検出した。柱掘形は直径0.3m、深さ0.1m以上の円形を呈する。柱間は不揃いで西側から1.85m、2.0m、1.85mで、棟方向は東で南に12度振れる。柱穴から出土した遺物はほとんどないが、平安時代後期の範疇と捉えることができる。

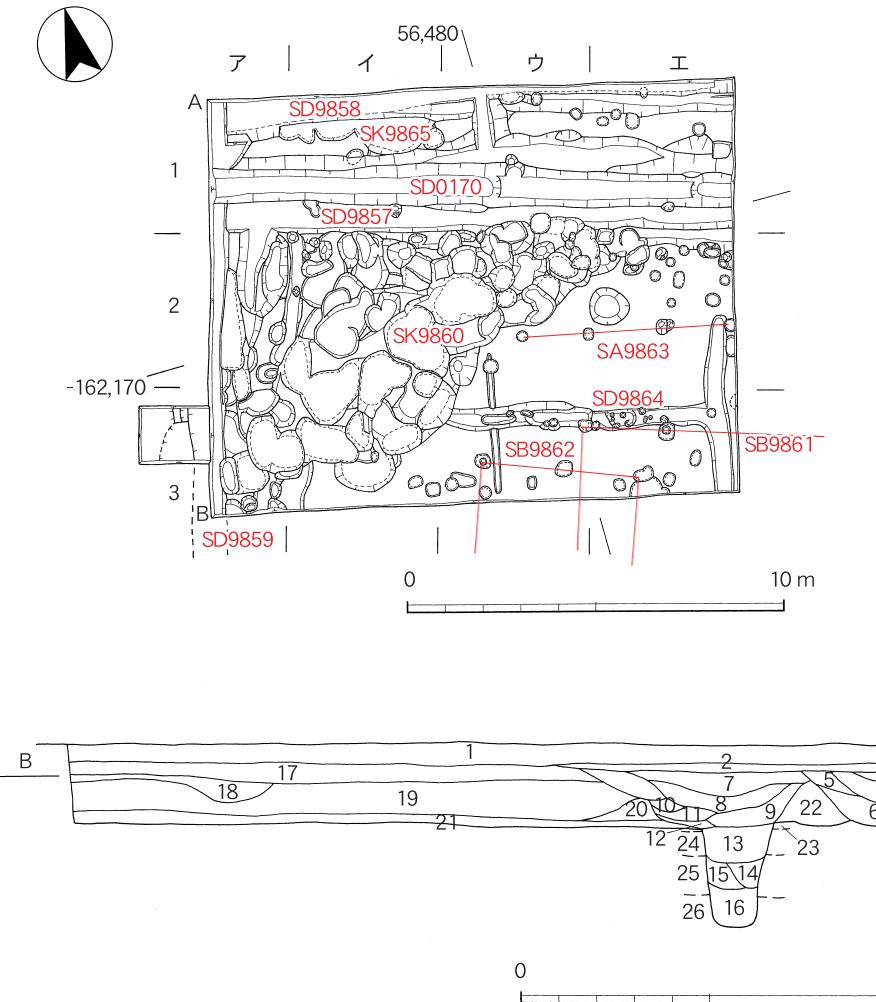
SK9860 調査区西半では、平安時代の東西溝SD9857の南側に東西約9m、南北7m以上の不定型な平面形を持つ大規模な落ち込みが広がっている。溝SD9857や西端の南北溝SD9859より古い。大きく見れば幅4m、長さ7mほどの落ち込みが弧状に繋がっているとも見える。当初は、多数の土坑が重複しているものと推定し、慎重に下げながら、遺構の重複関係を確認したが、重複関係は明瞭にすることはできなかった。

埋土の上半はほぼ同一の堆積土であること、遺物が少ないものの、全域から10世紀前半代の土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・皿などが少量出土したことから、小さな土坑が重複した形状とはなっているが時期的な差はないものと判断し、SK9860と総称することにした。なお、深さは1m以上に達する場所もあり、小土坑の底の一部は確認したが、すべてを完掘してはいない。

SK9865 調査区西北の東西溝SD9857とSD9858の間にあり、3つの土坑が重複する状況を呈し、東側の大きなものは東西約2m、南北1m以上の円形を呈する。深さは0.2m下げるに止めたが、溝の壁面の観察により、深さは0.4m以上あることを確認した。出土した遺物は少なく、10世紀代の土師器小片があるが、土坑埋土の状況は、奈良時代の遺構に多く見られる黒色土系であることから、遺物は混入の可能性が高い。

SD0170 ほぼ同じ位置にある平安時代後期の東西溝SD9857の下で検出した。幅1.1m、遺構面からの深さは東側で0.6m、断面の形状は箱形で、底はほぼ平らな形状を呈する。中央から西側では、溝底が東側の溝底より0.7mほど深くなり、断面はU字形を呈する。

溝の上半を平安時代後期の溝SD9857と重複しているため浅く見えるが、現地表面から溝底までは、東端で1.6（海拔10.2）m、西端で2.4（海拔9.4）mと幅の割には非常に深い。なお、深くなった箇所は地山である黄褐色粘土層の下の砂礫層を掘り抜いており、水はけが非常に良好である。



1 褐灰土10YR4/1 (表土)	17 黒褐土2.5Y3/1
2 褐灰土7.5YR4/1 (床土)	18 黒褐土10YR3/2
3 黒褐土7.5YR3/2	+ 黄橙色粘土粒含む
4 灰黄褐土10YR4/2	SD9858
5 黑褐土10YR3/1	19 黑褐粘質土2.5Y3/1
6 黑褐土7.5YR3/1	20 暗褐土7.5YR3/3
7 灰褐土7.5YR4/2	21 黑褐土7.5YR3/2
8 褐灰土7.5YR4/1	22 黑褐土10YR3/2
9 褐灰土7.5YR4/2	23 黄橙色粘土7.5YR7/8
+ 黄褐粘土粒含む	24 暗黄褐砂礫2.5Y7/6
10 褐灰土5YR4/1	25 淡黄砂礫2.5Y8/3
11 褐灰土7.5YR4/1	26 灰白色砂礫2.5Y8/2
+ 黄橙粘土粒含む	
12 褐灰土10YR4/1	
13 黑褐粘質土10YR3/1	
14 黑褐土10YR3/2	
15 黑褐粘質土10YR3/1	
+ 黄橙粘土粒含む	
16 黑褐粘質土2.5Y3/1	
+ 黄橙粘土粒含む	
SD9857	SD9859
SD0170	地山

第IV-2図 第154次調査 遺構平面図（1:200）土層断面図（1:100）

遺物は全体に少なく、西半分の礫層を抜いた最下層からあまり出土していないが、西半部でも東側の下層と同じ深さにあたる位置からは完形に近い土師器杯・甕などが数個体分出土している。その時期は、奈良時代中頃のものを中心としており、深く掘削した箇所は、この時期までにかなり埋没していることが見て取れる。

SD9857 奈良古道南側溝SD0170とほぼ同じ位置に重複する幅3.0m、深さ0.7mの平安時代後期の溝で、溝底は平らな形状である。

埋土からは、平安時代後期の土師器などの遺物を少量出土していることから、当該期に埋没したと思われる。遺物がほとんど出土していないため、掘削時期を限定することはできないが、平安時代中期頃と思われる土坑SK9860より新しいことから、概ね平安時代後期とすることが出来る。なお、後で述べる南北溝SD9859は、この溝と直行することから同時期に掘削されたものと思われるが、重複関係が見られることから、先にSD9859が埋没した後にも東西溝は使用されていたことが伺える。

SD9858 SD0170の北側にある幅1.1m以上、深さは西端と東端でトレンチを入れ、西端での深さは0.7m、東端での深さは0.8mの溝である。遺物は少なく、山茶椀・土師器などが少量出土しており、鎌倉時代の溝と判断した。

この溝は中央部から東側では枝分かれをするような形態を呈しており、東壁の土層埋土や溝底の深さの状況から、より古い溝の存在も伺えるが、ここでは溝の改修と理解しておく。この古い時期の溝の深さは遺構検出面から0.35mで、出土した遺物がほとんど無いことから、溝の開削時期は不明である。

SD9859 調査区西壁に沿って検出した南北溝で、深さ0.8mで側面は垂直に落ちる。溝幅は不明なため、調査区南端で調査区を西に一部拡張し、溝の幅が1.0mであることを確認した。なお、拡張部の遺構については輪郭を確認するに留めている。

北側は平安時代後期の東西溝SD9857に接続し、遺構検出状況時や断面精査からSD9857の埋没時期より古いことを確認しているが、深さがSD9857とほぼ同じことから、二つの溝は同一時期に掘削された可能性が高い。

落ち込みSK9860より新しく、SD9857より古く、埋

土からは土師器小皿の小片があることから、平安時代後期の範疇に入るものであろう。

SD9864 調査区南東部に位置する東西溝で、幅0.6m、深さ0.1mで、7mにわたり検出した。東端では南北方向の溝に接続しており、重複関係も見られないことから、同一の溝と考えた。南北方向の溝の深さは南側に向かって深くなり南端で0.2mの深さである。また、西端はSK9860と重複しており、土坑より古いことを確認した。

出土した遺物は、土師器の細片が少量出土しており、平安時代中期の範疇に入る遺構であろう。

溝の方位が東西溝SD9857や農道の方位に近似することから、当地域の中を区画する施設の可能性が高く、当該溝のさらに南側に存在すると考えられる掘立柱建物などを囲む区画溝の性格を持つものと考えられる。

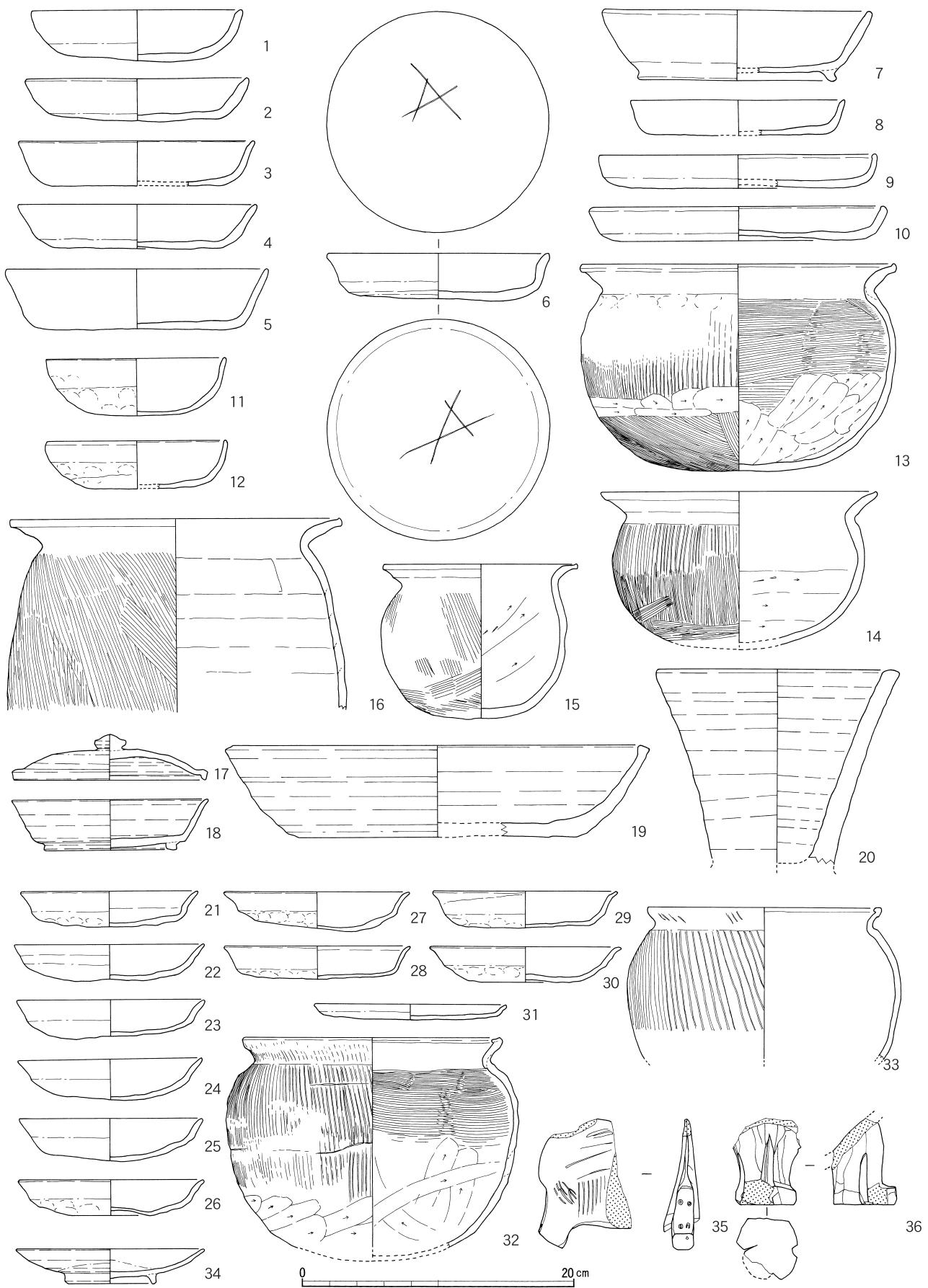
4 出土遺物

土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶椀などが整理箱で約7箱出土しているが、このうちSD0170から出土したもののが4箱である。また、特殊な遺物として土馬や須恵器獸足壺脚部が出土している。

(1) SD0170の出土遺物

全体に出土量は少ないが、SD0170の埋土下層及び最下層（上面）から完形に近い遺物がまとまって出土した。両層からの出土遺物にほとんど時期的な差を認めることができなかったので、ここではまとめて述べることにする。

出土遺物には、土師器杯A・杯B・杯G・皿A・甕A・甕C・鍋A、須恵器杯B・杯B蓋・盤A・すり鉢がある。杯Aは、平らな底部に外傾する口縁部がつくもの（2～6）が主流であるが、椀状のもの（1）も認められる。器面の調整は、全体的に保存状況が悪く、不明確なものが多いが、多くは口縁部をヨコナデし、底部外面をヘラケズリするものと思われる。また、図示していないが、内面に螺旋や放射状の暗文を施す破片もある。なお、杯（6）の底部内外面には、3本の直線が交差するヘラ記号や杯B（7）の外面にわずかながらヘラミガキの痕跡が認められた。皿Aは、口径が15.6cmのもの（8）と20cmほどのもの（9・10）があり、口縁端部の仕上げに若干の差異が認められた。鍋A（13・14）は、器面調整に2種類のハケメが用い



第IV-3図 第154次調査 出土遺物実測図 (1 : 4)

られ、体部上半を粗いハケメ、下半以下に細かいハケメを施す。須恵器杯B（18）は、底部外周からやや内側に角高台が貼り付けられ、高台端部外側で接地する。須恵器盤A（19）とすり鉢（20）は、いずれも巧みなロクロ水挽きで成型されており、器壁が厚く、焼成がややあまいなどの共通点が認められた。

以上的一群は、斎宮土器編年の標識遺構SK1098に近似していることから斎宮Ⅰ期第3段階に相当し、奈良古道の側溝の埋没過程を知る上で貴重な資料となった。

（2）SK9860の出土遺物

小土坑の集積からなる落ち込み状の遺構から土師器杯A・皿A・甕A、灰釉陶器皿などが出土した。杯A（21～30）は、口径が12.8cm～13.8cmの中におさまり規格性に富む。口縁部が強くヨコナデされ、鋭く外反するもので、底部外面はユビオサエの痕跡をよく留める。全体的に器壁は3mm前後と薄く、色調は、浅黄橙やにぶい黄橙を呈するものが多い。皿A（31）は、平らな底部に外反する口縁部がつくもので、平安時代前期の皿の形態的特徴をかろうじて受け継いでいる。甕A（32・33）は、口縁端部が内側に肥厚し、上部に端面をつくるものである。（32）は、体部上半から口縁部にかけて縦方向の粗いハケメを施し、下半から底部は内外ともヘラケズリする。

灰釉陶器皿（34）は、底部をロクロケズリし、灰釉をつけ掛けするもので、折戸53号窯式の古相を呈する。

以上のような土師器、灰釉陶器の特徴から、これら的一群は、斎宮Ⅱ期第4段階の標識遺構S X 6666に近似し、当該期のなかでも古相の10世紀第1四半期におさまるものと思われる。

（3）その他の出土遺物

SK9860から出土した土馬頭部（35）と包含層から出土した獸足壺の脚部（36）がある。土馬は、全体的に扁平で、朱の塗彩痕跡が認められた。目や鼻は細い竹管様の刺突により表現され、これら顔面部はヘラで面取りした前面に集められている。鬚部や頬部は、粗いハケメが施される。

5 総まとめ

（1）奈良古道南側溝について

調査区北側では、現代の農道とほぼ同じ方向をもつ溝が3条以上確認されている。最も古いものはSD9857

の下で確認した奈良時代のSD0170である。これが、調査の当初の目的である奈良古道の南側溝に該当する溝である。また、同じ位置で平安時代のSD9857、その北側で鎌倉時代のSD9858のように、奈良時代から鎌倉時代まで、さらに北側にある農道を含めると現代まで継続して道路として使用されていたことが平成14年度の第139次調査同様にあらためて確認できた。

今回の調査の主な目的であった奈良古道南側溝は、当初の予定どおり検出することができたが、課題についても新たに提起することとなった。

西側で行った第50次調査で確認した奈良古道南側溝SD0170は、溝底は平坦でなく、掘り残したように山状に高くなる箇所や段上に高くなる部分もあり、東側で地表面からの深さは1.4（海拔10.8）m、西側では深さ2.4（海拔9.8）mであることが確認されている。また、第50次調査区から西側100mにある第139次西側調査区での溝底の深さは標高10.6mであり、西から10.6m（第139次西）→10.8m（第50次）→10.2m（第154次）と、全体で見るとなだらかに流れる勾配を確保している。

勾配を確保しているものの、部分的に深く掘削している箇所がある。それは、今回の調査区西側と西側の第50次調査区周辺で、この2調査区で部分的に溝底をさらに1m近くも掘削している。

この溝底を一段下げた目的については、部分的にはあるが、礫層を掘り下げるという作業量の多さ・困難さから見ても何らかの計画を反映していることは、間違いない。遺構検出面での溝の幅は1.2mあり、掘削された当時の地表面も現在とあまり変わらないと思われることと、溝側面の傾斜から見ても地表に表れた当時の溝幅は2mを越えない幅であることが予想される。周辺の地形から見ると溝の南側に当たる地域の雨水は奈良古道の側溝に流れることが想定できる。勾配があまりとれないことから、通常の排水としては使用に耐えても、大雨など急激な増水の場合には道路にオーバーフローすることも予想される。このため、部分的に底を掘削することにより、調整池機能を持たせるとともに、砂礫層を抜いたことにより地下へ雨水を浸透させる目的ではないかと考えることができる。

（2）落ち込みSK9860について

弧状に広がる落ち込みSK9860のような状況は、史

跡東部の方格地割内で行った第80次調査で同じ様な状況を確認している。第80次調査の場所は、北辺を区画する区画溝と東から2区画目の西道路が交わる位置に当たる。特に西道路東側溝と北辺区画溝の交わる場所では弧状に土坑群が帶状に認められた。このようなあり方について明確に説明することは難しいが、調査区西側に直行するSD9859が当該地域を区画する道路側溝であるとするなら、第80次調査と同じ状況を呈する

こととなる。

奈良古道周辺での区画施設については、これまでの調査からは明らかな例は認められていないため断定することは出来ないが、周辺地域において平安時代に地域が区画された可能性があるという指摘にとどめ、今後の周辺での類例の増加を待ちたい。

(4 遺物：倉田直純 ほかは：泉 雄二)

第IV-1表 第154次調査 遺構一覧表

遺構番号	遺構の種別	調査時遺構名	地区	時期	備考
SD9857	溝	溝2上層	ア～エ01	III	
SD9858	溝	溝1	ア～エ01	IV	
SD9859	溝	溝4	ア01～03	II-4	
SK9860	落ち込み	土坑7・8・9・13・14・16・18・19、落ち込み12	ア～ウ02、ア・イ03	II-4	土坑群、SD9857・SD9859より古、
SB9861	掘立柱建物	エ03pit5	ウ・エ03	III	東西1間(2.1m)のみ、棟方向E18°S
SB9862	掘立柱建物	ウ03pit1	ウ・エ03	III	東西2間(4.2m、柱間2.1m等間)、棟方向E22°S
SA9863	掘立柱塀	ウ02pit2・エ02pit5	ウ・エ02	III	東西3間(5.7m、柱間1.85・2.0・1.85m)、棟方向E12°S
SD9864	溝	エ02溝22・ウ03溝23	ウ03・エ02	III	SB9861より新
SK9865	土坑	土坑10	イ01	III	
SD0170	古道南側溝	溝2下層・最下層	ア～エ01	I-3	

第IV-2表 第154次調査 奈良古道南側側溝一覧表(古里地区～広頭地区)

次数	地区	遺構名	幅	深さ	標高	時期	備考
7	古里E	SD8736	0.8～1.2	0.6	11.8	I-3	溝北端
7	古里E	SD8736	—	0.8～1	10.9	I-3	溝南端、凹凸ある深い場所
76-15	県道	SD6366	1.1	1.2	10.4		
139西	6AJ9	SD170	1.1	0.3	10.6	I-2・3	
8-11	Pトレーナ	SD170	1	0.6	10.7		
50	6ACH-H	SD170	1.8	1.4～1.8	10.8		一段深いところで9.8m
139東	L9L9	SD170	1.2	0.8	10.5	I-2・3	
154	L9L9	SD170	1.1	0.6～1.3	10.2		一段深いところで9.4m
8-4	Iトレーナ	SD170	1.1	1.1	9.8		

第IV-3表 第154次調査 出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 3.8	15.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ後 ヘラミガキ?内面ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	口径の3/4		006-05
2	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 3.2	16.0 調整不明、底部一方向のヘラケズリ?	緻密(～1mm の赤色斑粒含む)	やや 不良	黄橙7.5Y7/8	口径の70%	表面の剥離著しい	002-06
3	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 3.3	17.0 口縁部ヨコナデ、 体部外面調整不明内面ヨコナデ	密	やや 軟調	橙5YR6/8	口径の30%		003-03
4	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 3.3	17.4 口縁部ヨコナデ、 体部外面ヘラケズリ?内面ナデ?	密	良	橙5YR6/8	全体の1/2	器面の残り悪い	001-06
5	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 4.4	19.0 口縁部ヨコナデ?、体部外面調整不明 (ヘラケズリ?)内面ナデ?	密	良	橙5YR7/6	口径の1/2	器面の剥落著しい、 残り非常に悪い	001-07
6	土師器	杯A	SD0170	口径 器高 3.4	16.2 口縁部ヨコナデ、 体部外面ヘラケズリ・一方向のヘラケズ リ後ヘラミガキ内面ヨコナデ	密	良	外面: 橙5YR7/8 内面: 黄橙7.5YR8/8	口縁部を若干 欠く	内外面に線刻、外 面ミガキ幅2.0～3.0mm	004-01
7	土師器	杯B	SD0170	口径 器高 5.2	19.4 調整不明	緻密(～1mm の赤色斑粒含む)	やや 不良	橙5YR7/8	全体の30%	表面の剥離著しい、 外面にヘラミガキの 痕跡がわずかに認め られる	002-05
8	土師器	皿A	SD0170	口径 器高 2.6	15.6 口縁部ヨコナデ、体部外面調整不明(ヘ ラケズリ?)	密	良	橙5YR7/6	全体の1/2	器面の残り悪い	006-06
9	土師器	皿A	SD0170	口径 器高 2.5	20.2 口縁部ヨコナデ、 体部外面内周にヘラケズリ内面ハケ	密	良	橙7.5YR7/6	全体の1/2	器面の残りやや悪い	001-08
10	土師器	皿A	SD0170	口径 器高 2.5	21.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ヨコナデ	緻密(～1mm の赤色斑粒含む)	良	橙5YR7/6	全体の50%	底部器面の残り悪い	002-02
11	土師器	杯G	SD0170	口径 器高 4.2	13.0 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	粗(～2mmの 砂粒含む)	良	浅黄橙10YR8/3～に ぶい黄橙10YR7/3	全体の80%	外底面に板目痕	002-03
12	土師器	杯G	SD0170	口径 器高 3.5	13.0 口縁部ヨコナデ、 体部外面オサエ後ナデ内面ヨコナデ	やや粗(～1mm の砂粒含む)	良	灰白10YR8/2	全体の60%	外面に粘土ひも巻き 上げ痕	002-04
13	土師器	鍋A	SD0170	口径 器高 5.2	22.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ・ハケ・ ヘラケズリ内面ハケ・ヘラケズリ	密	良	黄橙10YR8/6	全体の40% 口径は30%	外面は一部風化が著 しい	009-01
14	土師器	鍋A	SD0170	口径 器高 11.5	20.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ内面ナデ?・ ヘラケズリ	密	良	浅黄橙10YR8/3 一部被熱のため淡赤橙 2.5YR7/4	底部中央を欠く	口縁部にうすくスス 付着、器面の残りや や悪い	007-02
15	土師器	甕A	SD0170	口径 器高 11.2	14.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ内面ヘラ ケズリ・不明	石英・長石粒 含む	良	外面: にぶい褐7.5YR 6/3・一部にぶ い橙5YR7/4 内面: 灰褐7.5YR5/2	ほぼ完形	器面の残り悪い、外 面に一部スス付着、 底部に線刻	007-01
16	土師器	甕C	SD0170	口径	24.0 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 板ナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部と上半 部のみ	器面の残り悪い、内 面に粘土ひも巻き上 げ痕	008-01
17	須恵器	杯B蓋	SD0170	口径 器高 3.3	13.9 体部ロクロナデ、外面頂部ヘラケズリ、 ハリツケナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	口径の50%		003-02
18	須恵器	杯B	SD0170	口径 器高 底径 3.7 9.3	14.2 体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ・貼 付高台	密	良	黄灰2.5Y6/1	底部約60% 口縁部ごくわ ずか		003-04
19	須恵器	盤A	SD0170	口径 器高 底径 6.7 20.3	29.7 体部ロクロナデ、底部ヘラ切り未調整 (ロクロ左回転)	密(～1mmの 砂粒含む)	やや 軟調	灰白7.5Y7/1	口径の20%		003-05
20	須恵器	すり鉢	SD0170	口径 残高 14.3	17.1 ロクロナデ	密(1～4mmの 砂粒含む)	やや 軟調	外面: 灰白5Y7/1 内面: 灰5Y6/1	底部を欠く (底部以外完 形)		002-01
21	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.6	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ? 内面調整不明	密(～1mmの 砂粒含む)	良	外面: 橙7.5YR7/6 内面: 浅黄橙7.5YR8/ 6	全体の70%	外面の摩耗著しい	005-06
22	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.7	13.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口径の2/3	器面の残りやや悪い	001-01
23	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.8	13.6 口縁部ヨコナデ、 体部外面ナデ・ユビオサエ内面ナデ?	密	良	橙5YR6/8	全体の2/3	器面の残り悪い	001-02
24	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 3.0	13.4 口縁部ヨコナデ、 体部外面ナデ・ユビオサエ内面ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	全体の1/2	器面の残り悪い	001-03
25	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 3.1	13.3 口縁部ヨコナデ、 体部外面ナデ内面ナデ	長石粒を 若干含む	良	口縁部: 明黄褐10YR 7/6 底部: 黒N1.5/	全体の1/2	器面の残り悪い、 口縁部は多少いびつ	001-04
26	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.6	13.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	全体の40%		006-02
27	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.4	13.4 口縁部ヨコナデ、 体部外面オサエ後ナデ内面ヨコナデ	密(～2mmの 砂粒少量含む)	良	浅黄橙10YR8/4	全体の90%	外面の剥離著しい	005-03
28	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.4	13.4 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面ヨコナデ	密	良	外面: 橙7.5YR7/6 内面: 黄橙7.5YR8/8	全体の40%	器面の残り悪い	005-05
29	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.7	13.3 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面調整不明	密(～1mm砂 粒少量含む)	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の80%	外面に粘土接合痕	005-10
30	土師器	杯A	SK9860	口径 器高 2.6	13.7 口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナデ 内面調整不明	密	良	外面: にぶい黄橙10Y R7/4 内面: 浅黄橙10YR8/4	全体の50%		005-09
31	土師器	皿A	SK9860	口径 器高 1.1	14.0 口縁部ヨコナデ、 体部外面ナデ・ユビオサエ内面ナデ	密	良	浅黄橙7.5YR8/6	全体の1/2	器面の残り悪い	001-05
32	土師器	甕A	SK9860	口径 残高 15.5	18.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ヘラケ ズリ内面ハケ・ヘラケズリ	密(～1mmの 砂粒含む)	良	外面: 灰黄褐10YR5/ 2 内面: 灰橙10YR8/6	口径の70%	外外面に粘土接合痕、 外表面一部にスス付着	010-01
33	土師器	甕A	SK9860	口径	17.0 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・横方向 のヘラケズリ?内面ナデ?	密	良	外面: 黄灰2.5Y5/1 内面: 黄灰2.5Y4/1	全体の1/4 底部を欠く		006-03
34	灰釉 陶器	皿	SK9860	口径 器高 底径 6.2	13.6 体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼 付高台	密	良	釉: 灰オリーブ7.5Y5 /3 素地: 白灰2.5Y7/1	全体の30%	外外面に灰釉ツケガ ケ	005-01
35	土製品	土馬	SK9860	顔面長	3.4 顔部ヘラによる面取り・目鼻は竹管刺突、 体部ナデ・ハケ	密	良	浅黄橙10YR8/4 朱: 明赤褐5YR5/8	頭部のみ	目・鼻は竹管刺突、 体部に朱付着	008-02
36	須恵器	獸足壺	包含層	高さ	6.0 ナデ	密	良	灰5Y6/1	脚部のみ	一部自然釉付着、脚 部三方にヘラによる 刻み	007-04

写真図版 IV-1 第154次調査 遺構

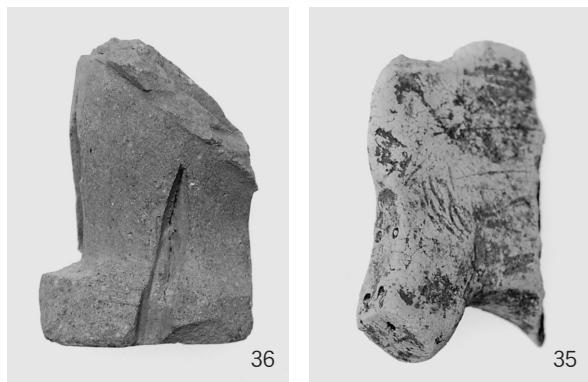


調査区全景（西から）



SD0170（東から）

写真図版 IV-2 第154次調査 遺物



V 第156次調査 (6AR10 西加座南地区)

1 はじめに

平成19年度の計画調査は、方格地割の柳原区画の解説に主力を置いて実施している。柳原区画は第152次調査の章でもふれているが、斎宮台地の上の、2条の深い谷に北と南をはさまれた小島状の微高地を占地している。特に北側の谷は、方格地割の西端近く、上園北区画・宮ノ前北区画のエリアに端を発し、東流して方格地割の東限を形作るエンマ川に接続する、比較的規模の大きい浅谷で、現代でもしばしば大雨により排水が滞りオーバーフローする部分である。この谷にあたる、柳原区画の北側は第152次調査区の北端あたりから1m近くの段差で落ち込んで、現在休耕田となっている低地になる。この部分の遺構の残存状況、ひいては区画の北限の道路の状況については、現在判断のための調査データがない。唯一この部分に調査の及んだ第8-10次のトレンチ調査では、後世の土取りなどで遺構面が良好に遺存していない可能性もうかがわせる。一方、柳原区画を理解するためには、ここが自然地形の谷地にあたることから、方格地割の区画道路が実際に施工されているかどうかも解明する必要がある。こうした課題を解決する必要から、柳原区画北限部の調査を計画に加え、今年度は調査の可能な第156次調査を実施した。調査面積は70.0m²で、調査期間は平成20年1月18日から2月15日である。

2 地形と層位

第156次調査区は、柳原区画の北東隅近くにあたり、区画の北を限る区画道路が想定される位置である。東に約15mのところで、広域圏道路の造成に先立って実施した第10次調査では、柳原区画北東隅の交差点部分とみられる道路側溝がみつかっている。調査地の現況は標高9.9~10.0mの休耕地である。調査区北部では、地表面から深さ約0.15~0.2mで、史跡内の各所で窪地などに堆積している黒色シルト質壤土層に達し、この上から掘りこまれている溝を検出したため、この地層面の上の遺構検出に努めた。ただし、調査区南半は大形の土坑の掘削などで搅乱されていたため、明黄褐

色の粘質土まで掘り下げて検出した部分もある。

調査区北部では、層位は黒褐色壤土の耕作土（表土）の直下で黒色シルト質壤土（遺構検出面）となるが、南半では間に表土より固結度の高い黒褐色壤土が最大で厚さ0.3mみられ、ここからの出土遺物を包含層出土として取り扱った。

3 遺構

検出した遺構は土坑2基、溝4条である。

(1) 方格地割区画道路に伴う遺構

調査区南東隅で検出したSD9871がある。調査地のすぐ南が盛土された多目的広場となっているため、調査範囲をさらに拡張して全体を確認することができなかつたが、柳原区画北限の区画道路の南側溝の一部とみられる。深さ約0.2mまで調査し、Ⅱ期のものとみられる土師器杯Aの破片が出土した。

(2) 区画道路上の土坑

調査区の南半で2基の土坑を検出した。

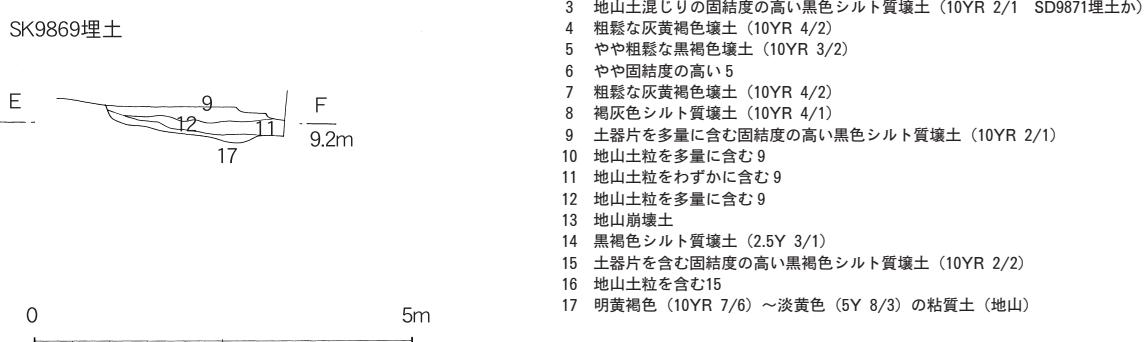
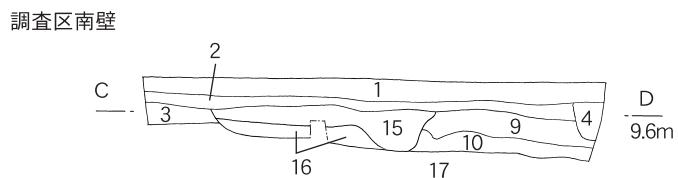
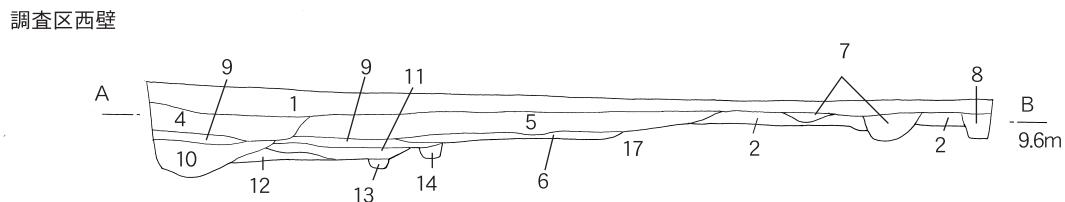
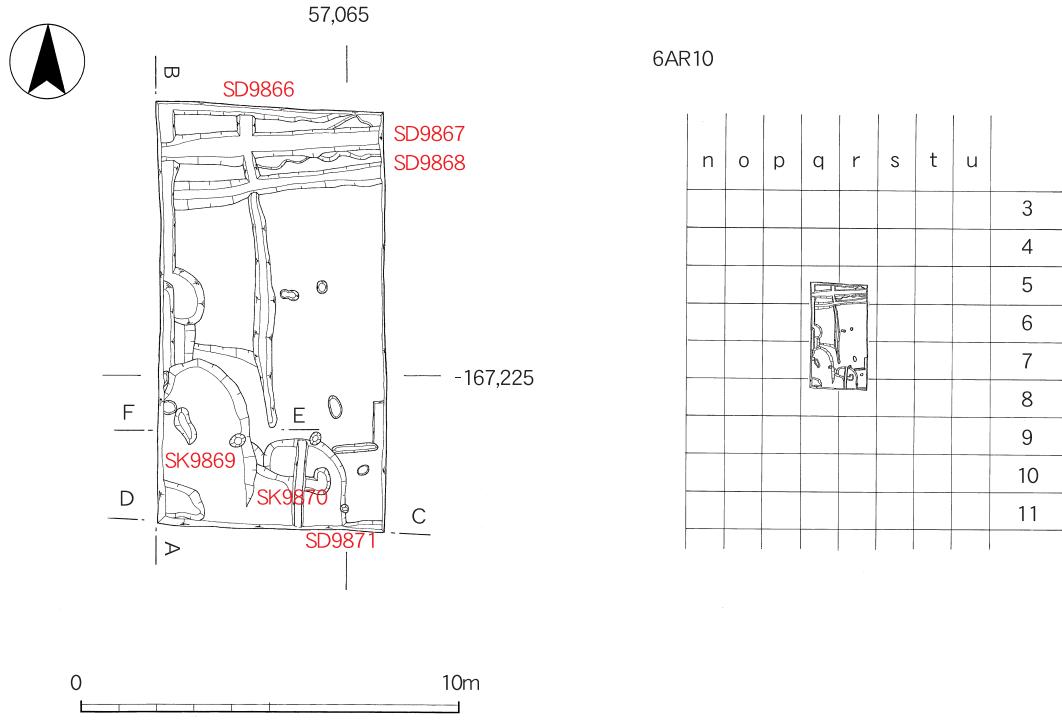
SK9869 西と南が調査区外まで伸びて全体の規模は分からぬが、検出した範囲では4.3×2.5m、深さ約0.5mの長楕円形のすり鉢状の土坑である。南西隅を後世の搅乱で一部壊されている。土師器供膳具を中心に、整理箱で7.5箱分の多量の遺物が出土した。後述するように墨書き器を多く含む点も注目される。土器類の形式からⅡ-2期のものと判断される。

SK9870 SK9869の東に接して検出された土坑で、これも調査区の南まで伸びていくために全体像は分からぬが、検出した範囲では2.4×2.5m、深さ約0.35mの略円形の土坑である。土師器供膳具を中心に整理箱で2箱分の土器類が出土した。これも時期的にはⅡ-2期に位置づけるが、埋土の重複関係からSK9869より新しいと判断される。

(3) その他の遺構

Ⅲ期以降のものとみられる溝を調査区の北部で3条検出した。

SD9866 調査区北端にかかる東西溝である。北縁が調査区外にあるため、全体の規模は分からぬ。深さ約0.15m、検出長は4.5mである。土師器片、陶器片が



第V-1図 第156次調査 平面図 (1:200) グリッド図 (1:800) 土層断面図 (1:100)

出土している。Ⅲ期以降のものである。

SD9867 SD9866の南で検出した、幅0.7~1.0m、深さ約0.15~0.3mの断面U字形の溝である。溝底高では東から西に傾斜している。土師器片、ロクロ土師器皿、陶器片が出土している。これもⅢ期以降のものである。
SD9868 SD9867の南で検出した幅0.5~0.8m、深さ約0.2mの浅いカマボコ形の溝である。溝底の高低差はない。土師器片、灰釉陶器片が出土している。

4 出土遺物

第156次調査全体では、一次整理の段階で整理箱で12箱の遺物が出土している。今回は最も出土量が多い土坑出土のものを中心に概述する。

(1) SK9869出土遺物 (1~19)

土師器杯A・椀A・皿A・高杯・鉢・甕・長胴甕・鍋B・甕・竈、須恵器蓋・盤・甕、志摩式製塙土器、砥石片、焼粘土塊が、整理箱で7.5箱分の土器類が出土している。土師器杯Aは口径14~16cmのものがあり、斎宮跡II-2期の基準資料のSK5200のものと比べてもやや器壁が厚く、底部は平坦な作りになっている。(3)の底部外面には太い筆跡で漢字とみられる墨書があるが判読できない。(5)の底部外面には焼成後の線刻で「*」を描き、その後縦方向の数条の引っかき傷のような線刻を施す。椀Aは口径13~17cmで、(6)のように内面に放射状・螺旋状の暗文を施すものもある。(9)の外面には多数の漢字とみられる墨書がある。断片的には「奉」「御」「男」ないし「夫」また「六」のように見える部分があるが、赤外線写真でみても判読できなかった。高杯(15)にも脚柱部に墨書があり、「奉」ないしは「本」とみられる。土師

器鉢は図示した(16)の他にも2~3個体分の破片がある。土師器煮炊具の関係では、図示したものの他に竈の破片が多数みられた。須恵器盤(19)体部外面に細い筆致で「謹」を墨書し、もう一字を頭をつきあわせるようにして書いている。これも言扁の文字とみられ、「謹」の可能性がある。また、底部外面にも木扁の漢字が書かれているが、破損のため判読できない。

(2) SK9870出土遺物 (20~23)

土師器杯A・皿A・鉢・甕・鍋B・甕・粗製鉢、須恵器杯・甕が整理箱で2箱分出土している。内容的にはSK9869とほぼ同じである。埋土の重複関係では新しいと判断されたが、土器の形式の上では差は看取できない。(23)のような土師器の平底の鉢が、この土坑でもみられる。SK9870では墨書土器は見つからなかった。

(3) その他特記すべき遺物 (24・25)

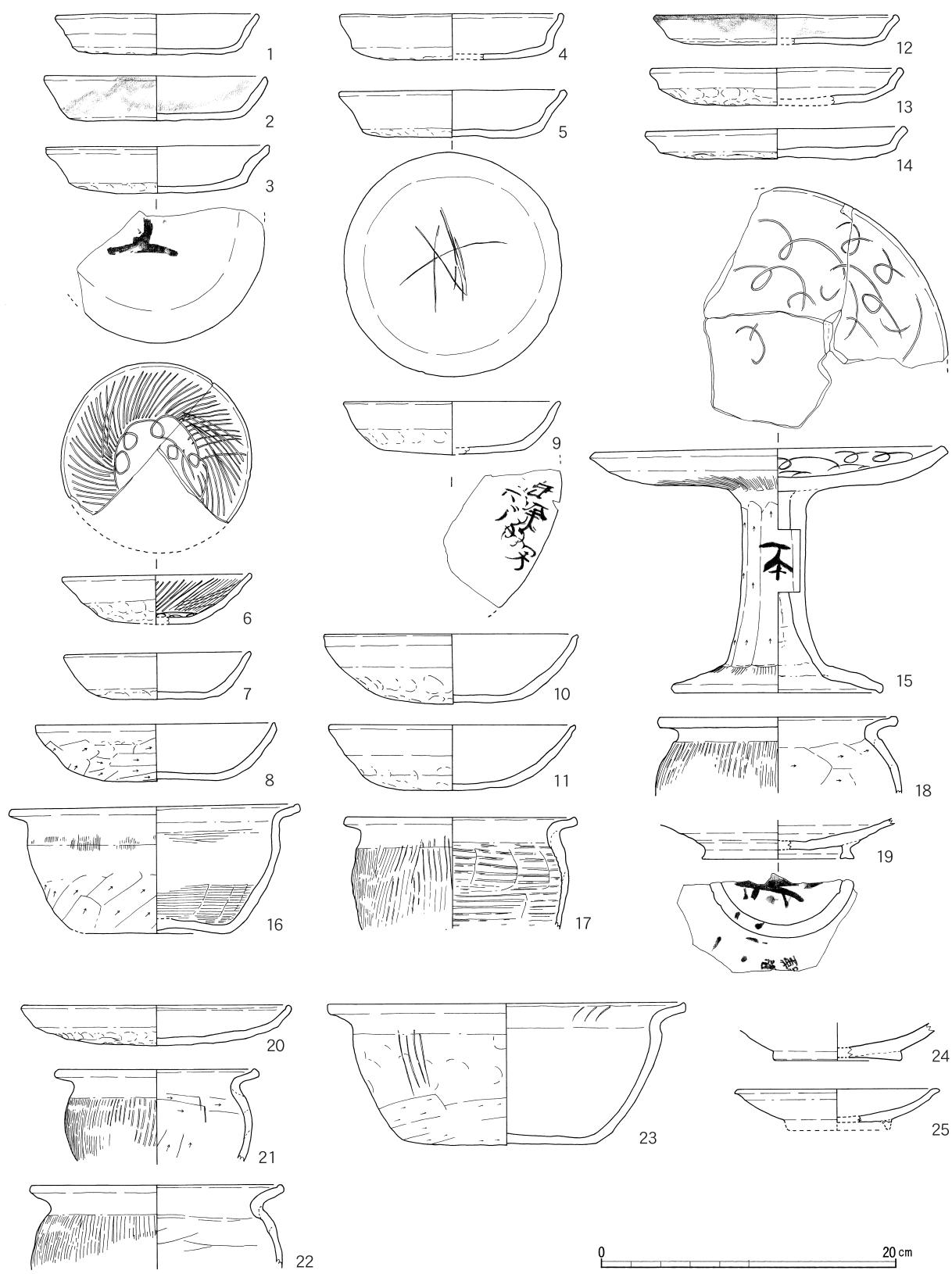
小面積の調査ながら、緑釉陶器が11片出土している。(24)は貼付けの平高台の椀で、硬質の胎土をもつ。重ね焼きのためか、内外面とも底部でにぶい黄橙色、体部でやや緑の混じった暗灰白色と異なる発色をしている。(25)貼付輪高台の皿で、猿投産とみられる。

5 まとめ

第156次調査の目的のうち、区画道路の確認については、第10次調査で確認された交差点から延長していく東西区画道路の南側溝の想定位置でSD9871を検出した。極めて遺構の一部の検出ではあるが、出土遺物もⅡ期の土師器杯であり、これを側溝の一部としてもよいと考える。少なくとも、交差点から西に約20mまでは道路の施工がなされていたことが判明した。第

第V-1表 第156次調査 遺構一覧表

遺構名	遺構の種別	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
SD9866	溝	溝4	P 5・Q 5	III~	土師器片 陶器:椀
SD9867	溝	溝2	P 5・Q 5	III~	土師器片 ロクロ土師器:皿 陶器:椀
SD9868	溝	溝6	P 6・Q 5	IIIか	土師器片 灰釉陶器:皿
SK9869	土坑	土坑2	P 7・P 8	II-2	土師器:杯A・椀A・皿A・高杯・鉢・甕・長胴甕・鍋B・甕・竈 須恵器:蓋・盤・甕 製塙土器 砥石 烧粘土塊
SK9870	土坑	土坑1・3	P 7・P 8・Q 7・Q 8	II-2	土師器:杯A・皿A・鉢・甕・鍋B・甕・粗製鉢 須恵器:杯・甕
SD9871	溝	溝7	Q 8	II-1~2	土師器:杯A 区画道路の北側溝



第V-2図 第156次調査 出土遺物実測図 (1:4)

第V-2表 第156次調査 出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 2.8	13.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約40%	器表面の磨耗著しい	002-03
2	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.1	15.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR7/8	ほぼ完形	内外面にスス・油煙付着、外底面に被熱痕	001-01
3	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.2	15.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口径の1/3	外底面に墨書「上」か?	005-03
4	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.1	15.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明褐7.5YR5/6	全体の約30%		001-06
5	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.3	15.4 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/8	完形	外底面に焼成後の線刻	001-02
6	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.4	12.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ後螺旋・放射状暗文	密	良	明赤褐5YR5/8	全体の60%		003-01
7	土師器	椀A	SK9869	口径 器高 3.2	12.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	ほぼ完形	外底面に粘土接合痕	001-03
8	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.8	16.1 口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ内 面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	全体の約70%		
9	土師器	杯A	SK9869	口径 器高 3.6	14.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	明赤褐2.5YR5/6	口径の約1/4	外面に墨書「奉」? 「子」?「男」?内 面に黒色物付着	005-01
10	土師器	椀A	SK9869	口径 器高 4.8	17.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約70%	内面に長さ8.7cmの 沈線一条	002-04
11	土師器	椀A	SK9869	口径 器高 4.4	16.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の90%		002-05
12	土師器	皿A	SK9869	口径 器高 2.1	16.6 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/6	外外面に油煙付着、 外底面に粘土接合痕	001-05
13	土師器	皿A	SK9869	口径 器高 2.6	17.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/3弱		002-06
14	土師器	皿A	SK9869	口径 器高 2.2	17.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約80%	外底面に粘土接合痕	001-04
15	土師器	高杯A	SK9869	口径 脚台径 器高 16.6	24.2 脚部：口縁部ヨコナデ外面ナデ内面ナデ 後螺旋状暗文、脚部：口縁部ヨコナデ外 面ハケ・ヘラケズリ内面ナデ・シボリ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約70%	脚部外面に墨書「奉」 か?	004-01
16	土師器	鉢	SK9869	口径 器高 底径 10.7	19.6 8.7 10.7 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ、底部ヘラケズリ	やや砂粒多い	良	明赤褐2.5YR5/8	全体の約70%	外外面の磨耗著しい、 内面が一部黒変、二 次的な被熱により赤 化、脆弱化する	003-02
17	土師器	甕	SK9869	口径 残高 7.6	15.4 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口径の1/3強	口縁部外面は被熱で 赤化、外面にスス付 着、内面に黒色物付 着	002-01
18	土師器	甕	SK9869	口径 残高 5.2	16.2 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 板ナデ	密	良	にぶい黄橙7.5YR6/4	口径の1/4	外面は被熱で赤化、 内面に黒色物付着	002-02
19	須恵器	盤	SK9869	高台径 残高 2.7	10.4 体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼 付高台	密	良	灰黄褐10YR5/2	高台径の 1/3強	外面に墨書「謹」ほ か、底部外面に墨書	005-02
20	土師器	皿A	SK9870	口径 器高 2.7	18.2 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	全体の約40%	口縁部に凹線	006-02
21	土師器	甕A	SK9870	口径 残高 6.3	13.8 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 板ナデ	密	良	外：にぶい黄橙10YR 6/3 内：にぶい黄橙10YR 7/3	口径の約1/4	外面に被熱による赤 変、多量のスス付着	006-03
22	土師器	甕A	SK9870	口径 残高 5.7	17.2 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面 ナデ	密	良	外：にぶい橙7.5YR7/ 4 内：にぶい黄橙10YR 7/3	口径の約1/4	外面に被熱による赤 変	006-04
23	土師器	鉢	SK9870	口径 器高 底径 13.1	24.1 9.6 13.1 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケ ズリ	密	良	橙5YR6/8	全体の約70%	焼成後外面に線刻四 条、内面に線刻三条	003-03
24	縄輪陶器	椀	包含層	高台径 残高 2.5	8.2 体部外面ロクロナデ内面ナデ後ヘラミガ キ、底部ロクロケズリ、貼付平高台	密	良 (硬質)	釉：根岸色、にぶい黄 橙10YR7/4 素地：灰灰2.5Y5/1、に ぶい橙7.5YR7/4	高台径の1/8		005-05
25	縄輪陶器	皿	包含層	口径 残高 2.3	13.8 口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ 内面ナデ後ヘラミガキ、底部ロクロケズリ 貼付平高台	密	良 (硬質)	釉：ねこやなぎ色 素地：黄灰2.5Y6/1	口径の1/8		005-04

156次調査区の西からは自然地形ないしは後世の土取りによる地形上の落込みがあり、第8－10次のトレンチ調査の北端でも土取りの痕跡が確認されているものの、方格地割の施工当初には、柳原区画の北限の道路を作る意図はあったことが確認されたといえる。今後の区画内の遺構配置などの検討を進めるうえで貴重な発見であったといえるだろう。

さらに、平安時代の斎宮を考える上で大きな課題となるのは、今回の2つの土坑の存在であろう。出土遺物はいずれも良好なII－2期の一括資料といえ、編年研究上の蓄積を得ただけでなく、区画道路の上に特にSK9869は想定される区画道路の中央付近まで広がっているため、これらの土坑を掘ることは道路機能の廃止、少なくとも大きな後退となつたはずである。すでに研究にあるように、これまでの発掘調査で区画道路上に掘削された土坑は、II－2期では37件あり、他の

どの時期と比べても多い。II－2期は、土器編年上の実年代観で西暦で820年から850年頃に想定されているが、この時期の斎宮での大きな事件としては、天長元年（824）の度会斎宮（現伊勢市小俣町）への移転があり、こうした道路面での土坑の掘削は、II－1期に造営されて30年余りの、方格地割によって形作られている当地多気の斎宮を完全に放棄した上で、度会に移転しようとする強い意志があったことの現われではないかと考えられるのである。今後、調査の進展に伴い、柳原区画内の建物の変遷も詳細に検討していくことになるが、こうした極めて大きな画期との連動も確かめていきたい。

（大川勝宏）

《参考文献》

- ・大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館研究紀要十七』2008

写真図版 V-1 第156次調査 遺構(1)



調査区全景（北から）



SD9866～9868（東から）

写真図版 V-2 第156次調査 遺構(2)

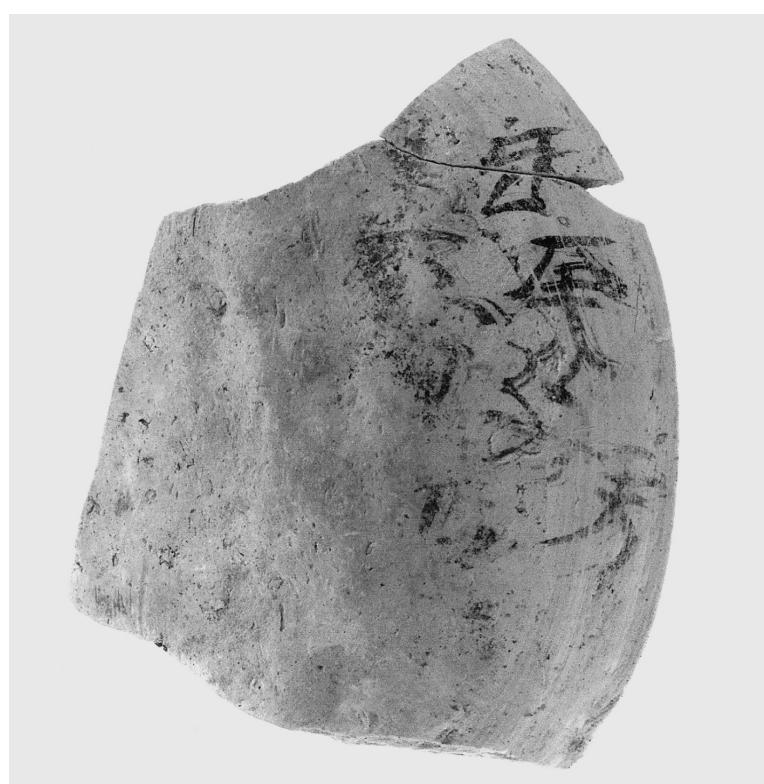


SK9869・9870（東から）



SD9871（西から）

写真図版 V-3 第156次調査 遺物



報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせいじゅうきゅうねんどはくつちょうさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成19年度発掘調査概報							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	倉田直純・泉雄二・大川勝宏							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-7027							
発行年月日	西暦 2009年 3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ~ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ~ 136° 37' 37"	20070709 ~ 20080319	2,625m ² (第152次) 744m ² (第153次) 157m ² (第154次) 70m ² (第156次)	学術調査
斎宮跡第152次	官衙	奈良 平安	掘立柱建物 土坑・溝 奈良古道	土師器 灰釉陶器 奈良古道	須恵器 綠釉陶器 貿易陶磁	柳原区画の 中心部		
斎宮跡第153次	官衙	奈良 平安 鎌倉以降	掘立柱建物 奈良古道 溝・土坑	土師器 灰釉陶器 奈良古道	須恵器 綠釉陶器 貿易陶磁	柳原区画の 中心部		
斎宮跡第154次	官衙	奈良 平安	奈良古道 掘立柱建物 溝・土坑	土師器 灰釉陶器	須恵器	奈良古道 南側溝		
斎宮跡第156次	官衙	平安	区画道路 土坑	土師器	須恵器	方格地割の 区画道路側溝 と道路上土坑		
要約	第152次・153次調査では、平安時代を中心とする史跡東部の方格地割中枢部にあたる柳原区画の調査を行い、三面庇の大形建物SB1080のほか、四面庇付建物3棟を確認し、当区画が平安時代斎宮の重要な地点であったことを確認した。また、第154次調査では、史跡西部の飛鳥～奈良時代に成立した古道の南側溝を確認した。第156次調査では、柳原区画の北辺道路の側溝の一部と、区画道路をこわす9世紀前葉の土坑を確認した。							

史跡 斎宮跡

平成 19 年度

発掘調査概報

2009年3月24日

編集・発行 斎宮歴史博物館

印刷 伊藤印刷株式会社
